

して吾人の自然の衝動(impulses)を以て唯利己的傾向のみを具へたるものとは見ず。其の論に曰はく自利的性情の自然に吾人に具はるが如く社會的性情も亦同じく吾人に自然なるものなり、加之通常吾人の主我的なりと考ふる物欲衝動等も亦決して自己の快樂を思ひ浮かべて其を目的とすといふ意味にて利己的のものにあらず、吾人の個々の慾望はそれ／＼に其の向かひ行く事柄を有するものにして例へば食欲は元來食物に向かひ行くものなるが如し。斯く吾人には元來それぞれ的事物を欲するの心ありて其の慾望を満足せしむる所に快樂を覺ゆるなり、而して其れ等自然に具はる個々の慾望の元來の成り立ちより云へば快樂を目的として之れに向かひ行くといふよりも寧ろ先づ或事物に向かひゆき其れを得てそこに快樂を覺ゆるなり。吾人は吾が情慾及び種々の情緒の導くがまゝに任すれば却て吾が利益を失ふに立ち至ることあり。されば通常主我的なりと稱せらるゝ此等諸々の性情は吾人の一切の行爲を支配するものとしての自愛心と區別せられざるべからず、眞實の自愛心を以て自己の一切の行爲を統御し居るといふ意味にては吾人は決して自然のまゝに於いて、自愛的のものに非ず、吾人が自然に

爲す所にしてかゝる自愛心の指示に合はざるもの甚だ多し。

然らば吾人が行爲全軀の上に臨みて其を統御すべきものは何なるべき。ペトラはこゝに二つの者を挙げ來たる。曰はく良心(Conscience)曰はく自愛心(Self-love)是れなり。彼れは此の二つを以て共に同等にして最高權を有するものと見たり。こゝに謂ふところの良心は吾人が専ら他人に對して盡くすべきもの／＼の義務を示すもの、また謂はゆる自愛心は各自の眞實の利益を計るものにして唯一時の感情或は慾望に従ひ行くの謂ひに非ざるを以て之れを合理的自愛心(Reasonable self-love)ともいふ。ハドラーの意は決して自愛心を以て良心の下に隸屬すべきものと見たるにあらず、彼れは却て吾人が感情に燃やされず靜坐默考すれば(When we sit down in a cool hour)一行爲が自己の幸福を來たすか又は少なくとも之れに反せざることを認めずしては其の行爲を爲すべき所以を解すると能はずと云へり、一言に云へば彼れは良心よりも寧ろ自愛心を以て基本的のものと見たるなり。故に若し良心の示す所と自愛心の示す所とが相背反することあらば吾人は自愛心の示す所に反きて良心の指揮に従ふべき理由なきなり。されど良心の示す所が實に

吾人の眞正の利益に反するとあるかに就きては吾人は決して其の如きとあるを断言し得べからず。蓋し利己的計算は甚だ正確ならざるものにして吾人が一見して我が利益なりと思ふとが果たして眞に吾人の利益となるかは断して言ひ難し。之れと異なりて良心の命令は明瞭に且つ確實なるものなり、故に實際上吾人の行爲を統御する上より云へば確實なる命令は宜しく比較的に確實ならざる命令の上に立つべく、而して其の反對の確實なる證據の與へられざる限りは明瞭なる良心の命令に従ふとが決して吾人の眞正の利益を害ふものにあらざることを信じて不可なく、而してかゝる證據の與へられ得ざることは已に上に云へるが如し。』

ペトラーが吾人の良心を言ふや一千七百二十六年に出版せる其の説教集（"Sermon"）に於いてはなほ其の指示と博愛との間に明瞭なる區別を爲さずして、良心の指示せる所は要するに社會一般の爲めになるとに在るが如く見たり、即ち此の點に於いて尙ほ彼れはシヤツペリー等の所説に同意したるなり。されど彼れは良心を説きて其が吾人の義務として指示する所は道理に合ひ居るものなりとは云へるものからクラークの説けるが如くに之れを若干の道德上の究極的原理に

歸せしむることを力めずして専ら吾人が實際言はゞ常識に於いて、道德上の義務として認め居ることを其のまゝに認容せんと力め、而して其の結果として漸々各個人が實際良心の指示として思ひ浮かぶることの必しも博愛と同一なるものにあらざることに着眼し來たれり。以爲へらく吾人の最も嫌惡する不義理、邪淫若しくは殺人罪の如きものも吾人が事實上確實に認め得る限りに於いては必しも一般の不幸を來たすと断言すること能はさるのみならず時には却て幸福を來たすこととの多き場合も無しとはいふべからざるが如し。是に至りて良心の直接に指し示す事柄と一般の幸福を根據として行ふべきものと見る事柄とは相分かるゝものとなれり。さきに一般希臘の道義學者等に於いては理性と名づくる唯一つの統御者のみ説かれたりしが近世に至りては社會と個人との對峙が明かに自覺さるゝことゝなれると共に、倫理學上の根本思想に著大なる變化を生じ來たりて二つの支配者即ち自己の福利及び社會一般の福利といふ二標準が相別かるゝに至れり、而も英國の倫理學者等に於いてペトラーに至るまでは其の對峙は存在しながら未だ際立てゝ云ひ現されざりしが彼れに至りては最も明瞭に言ひ

現され、また一般社會を利するといふこと、良心の道德上の指示に従ふと云ふこと、は彼れに至りて相別かたることとなれり。後に益盛ならんとする直覺説と功利説との論争は已にこゝに胚胎せりといふ可きなり。

〔七〕 ショップベリイ先づ之れを唱へハッテン更に之れを開發したる意見に従へば吾人は道德官によりて直ちに我がもろくの感情及び動機を嘉賞し或は非難し而して道德官の褒貶する所は主として吾人の行爲を起す種々の情緒其のものにして行爲の結果に非ず。此の點に於いてヒュームは異なりたる説を唱へたり。其の意に以爲へらく吾人の嘉する所はもと吾人の行爲の有利なる結果に在り、吾人が博愛の行爲を嘉するは其の行爲が利福を來たすがゆゑなりと。尙ほ曰はく吾人の嘉するところはものは唯博愛のみにあらず、正直と云ひ忠義と云ひ道德上みな吾人の嘉賞する所にして又皆博愛と相列ぶべきところのものなり、而して吾人が此等を嘉せざるを得ざる理由は此れ等が凡べて其れらの徳を有するもの自身或は他の者に快樂を來たすが故なり。一言にして云へば吾人が徳行を嘉するの理由即ちショップベリイの謂はゆる道德官の基づく所は其の行が何等かの人に

快樂を來たすが故なり。吾人が善しとして嘉し又は惡しとして斥くるの理由は究竟すれば快感を興へ或は不快感を興ふといふことに歸せざるべからず、快樂をも苦痛をも興ふることなき事物に善惡の區別の存在すべくもあらず、之れを譬ふれば恰も感官を有せざるものに取りて事物の感官上の性質の存せざるが如きなり。

然れども吾人の嘉する所は必しも自己に快樂を來たすもののみならず己れの利福には毫も關係せざるが如き行爲にして吾人の道德上善しとすることあり。而してヒュームは之れを説かんが爲めに同情(Sympathy)の作用を提出せり。以爲へらく吾人は他人の快樂を感じ或は苦痛を感じるを見て之れに同情す、而して之れに同情するがゆゑに快樂を來たす事柄をば善しとして之れを嘉し苦痛を來たす事柄をば惡しとして之れを斥くと。而して同情の作用を説明せんが爲めにヒュームは其の常に用うる聯想律を持ち來たりて曰はく、吾人が或心身の状態に在りし時に快樂又は苦痛を覺えたることある經驗を基として他人が同様の状態に在るを見るや其れに結び居る換言すれば他人の感じ居る快樂又は苦痛を感じるに至

ると。斯くの如くヒュームに取りては他人の快樂又は苦痛に對する同情は道德上一切の是非褒貶の作用の根底を成すものなり。約言すれば彼れはシャフツペリーの謂はゆる道德官を心理上分析して終に之れを行爲の結果たる快樂又は苦痛に同情する心となしたるなり。

シャフツペリーが感情を基として倫理を説き主智的道德説に反對したるに似てヒュームも亦感情を以て吾人の道德的行爲に於いて最も重要なるものとなしたり。彼れは甚だ明瞭に説きて曰はく、吾人の行爲の動機となるものは感情なり知は吾人の取り得べき途を示すの要あれども實際吾人を動かして其の途を取らしむるに至るものは感情なり、感情を支配せんには他の感情を以てするの外に途なし。而して此れ等の感情が想念と相結合する所より種々の情緒は形づくらる。彼れが此れ等情緒の成り立ちを論ずる所はスピノーザに似て更にそれよりも詳かなり。其の論の中につき感情と感情とが直接に相喚起することあるか、或は其の結合は必ず想念の媒介によるを要するかに就きてはヒュームの論ずる所一定せざるか如く見ゆ。かくの如く吾人が徳行を爲すの動機は畢竟するに之れを感情に求

めざるべからず、而して如何なる動機によりて徳行を爲すに至れるかといふことと其の徳行の價值とは必しも一ならず。同一の徳行が種々異なりたる動機によりて爲さるゝことあるなり。

斯くの如く道德上の褒貶は元來行爲の結果に對するものなりといふ立場是れ即ち功利説の根據にして、此の點に於いてヒュームは明瞭に功利説を唱へ出だせるものと云ひて不可なく、且また各個人の利益と云ひ或は幸福と云ひ若しくはあほらかに爲めになる、といふこと何たるを究むれば畢竟快樂を享受するといふことに外ならずとせる點に於いて功利説の立場は彼れによりて大に明瞭になれりといふを得べし。(先きにカムペーランドが善きもの又は爲めになるもの、と云へる觀念には常に快樂といふ意味にての幸福を含めるのみならず完全といふをも含み、又後にシャフツペリーの云へる所も純粹に快樂といふ意義に用ゐられたるにはあらず)。功利説の立場よりヒュームが説明に最も苦心せるは正義といふ觀念なり、されど彼れは此れ亦社會に於いて功利を根據として作りなされたる道德的觀念に外ならずと信じたり。以爲へらく時を異にし處を異にするに従ひて是非善惡

の判定も異に習慣も異なれども其の根據を洗うて云へば凡べて功利に基かざるはなく、唯其の事情を異にするに従ひて功利を來たすものゝ異なる所より道徳上是非さるゝこともあつから異なるのみ、例へば同一なる重力の法則に従ひてライン河は北に流れ、ローン河は南に流るゝが如し。（一）は夜上か

〔八〕ヒュームの意見に従へば吾人の道徳上嘉する所は利益ある結果即ち快樂を來たすといふことに在り、然るに吾人は其れら利益ある結果の來たされたることを見る時に於いても尙ほ道徳上其を嘉することなき場合あるは何故ぞや、唯快樂が來たさるといふ結果に吾人の同情することのみを以ては道徳的感情の成り立ちを説明し難き所あるに非ずや。ヒュームの説く所に従へば吾人が通常道徳的性質を帯べりといふ見做さるるものをも猶ほかゝる同情の對象 (objects) と見做さるるべからず、故に彼れは實際吾人の嘉するものゝ中に通常道徳的と云はれざるもの例へば單に辯才に長したること等をも含めたり。かくの如く單に快樂といふ結果を來たすといふことのみを以て道徳上に關ふ是非の念の説明し難き所あるよりヒュームの朋友にして其の名著『富國論』(“Wealth of Nation”)によりて經濟學の祖と

まで呼ばれたるアダム・スミス (Adam Smith 一七二三——一七九〇) は一千七百五十四年に出版せる其の著“Theory of Moral Sentiments.”に於いてシフツペリーの立場に立ち戻りて吾人の感情動機に對して直接に同情することを説きたり。即ち彼れはシフツペリーの説にヒュームの唱へたる同情を結び來たれるものと云ひて可なり。彼れ以爲へらく道徳上最も重要なことは吾人が他人の行爲の結果に對してよりも寧ろ其の行爲を來たしたる感情に對して直接に同情する點に在り、他人の情を思ひやりて其をよしとするは吾人が其の情に同情すると一なり、道徳上如何なることを是とし若しくは非とすべきかを尋ねれば吾人が其を見其の情に同じて左もありなると思ふか又はまか思はざるかといふことに在り。吾人が一行爲を見て其が道徳上に於ける功德 (merit) を認むるは一つには其の行爲を爲したる者の情に直接に同情して其をまかあるべきこと、思ひ又二つには其の行爲によりて益せられたる者が益を興へたる者に對して有する感謝の情に間接に同情すればなり。

斯くして吾人は常に他人の心情に同情を表し道徳上其の行爲を是非すると共に

また自己の行爲の他人に是非せらるゝことを経験し、また自然に自己自らが且らく他人の位地に立ちて自己の心情に同情し得るか否かを考ふるに至る、而して若し同情し得れば是れ自己の行爲を道徳上是とし、同情し得ざれば之れを非とするなり、此の心是れ即ち良心(Conscience)なり。故に良心は自己が假りに公平なる傍觀者の地位に立ちて自己の心情を是非する心に外ならず。道徳上の根本的規律は自ら其の爲さんとする所を顧みて公平なる傍觀者の之れに同情し得るか否かを認め、而して同情し得と認むるを得ばこゝに初めて其の行爲を爲すべしといふこととに在るなり。

斯くしてアダム・スミスは同情を以て凡べて吾人の道徳心の根據となし、良心と稱せらるゝものもまた其を基として作り上げられたるものに外ならずと見たり。彼れは其の道徳論に於いて同情を以て吾人の性に本具せる者と見たると共に其の經濟論に於いては吾人各自の自然の性として各が自己の生活を善くせんとする心を以て基礎として其の説を立てたり、簡に云へば自利心を以て一切の經濟的現象の動機と見たり。されど彼れが其の經濟論に於いて云へる所と道徳論に於

いて云へる所との如何に相關係すべきものなるかに就きては明瞭なる説明を與へ居らず。

〔九〕 さきにパトラーの説を述べたる所に於いて已に直覺説と功利説との對峙の胚胎せられたることを述べたりき。直覺説の唱ふる所は行爲が社會の利福の上に来たすところの結果を標準として考ふることを須めずして吾人の直接に是非する幾多の事柄ありといふに在り。功利説は之れに反して道徳上の是非善悪は畢竟するに社會一般の利福を來たすといふことに歸すべきものなりと云ひ、而して謂ふところ幸福とは已にヒュームに於いて明瞭にされたる如く快樂を要素とするものに外ならず。さきに掲げたるクラーク等の説の如きもまた一種の直覺説として見らるべきものなれども、其の功利説との對峙は彼れに於いては未だ甚だ明かならず直覺説の功利説に對する關係は後に至りて漸々明かになり來たれるなり。而して十八世紀に於ける後の直覺説の一好代表者といふべきはリチャード・プライス(Richard Price. 一七二二——一七九一)なり。彼れ一千七百五十七年に

『道徳上の主要なる問題及難點の評論』(“Review of the Chief Questions and Difficulties of

Morale.”と著し、正不正とシヤンツペーの云へる道德上の美醜とを別かちて曰はく、前者は吾人の行爲に客觀的に存在する性質なり、後者は吾人がそれに就きて感ずる主觀的感情を言ひ現したるものなり。また客觀的に存在する行爲の正しといはるべき性質は單に博愛といふことのみ歸すべきものに非ずして、其他に均しく究極的なる若干の道德上の原理ありと。彼れに取りては正しといひ爲すに適すといひ、又爲すべき事といふは凡べて同意義のものにして而して此れ等は、其が若干の究極的判定に於いては直覺さるべきものとせられたりき。而してかく究極的のものとして直覺さるべき道德的觀念の如何なるものなるかを示すや、彼れは主として常識に訴へたり。また彼れは道德上眞實に正しと云はるべき行爲は利己的動機より發すべきものにあらざることを固く主張せり。

〔一〇〕直覺説と功利説との論争の點を總括すれば、第一行爲の善惡正邪の標準に關する、第二吾人をして徳行を爲さしむる所以のものに關するとの二點に歸す。功利論者は徳行の標準は一に社會一般の幸福を來たすといふことに在りとし、而して吾人をして其の徳行を爲さしむる所以のもの(sanction)は各個人の利益なりと唱へ、直覺論者は之れに反對して徳行の標準には唯一一般の幸福を來たすといふことの外に尙ほ等しく究極的のものにして各々直覺さるべき原則ありと云ひ、而して徳行に於いて吾人を動かす所のものは其の事が正しといふ觀念にして、其が自己に利益を與ふといふ觀念にあらざると唱へたり。功利説の論者はフアラハム・トッカー(Abraham Tucker)によりて已に略明瞭に言ひ現はされたり。彼れ其の著

「Light of Nature pursued.”(一七六八——一七七四出版)に於いて論じて曰はく、吾人を動かして或行爲に出でしむる所以のものは凡べて自己の満足を豫期するの心なり、而して如何なることが徳行なるかは其が一般の幸福を來たすといふことによりて知られ、またかゝる徳行を爲すこと各人の利益となることは造化主の至善なることによりて證せらるゝと考へたり。

此の立場よりして更に組織的に其の説を唱へたる者は、一千七百八十五年に『道德學及政治學の原理』(Principles of Moral and Political Philosophy.)を著したるペーレ(Paley)一七四三——一八〇五なり。彼れは吾人が徳行を爲さるべからずと思惟する所以を説くに神より來たる命令を以てし、而して神の命ずる所に吾人の從

ふと従はざるによりて賞罰の行はるゝ是れ吾人をして徳行に出でしむる所以なりと考へ、また一般の幸福を標準として吾人の行爲を定むるに當たり或は通常正しとせらるゝことに背きても決して特に不幸を來たすが如きことの待ち設けられざる場合ありとするもなほ通則に従ひて善良なる習慣を養ふの必要よりして通常正しとせらるゝことを行ふが全軀より見て社會の利福を來たすの途なりと唱へたり。一時英國に行はれたる神學的功利説はこゝに至りて最も明かに唱道せられたりと謂ふべし。(功利説は後にベンサムによりて更に開發せられ神學的根據より離れて専ら現社會を眼界におけるものとなるなり)。

第四十二章 聯想派の心理學者

(一) 心理學上及び知識論上の研究に於いてロームの大利器即聯想説は
デヴィッド・ハートレー(David Hartley)一七〇四——一七五七)

によりて自然科学に用うる機械的説明の觀念と結び付けられて吾人の心理的發達全軀の根本的規律となされたり。ハートレーは醫を業とし一七七四年

に『人間に關する觀察』(“Observations of Man, His Frame, His Duty and His Expectation.”)を著し(已にゲー[Gay]が彼れに先だちて多少の説の爲したるが如く)吾人の一切の心的現象をば其の最も高等に最も複雑なるものに至るまで凡べて聯想を根據とし單一なる感覺及び想念の結合したるものとして説明せんと試みたり。即ち彼れは恰も複雑なる物理的現象が機械的作用によりて單一なる運動を以て形つくるゝが如く吾人の凡べての心的現象も亦聯想作用によりて單純なる感覺及び想念より形つくらるゝことを説かんと企てたり。彼れが占め得たる特殊の位地は自然科学に於いて廣く用ゐられたる機械的説明を心理の上にも用ゐんと試みたることに在り。彼れは聯想を解して同時に起り或は直に前後して起りたる觀念の連絡さるゝことなりと云へり。彼れは時にロームの説きたる類同によりてするの聯想をも言ひたれども専ら隣接律の上より見て相共に意識されたるものが相喚起すといふことを以て聯想作用の根本的のものと見たるが如し而してかゝる見方は最もよく物質的科學より移し來たれる機械的説明に合へるものなり。

〔二〕ヒュームの聯想を言ふや單に心理上の方面を説きて生理上の方面に説き入ることを敢てせざりしがハートレーはまさしく此處に説き至れり是れ彼れが醫を業とせるより其の眼孔がちのづから自然科学の方面に注かれたればなるべし。彼れは古人の聯想作用の生理的方面を説いて腦神經の微部分が振動し而して其の振動の結合することに在りとせり以爲へらく心理の方面に於いて聯想によりて單純なる觀念の複雑に結合せらるゝが如く生理的方面に於いては單純なる振動が複雑に結合せらるゝなり蓋し單純なる觀念には生理的方面に於いて單純なる運動の應ずるあり複雑なる心作用には生理的方面に於いても亦複雑なる振動の應ずるあればなりと。然れども彼れは此の心理的及び生理的兩方面の關係をば唯常に相伴ひ相應ずといふに止まりて更に其の以上の説明を爲さんとを試みざりき換言すれば心身の關係に就きては彼れは斷然唯物説の立場に在ることを確定せるにはあらず。

〔三〕以上述べたる聯想作用の結果として一つには單純なる觀念が結合して複雑なる觀念と成り上がるに至り而して斯く成りあがることによりて原初の單純なる觀念の跡を没するに至ること恰も物質元素が相結合して化成品を造るに至れば別異の性質を現じ來たるが如きものあり二つには初めには意識を用ゐる力を用ゐて爲したるものが後に屢繰り回さるゝや遂に自動的に無意識に爲さるゝに至る又三つには一觀念の強くまた活きくとしたるものが其れに結合し來たる他の觀念にも移り行くなり。聯想を基としたる此等の心作用によりて元來感覺的に卑近なるものよりして次第に高等に理想的なる觀念の造り出ださるゝに至り初めには自利の心より爲したるものが後には純粹なる博愛心より爲さるゝに至る。神といふ觀念の如きも凡べて莊嚴偉大なるとの聯想の中心となるによりて吾人の最も高尚なる感情の對境となり來たる。神を愛するといふ一種の宗教的感情も斯くして聯想作用によりて生じ來たるなり。

〔四〕ハートレーが觀念の聯絡と腦の微部分の振動との關係を考ふるや唯其を相伴ふものと見たるに止まりしがデ・セフ、ブリーストニー (Joseph Priestley. 一七三三—一八〇四、自然科學の研究者にして一千七百七十四年に酸素を發見せること佛の思想を唱へたること熱心なる同情を表せる人なり) は更に一步を唯物論の方向に

三三—一八〇四、自然科學の研究者にして一千七百七十四年に酸素を發見せること佛の思想を唱へたること熱心なる同情を表せる人なり) は更に一步を唯物論の方向に

進め、物質的方面を基礎となし、心理的作用は必竟生理的作用に懸りて存するもの、如く見、従うて吾人の意志の作用に關しては彼れはハートレーよりも一層明瞭に決定説を唱へたり、而して彼れ自ら其自説を呼びて唯物論 (materialism) と云へり。されど彼れが其の著『物質及び精神に關する攷究』 ("Disquisitions relating to Matter and Spirit," 一千七百四十七年出版) に於いて論ずる所に従へば物質を以て已に一イエスイト宗徒なるボスコビヒ [Boscovich] の唱へたる如く、或は牽引し或は反撥することを爲す勢力とし、而して原子は畢竟勢力の中心に外ならずと見たり。故に此の説に従へば物質の廣がり居る、及び其が障碍の性を有するも究竟すれば勢力が吾人の五官に及ぼしたる影響に對して吾人の感ずる感官上の性質に外ならざるなり。斯く彼れは物質を勢力と見たる所より心物二種の實體を置くの必要なしとし、同じ一つの物體が一切の活動を爲すと考へ、而してかく解したる唯物論は物體とは別に精神の存在を説くの説よりも更に原初の基督教的觀念に合するものなりと考へたり。但し宗教上の思想に於いてはブライストリーはダイスト風の立場に在りき。

【五】ハートレーの所説はエラスマス、ダーキン (Erasmus Darwin, 1731—1801) の業とし、自然科学者文學者及び哲學者として當時其の名を揚げたる人にして、かの進化論の祖と稱せらるゝチャールズ、ダーキンの祖父に當たる、其の主要なる著述は『ゾオノミア』一名『有機的生活の法則』 ("Zoonomia, or the Laws of Organic Life," 1794—1796間に出版) によりて生物學上の思想に結び附けられたり。彼れが動物の本能を説明するや動物が自衛の性に從ひ四圍の境遇に順應することの經驗を基礎となし、聯想作用によりて成り上がれるものとし、尙ほまた斯く外界に接する經驗によりて得たる性質を其の子孫に遺傳することを唱へたり。かくの如く動物が外界の境遇に接するとの結果として種々の性質を得、而して其の性質が子孫に遺傳せらるゝことを説きたる點に於いてエラスマス、ダーキンは後の進化説の爲めに其の道を開ける所あり。

第四十三章・蘇格蘭學派

【一】上來叙述せる所によりて知らるゝ如く英國の經驗哲學が心理説に於いて

又知識論に於いて其の分析を進め吾人の觀念の生起を説明せんとせる進行の頂點はヒュームなり。彼れに至りて凡べての哲學上及び宗教上の觀念が劈裂鎔解せられたりといふも不可なし而して此の極點に達したることに對して自然に反抗を生じ來たり、かく諸觀念を分解することを以て吾人の心證する事實を如實に説明する所以の途にあらざるとなし、寧ろ吾人の直接に承認せざるべからざる究竟事實ありといふことに眼を向けたる輩あり、此の反抗運動を代表したる者は是れ即ち所謂蘇格蘭學派(或は之れを常識學派ともいふ)なりとす。畢竟此の學派はヒュームの心理的分析に對して吾人が各自我が心を省みれば承認せざるべからざる、更に分析すべからざる若干の直接の事實ありとしたるものなり。此の派の泰斗と稱せらるゝを

トマス・リード(Thomas Reid. 一七一〇——一七九六)

とす。彼れはアバリー・テイ・ン及びグラスゴウに教授にして其の師チー・ワ・ター・ルン(George Turnbull. 一六九八——一七四八)に負へる所あり。其の著述に『人間の知識に關する論文』(“Essays on the Intellectual Powers of Man.” 一七八五出版)及び『人間の

動作力に關する論文』(“Essays on the Active Powers of Man.” 一七八八出版)あり、此の二書は後に合して“Essays on the Powers of Human Mind.”と表題を以て屢、改版せられたり。リードの外此の派に屬したる學者と見らるべき人々にはチェームス・オスワルド(James Oswald. 一七九三に死す)マダム・フー・ケンマン(Adam Ferguson 一七二四——一八一六)チェームス・フー・テ・ー(James Beattie. 一七三七——一八〇五)等あり。然れどもリードの死後マ・ンポロー大學の椅子に於いて此の學派を代表して最も勢力ありしは“Elements of the Philosophy of the Human Mind.”(一七九二——一八二七間出版)及び其の多くの著作を公にしたるデ・ガルド・ステewart. 一七五三——一八二八)なり。尙ほ其の後には多少聯想學派に傾きたるトマス・ブラウン(Thomas Brown 一七七八——一八二〇)あ、メンラオマンの主要なる著述には『人心哲學講義』(“Lectures on the Philosophy of the Human Mind.” 一八二〇出版)あり。

〔二〕蘇格蘭學派の唱道せる主要なる點はリードの説ける所によりて窺ふを得べし。彼れが其の常識哲學の趣意を公にしたる著述“Inquiries into the Human Mind on the Principles of Common Sense”(一七六四出版)に説ける所は最もよく此の學派の

出で來たりし所以を示すに足るものなり。曰はく彼れ初めロック及びバークレ一等の説に従ひたりしが其の説がヒュームに於いて如何なる決論に達したるかを見るに及びて翻然として其の説の非なることを語れり。以爲へらくヒュームの説ける所はロックの哲學の正當の決論なることは争ふべからずされどかゝる決論に達したることは取りも直さずロックに於ける出立點の謬れることを示すものなりと。斯く考へて更に嚴密にヒュームにまで至れる經驗哲學の立脚地を審査せんと思ひ立ち而して其の稽查の結果として其れが却て吾人の實際の經驗と相容れざるものなることを發見せり。但しリードは決して經驗を根據とする立場を離れんとせるにはあらず却ていづこまでも其の立場に居りて而してロックに創められたる説の誤謬を正さんことに志せるなり。彼れ自ら云へりロック及びヒュームよりも更に嚴密にベークン及びニュートンの取りたる研究法に従はんことを力むと。

〔三〕リード以爲へらく吾人の知識は若干の原理を以て究極の出立點及び基礎と爲さるべからず論理の歩を追うて理由より理由に溯り行くとも吾人は限り

なくまかすることを得ず何處にてか究極自明なる原理に到達せざるべからず而して此等自明の原理は吾人の心の本來の成り立ちに存在するものにして萬人に通じて在るべきものなり。故に吾人の心を以てロックの譬喩に従ひ白紙のごとしと見るは誤れり其の成り立ちに於いて本來若干の究理上並びに行爲上の原理を具へ居るものなりと。彼れは斯く考へて其等原理の總體を名つけて常識(Common Sense)と云へり。而してこれらの原理を純理上並びに道徳上の凡べての哲學の基礎とする所より此の學派を稱して常識學派といふ。此等の原理は自明なるものとして吾人の直接に認むる所にして更に其の理由を問ふを要せざるものなり。かくの如く此の常識學派が萬人に通ずる若干の原理の存在を説ける點に於いてはロールド、ハーバートが所説の復興したるものと見らるべき所あり。ロックに拘まりてヒュームに至れる説に於いて吾人の捨つべきものは經驗を根據とする研究法にはあらずして唯觀念を出立點となし原始のものは單に個々の觀念に外ならず吾人の知識は後に其等の觀念を結合することによりて作りなされるものなりと説く所(Ideal system)に在り是れ實に此の説に於ける誤謬の根本な

りとする。吾が心の實驗を省みれば原初のものは決して離れ、個々の觀念にはあらずして寧ろ判定(Judgment)なり、吾人の心の活動は唯それら切れ、の觀念に始まると云はんよりも寧ろ判定に始まるといふべく、而して單純なる觀念即ち判定を組織する要素は唯後に吾人が分析を用ゐて假りに分かち出だすに過ぎざるものなり。此等吾人の心の成り立ちに具はりて原始より存在する諸の判定の總体是れ即ち常識と名づくるものにして、これらの判定即ち原理は特に吾人の構設することを要するものにあらず、又説明するを要するものにもあらずして、唯、發見すべきものなり。又此等は必ずしも皆一最高原理に歸入せしめ了すべきものにもあらず、若かせんとするは是れ却て事實を餘りに單一なるものと爲すの嫌ひあり。

〔四〕然らば如何なる原理が吾人の常識に具はり居るか。先づ究理の方面に屬するものを言はん、吾人は事物を感覺するや其の感覺は毎に其の對境即ち外物を在りとするの信仰を自然に思ひ起こさしむ、但し其の外物を其の感覺の原因として知らしむるにはあらずして唯、ものづから其の感覺につけて想ひ起こさしむるなり(by natural suggestion)。斯くの如く吾人は感覺を意識する時に於いて必ず外物の存在を信ずると共にまた其の感覺を有する我れの存在を信ず、これは凡べて吾人の直覺する所にして推理作用に待つ所あらず。又感覺及び記憶と想像との區別はヒュームの信じたるがごとく唯そが強くまた活き、したることの差等に存するにはあらずして前者には特殊の信念の伴ひて後者には其の伴はざるに在り、而して此の信念即ち吾人が感覺する事物を實在するものとし又記憶する事柄を嘗て實在したるものとするところはヒュームの説きしが如くに分析し去るべきものにあらず、また聯想の結果として説明され得べきものにもあらず、更に分析すべからざる又説明すべからざる特殊のものなり。上に云へる外物の存在及び我れの存在を確實とすること、及び凡そ事物は吾人の其を知覺する如くに如實に在るものなりといふ種類の眞理は是れ即ち事實上の眞理にして、リードは其れらとして凡べて十二種を列舉せり。右は事實上に自明なる眞理なるが、また道理上の究極眞理と名づくべきものあり、之れに屬するは何人も疑はざる論理上の原理及び數學上の公理のみならず、亦ヒュームの疑ひたる形而上學に於ける若干の

四洋哲學史 第四十三章 蘇格蘭學派

原理例へは因果律の如きものあり。因果の關係是れ亦更に分析すべからざる特殊のものとして吾人の承認すべき所のものなり。

行爲に關する方面に於いても亦同じく若干の自明なる究極的原理あり例へは吾人は是非の別を認むべき者なること、吾人は我が力に存するものに對してのみ責任を有すること、又吾人は自己が他よりせられんと願ふ如くに他に對しても爲すべき者なりといふが如き何人も承認すべき道德上の原理ありて、而して此等の原理に基きて常人と雖も亦よく其の行爲の褒貶を爲し得るなり。

〔五〕 リード等の率ゐたる常識哲學がヒュームに對して取れる位地は恰も先きにケムブリッジ學派がホッパスに對せると相似たるものあり、但しケムブリッジ學派がホッパスに反對して其の所謂永遠の眞理を説かんと力めたるとは異なりて常識學派は何處までも經驗を以て其の根據となしたりき。斯くの如く常識哲學者等は經驗主義を維持せんと志せる所より精細に吾人の心作用を觀察叙述するとに力めたり、而して在來學者の注意を惹かざりし吾人の心的現象を説き出だし富贖なる心的生活の觀察を爲せる點に於いて此の學派の功績は決して輕んず

べきものにあらず。而して此の學派が吾人の心作用を研究するや専ら自觀又は自省(Introspection)によりてし生理の方面を挿入することを避けたり、故に此の學派に於いては哲學研究は自觀によりてする所の(恰も物理的科學が外物の觀察によりてする如く)自然科學となれるの趣あり。されど此の學派はヒュームに於ける心理的分析に反抗せるより其の研究のつから分析に於いて欠けたる所あり、而して其の取る所の研究法は畢竟各人が我が心に省みて自明と思惟するものを其のまゝに列擧して之れを常識に具はる原理となすに外ならざれば、謂はゆる自明の眞理の數の幾許ありやを定めいふこと能はず、唯思ひ當たる所に從うて拾ひ集むるに過ぎず、故に同じく此の學派に屬する者の中に在りても其の自明の眞理として掲ぐる所のもの決して全くは一致せず。是れ此の學派立脚の根底に於いて大に不満足のあるを證するものなり。また此の學派に於いては詳細なる分析を用ゐずして謂はゆる原理を究極なるもの自明なるものとして認許するの傾向あり。莫遮此の常識學派は多くの人々にヒュームの結論より遁れて且らく休息の處を與へたるが如き趣ありしがゆゑに一時大に勢力を振ひたりき。即ち此の

派の隆盛を極めたるは哲學に於ける當時の學者の研究心が分析に倦み疲れたるの結果なりといふべく、畢竟一時の休息を求めたる如きものにして決してヒュームの掲げたる問題がこゝに於いて其の根底より氷解されたるにあらず。ロック以後十八世紀に當たり英國に於いてヒュームに於いて其の頂上に達したる活潑なる哲學的研究はこゝに至りて一大段落を告げ、寧ろ衰微の状態に陥れりといふも不可なかるべし。此の後の哲學史上の壯觀は更に偉大なる更に根本的なる知識論上の解釋を求むることによりて來たるなり。

第四十四章 佛蘭西に於ける啓蒙時代

佛蘭西に於ける啓蒙時代の大勢

〔一〕 近世の始めより一方に於いては自然科学が長足の進歩を爲し來たれりと共にまた一方に於いては之れと相關聯して偉大なる哲學組織の相次ぎて建設せられたるありて十七世紀の末に至りしが、之れに次ぎて十八世紀に於ける歐洲思想界の特殊なる現象は其れまでの學術研究の結果を世間に普及せしむることになりき、殊に哲學上は英國の經驗哲學起りて後は其の立場より説き出だせる思想は之れを通俗のものとなし易きの傾きありき。斯くて主として經驗學派に結びて、凡そ哲學上科學上の道徳上及び宗教上の研究の結果として提出されたる世界觀及び人世觀を普及せしむるの傾向は英國にも佛蘭西にもまた獨逸にも盛に行はれてこゝに歐洲全軀の風潮をなすに至れり。之れを歐洲近世思想界の歴史に於ける啓蒙時代 (Aufklarungsperiode) と名づく、恰も是れ希臘に於けるソフィスト及びソクラテースの時代と相比すべきものなり。英國に於て件の啓蒙的風潮の最もよく認めらるゝはデイストの運動なりき、而して英國に於けるものと、佛蘭西に於けるものと獨逸に於けるものとの間には多少其の趣を異にする點なきにあらず、然れども畢竟するに是れ皆同一大勢の所産に外ならず。中に就きて最も大膽なる運動を起し最も廣大なる結果を來たしたるは佛蘭西に於けるものなりき。

〔二〕 佛蘭西に於ける啓蒙運動の起因は十七世紀より十八世紀にかけて英國に於いて活潑なりし思想界の産物を移し植えたるにあり。デカルト等の出でたる時に於いて其の學風の影響は英國に及びて英國の學者は一時佛蘭西より學ぶ

の位他に立ちたるが如き趣ありしが今は其の打ち返しとして却て英國より佛蘭西に其の思想の影響を及ぼし來たれり。モンテスキュー及びバルテールが英國の制度に對する歎美の念を懷きて英國より歸り來たれるは共にロームが其の大著を公にしたる十年以前即ち一千七百二十九年のとなりき。而してバルテールが其の著“Lettres sur les Anglais.”に於いて彼れが英國より得來たれる新學問、新宗教思想及び新政治思想を其の國人に示して佛の思想界に一時期を劃するの始めとなれるは恰もロックの死してより恰も百年後(即ち一千七百三十二年)のことなりき。

モンテスキュー及びバルテールは大に英國の立憲制度を嘆美し殊に前者は英國立憲制度の基礎を置けるロックの政治論に根據し尙ほ自己が歴史上の研究をも加へ理想的制度を描きて之れを時人に示さんと力めバルテールは同じくロックの思想より出立して當時の專制政治及び貴族並びに僧侶の階級的專權に向かひて劇烈なる攻撃を開始し終に後にルソーに至りては共和的思想の養成せらるることゝなれり。

〔三〕バルテールは斯く當時の社會制度に向かひて手痛き攻撃を加へたると共にニュートンの世界觀に基きてデイスト風の宗教的思想をも輸入し來たれり。而してかく彼れの移し植えたるニュートンの機械的自然科學の思想及びデイスト風の宗教的思想が如何なる變遷を経たるかといふことは是れ即ち佛蘭西に於ける啓蒙時代の歴史の一要部分を成すものなり。ニュートン及びデイスト風の世界觀に従へば天地万物に意匠の現れ居るとを認め而して之れを根據として造化主の存在を證することを得べしと考へたり。然れども自然科學の機械的説明の益、進むと共に世界の構造は全く機械的のみ説明し得らるゝものとする思想に向つて進めり。ニュートンは神が時に外より其の力を添へて宇宙に起る不規則なる運動を改むることを要するが如く考へたりしか、かくては此の世界は完全なる機械といふことを得ずして是れ取りも直さず神の造れる機械の拙なることを示すに異ならず、而して若し其れに拙なる所なしとせば世界は全く機械的のものとして特に外より神の手を假るの必要なきものとならざるべからず。且つ自然科學の機械的説明より云へば世界をはいづこまでも全く機械的に説明

せんとすると同時に其の機械的作用によりて起る事柄は必ずしも完美なるものにあらすといふことを看過すること能はず。吾人の住する世界には幾多の災害あり不調和の行はるゝありて此の點より云へばライプニッツ及びシヤフツベリ等の世界觀に疑訝を挾まざるべからず。ペトラーが自然宗教を唱ふる論者に向かひて用ゐたる論法は倒に彼れ自らの宗教觀に對して用ゐらるべし、蓋し彼れの言へる如く天啓的宗教の教義に對して提出し得べき非難の主要なるものはまた能く自然宗教の教義に對しても提出せらるべしと見たる以上は天啓的宗教と共に自然宗教も亦其の立つべき充分の根據を失ふこととなるも亦止むを得ざる結果なりと云はざるべからず。斯くして終にニュートンの世界觀に基礎を求めたる宗教觀に對しても懷疑的傾向の生じ來たれることは決して解し難きことにあらず。

かくて宗教上の信仰を維持するにも宇宙に現れたる意匠を根據とするの論證よりも寧ろ唯道徳上の要求に其の基礎を置かんとするの傾向を生ずるに至れり、而して此の思想の變化は現にデルテールに於いて已に吾人の發見する所なり。吾

人はさきにデイズムに於いて道徳的傾向の重きを爲せるを見たりしがこゝに至りては此の傾向のみが専らなるものとなり其れのみが宗教的信仰の根據を爲すに至れるものと云ひて可なり。

〔四〕かくの如くデイズト風の思想が變遷し行ける傍にロツクの知識論は已に英國に於いてはピーターブラオンに於いて認め得る如く感覺論の方面に向かひて發達し行けり、而して純然たる感覺論は是れ即ち吾人のコンヂヤツクに於いて發見する所なり。

デルテールが其の安立の地となりたる道徳の説は尙専らシヤフツベリによりて起こされたる倫理思想に感染せられ居るものなるが、上述せる如く哲學思想が感覺論に傾き行くと共に道徳思想も亦感覺論に傾き行きて、終に純然たる自己的快樂説を成すに至れり、而して是れ吾人が先づ最も明瞭にエルエシユスが所説に於いて發見する所のものなり。

〔五〕ロツクの哲學より佛蘭西に移し植ゑられたる觀念論(ideologie)が知識論上の感覺説を誘起し來たれる傍に機械的自然科學は人身上に於ける唯物論を生じ

來たりぬ、是れ蓋しニュートンの唱へたる機説説を生物界に推し擴め來たれるものに外ならず。當時の物理的研究の結果が遂に人身をも單に一の物質的機械と見做すの思想を産み來たらんは自然の勢なり。而して此の生理上の唯物論と知識論上の感覺説とが一に結合して終に一種の純理哲學としての唯物論を形づくることとなれり。英吉利に於いてはロックに始まれる觀念論は漸次に發達して終にヒュームのボツテイギズムに極まり又自然科学の結果としてはブリーストリーが生理上の唯物論を喚び起こすこととなりたれども、其の發達は要するに茲に其の終りを告げしが、佛蘭西に於いては右云へる思想の結合よりして更に無神的唯物論となり行けり、而して是れ即ちラメトリーの先づ最も明瞭に言ひ現したる所なり。

佛蘭西の啓蒙時代に於ける思想の歴史は上に述べたるが如き種々なる哲學上、宗教上、道徳上及び政治上の思想のかゝる變遷を爲したることを示すものにして或は一個人に於いてかゝる變遷の段階の認め得らるゝものあり、或は種々なる立場の混雜紛糾せる様を示すものあり、或はまた一立場より他の立場へ發達しゆく中

間に彷徨せる様を示すものあり、而して上に述べたる啓蒙時代の思想發達の集合點及び絶頂點とも名づくべきは無神論者の經典とも稱せらるゝ書『自然界の組織』(“Systeme de la Nature.”)なり。

〔六〕かくの如く啓蒙的潮勢が滔々として一世を風靡し行きたる時に當たり、之れに向かひて反抗を起こしたる者あり、是れ即ち當代の傑物ルソーなり。彼れは當時に行はれたる知力的及び機械的分解に反對して直接なる感情の指示によるべきことを唱へたる者にして其の立場の啓蒙的風潮に對するは恰もスコットランドの常識學派がヒュームに對して起これるが如きものあり、されど彼れの唱導したる思想は(必しも彼れの創始したる新思想といふにはあらず)常識學派の所説に優りて深大なる影響を後世に遺すこととなれり、是れ其の思想か彼れの天才によりて特殊なる發表を得たるがゆゑにして、後の哲學上、文學上及び社會上の種々なる新傾向新運動の種子が彼れにより蒔き植ゑられて世界大の結果を生ずるに至りたるなり。

〔七〕デルテールは偉大の筆を揮うて啓蒙的運動を起こすことに力めたりしが、

彼れ自ら其の眼界に置きし所は専ら有識の人々 (honnêtes gens) にして其れらと區別して愚民 (canaille) にまでも新思想の布及を圖らんと志し、にはあらず、彼れが眼界には猶ほ其の如き社會的階級の別を遺したりき。彼れに雖いで更に當時の學術及び哲學研究の結果を世に普及せしめたる功績は最も多く所謂アンシクロペディアス (Encyclopédists) の一流に屬し、中に就いて最も主要なる人物は、ア、ブローナリ。アンシクロペディアス等の文筆と共にまた當時の社會に啓蒙的思想の普及を來たすに與りて力ありしは、サロン (Salon) なり、當時の交際社會に輝きたる上流婦人のサロンに於いて當時の名士が相集りて論談せることは唯佛國內に影響を及ぼせるのみならず、獨逸に於ける諸侯伯の宮廷よりも人を派して其の報道を求めたる如きことありて其の影響は全歐洲に波及せりといふも不可なきほどなりき。此等の影響によりて佛蘭西の社會は靡然として啓蒙的潮勢に動かされ、初めは其の範圍の有識者にのみ止まりしものが後に至りては市人の店頭に於いてさへ唱へらるゝこととなりて終に社會を擧げて一代の流行を成せり。此の時代に現れ筆を揮ひて社會を動かしたることに於いて最も勢力の大なりしは、ザルテール、チ、テロ、及びルソアの三人なり。

ル、チ、テロ、及びルソアの三人なり。
モンテスキュー及びゾルテール

〔八〕 モンテスキュー (Montesquieu, 一六八九—一七五五) は其の名著『方法精理』 ("Esprit des lois" 一七四八出版) に於いて歴史上の事實を研究することによりて其の政治論を造り建てんとせり。彼れの政治を説くや諸國の制度及び法律の成り立ちを考へて其が自然の狀態に重きを置きて、其れらは唯故意に造り設けたるものにあらずして風土、風俗、宗教及び其の他一切の國民の氣質と相離れざる關係を有し居るものなりと見たり。此の點に於いてモンテスキューは十八世紀に於ける一般の思想の標準以上に位せりといふことを得。かくして彼れが一國の制度及び法律と其の自然の狀況との關係を見るや、一國の法律は其の人民に對して特殊なるものならざるべからず、若し一國の法律が他の人民に適することありとも其は唯偶然のことと云はざるべからざる程に兩者の關係は親密なるものなりと云へり。斯く彼れは一國の制度と其が自然の狀況との間に離すべからざる關係の存在するところを見また多少歴史上の關係に眼を注ぐ所ありき。されど彼れが

理想的制度としたるは畢竟英國の憲法政治にして而して英國の政治を考ふるにも其が如何に歴史的に成立したるかを見たるにあらざして専らロックの政治論より其の思想を酌み來たれるなりき。而してロックの唱へ出でたる政權三分説は彼れによりて初めて立法、行政及び司法の三部分として言ひ現さるゝこととなり。蓋しモンテスキューの説きたる所は其の根本の思想に於いて特に獨創の見ありといふにはあらざりしも、其が歐洲の思想界に及ぼせる影響は頗る大なるものありき。

〔九〕モンテスキューが其の理想的制度を描くや勢ひ當時の現制度に對して非難の言を爲す所ありき、されど公然當時の社會制度に對する攻撃を始めて當代の人心を震動せしめたる者はゾルテール (Voltaire. 一六九四—一七七八) なり。彼れは其の著 "Lettres sur les Anglais" に於いて其の専ら英吉利より得たる新學術、新宗教思想及び新社會制度を其の國民の眼前に掲げたりしが、彼れが旨意の此等の新思想を善しとして當時の社會及び社會を支配したる思想と制度とを打撃するに在ること明瞭なりしかば此の書は公然官命を以て焼き棄てられ、また其の英國の

社會制度に向かひて嘆美の情を注ぎたるの故を以て(後にモンテスキューも同じく認められたる如く)多くの國人によりて其の國に忠實ならぬものと認められたり。ゾルテールが其の銳利なる筆鋒を向け特に力を極めて攻撃したるは貴族の階級的專權と僧侶の擅にしたる教權となりき、而して僧侶等が力を極めて彼れを迫害せんとしたりしと共に彼れも亦力を盡くして僧侶及び僧侶の説きたる教會的基督教を攻撃せり。されどゾルテールは決して無神論を唱へたるにはあらざして却てこれを非としたり、其の有名なる言に曰はく、若し世に神なくば人は神を造るべしと。彼れが神の存在といふや其の據りどころを専ら道德の上に置き吾人は道德上の要求として神を信ぜざるべからずと考へ、而して神の存在と共に靈魂の不朽を信ずることも亦社會一般の安寧に必要なことと認めたり。彼れは此くの如く宗教の要義を以て道德に約つまるものとし、而して之れを根據として一つの至大至高なる存在者を敬することの外は凡べて迷信なりとして之れを攻撃するや少しも假藉する所なかりき。

ゾルテールが神の存在を説くやかくの如く主として道德上の要求を根據とした

れども、またニートン風の世界觀に従ひて世界に目的ある活動の現れ居ることを認め、これがまた神の存在を證することを否まず。然れどもまた之れと共に毫も世界に於ける暗黒の方面を指摘することを避けざりき。彼れは其の名著カンディド ("Candide ou sur l'Optimisme" 千七百五十七年出版) に於いて其の主人公をして(當時リスボン市の激烈なる地震の爲めに慘狀を極めたることを其の意中に含めて)若し是れをして最も善美なる世界とせば、其の他の世界が造られたらば如何にかあらんと曰はしめたり。此語は是れライプニッツの樂天論に向かひての大打撃と見らるべきものなり。詩人ポーフは其の詩に於いて神が此の世に行ふことを凡べて是なりとすべき所以を歌うて吾人は神が吾人の如く一の眇然たるもの爲めに、其の設けたる永恒の法則を易へんことを求むることを得ずと云ひしが、ゾルテールは曰はくされど此の眇然たる吾人も猶ほ長天に號泣し且つ何ゆゑに此の永恒の法則が各個人の爲めに造られざりしかを了解せんことを求むるの權利ありと。蓋しゾルテールは善なる神の存在を信じ居たり、されど世には災害苦痛の多きことの故を以て、其の謂はゆる神を以て全能なるものと見做さずして常

に其の所爲に對し障礙を呈する物質ありと考へたり。即ちゾルテールは物質及び神の二つを以て世界の成り立ちを考へんとしたるものにして而して神と物質との外に別に精神的實體を置くの必要なしとせり。又彼れはロックが神が物質に賦與するに感えてふ精神作用を以てしたりと考ふることも能はざるにはあらずと云へるを取り來たり、之れを根據として物質其の物に精神作用の具はるが如くに考へたり。されど彼れは物質其の物の何たるかは吾人が精神の何たるかを知り得ざると同じく知り得ざる所なりとせり。嘗に然るのみならず、彼れが其の哲學思想を世に普及するに與りて大に力ありし "Dictionnaire philosophique portatif" (千七百六十四年出版) に於いて言へる所によりて察するに、彼れは精神をも、また物質の存在をも永恒なるものと考へたるらしく、換言すれば一實體が永恒に物質的性質と共に精神作用を本具せる如くに見たりと考へらる。されば彼れの説ける所は唯物論と云はんよりも寧ろ一種の物活説としても云ふべきものなり。以爲へらく物質を以て無始無終なるものとするも之れが爲めに毫末も宗教の毀損せらるべき筈なしと。またゾルテールは初めには意志の自由を主張するに力められ

ども其の晩年に至りては漸次に懷疑的傾向を増し來たれり。之れを要するに彼れは哲學上特に創見ありといふにはあらず、また其の所説に深遠なる所ありしにもあらず、されど其の思想を傳布して世俗に入り易からしむるとに於いて彼れの方量も多く其の比を見ざるものなりき。彼れが其の様大の筆を揮ふや、如何に神聖なるものも、またいかに權威ある者も爲に其の權威と神聖とを剝奪せられざるを得ざるに至るほどの魔力を有したり。一時彼れが一方にては恰も悪魔の如く嫌惡せられたると共に他方にては鬼神の如くに崇拜せられたるも宜なりと云ふべし。

コンディヤック及びエルエシエス

【一〇】デルテールがロックに根據して吾人の知識の根據を考ふるや専ら感覺を其の眼中に置きたれども、彼れが主として其の心を注げるは宗教、道德及び政治上の問題にして心理及び知識論上の研究には深く思ひを致すことを爲さざりき。此所に其の着眼の點を置き、ロックの經驗主義をして純然たる感覺論とならめしたる者は羅馬加特力教會の一僧侶なる

コンディヤック (Condillac. 一七一五—一七八〇)

なり。彼れの著書には『人知の起原を論ずるの書』(Essai sur l'Origine de la Connaissance Humaine. 一七四六出版)あり及び其の著書の中最もよく知られたる又彼れが特殊の見地を發表したる『感覺論』(Traité des Sensations.) 一七五四出版あり、其の他『論理學』(Logique.) 一七八〇出版、また其の死後に公にせられし『Langue des Calculs.』等あり。

ロックは吾人の觀念に二つの淵源ありとし、而して其の淵源より得たる觀念を結合し比較し又抽象する作用が吾人の心に本具すと見たりしが、コンディヤックは之れを改めて觀念の起原及び吾人の心の一切の作用を更に一層單純なる所のものに歸せしめ、吾人の觀念は凡べて皆感覺より成り而して吾人の心の活動には感覺を感ずるといふ能力以外に生具するものなしと見たり。故に彼れの見る所よりすれば、ロックの言へるが如く觀念の淵源には感覺以外に反省といふものなく、又感覺を感ずるといふことの外に別に知力又は知解 (understanding) といふべきものなく、此等は皆な畢竟感覺を感ずるといふことより成り上がれるものに外ならず、即ち純然

たる感覺論は彼れに至りて初めて成り上がれりといふべし。コンディヤックは吾人の心の一切の内容が凡べて感覺より成り上がれるものなることを説明せんが爲めに假りに一の刻みたる立像を想像し、其の像に於いて嗅官を初めとして他の感官が漸次に其の用を作すに従うて如何なる觀念の其の心に入り來たるかを説き終に觸官に至りて初めて外物といふものゝ知覺の成就さるゝ次第を叙述せんと試みたり。即ち彼れは斯く感官の一々に開くることによりて漸次に如何なる觀念の吾人の心に入り來たるかを見、かくして感官より入り來たる觀念の外に吾人の心の内容となるべきものなきことを證明せんとせるなり。彼れの説く所に従へば廣がりば唯觸官によりて知覺するものにして他の感官によりて得る所のものは凡べて主觀的狀態に外ならず、客觀的事物として之れを空間に投置するは唯觸官のなす所なり、色、聲、香味等の感覺も唯觸官より得る所のもの結合して始めて外物の性質として投置せらるゝなり。

「一一」かくの如く吾人は凡べて感官によりて心の内容を得來たるものなるか、初めに吾人の感覺する所は頗る漠然たるものなり、而して此等最初の混沌たる感

覺の中に於いて漸々に差別を發見し來たるは畢竟するに注意の作用による、吾人の知識と名づくるものは其の根本の成り立ちに於いては注意によりて感覺の間に差別を認むることの外に出でず。比較すと云ひ、判定を下すといひ、記臆すといひ或は抽象すといふ、此等の基く所は皆注意の作用に在り。同時に二つの感覺に注意する、是れ即ちそを比較するなり。斯く比較して二つの觀念の異同を認むる、是れ即ち彼れは是れなり或は是れならずといふ判定を下すなり。一度注意したる感覺の後に其の痕跡を遺す、是れ即ち記臆するなり。便宜上作り設けたる記號を附して一感覺をそが自然に相結ばれる他の感覺より離すは是れ即ち抽象するなり、斯く實際は相分離し居らざるものを抽象して相分かつには記號の助けによらざるべからず、委しく云へば言語を用ひて種々の感覺に命名して以て分析を助け又分析したるものには之れに命名して假りに分析したる所のものを取り扱ふに便利ならしむるなり。人間の知力の優れたる所以は其の發達したる言語を用ひ得るとに在り。記號即ち言語に五種類あり、手眞似、音聲、數字、文字及び微分的計算に用うる記號是れなり。學識といふものも詮ずる所此等記號の關係を以て組

織したるものに外ならず而して其の關係は根本に於いては一が他と同一なりといふことを認むるにあり、蓋し判定は觀念の異同を認むるものに外ならざればなり。思考の用は一記號を以て示す所と他の記號を以て示す所との間に相同じといふ關係の在ることを發見し而して未だ知られざる所のものを已に知られたる觀念の和合に均しきものと見ることあり、一言に云へば觀念の方程を立つることの外にあらざり。このコンヂヤックの意見は要するに自然科学の研究に於いて用ゐられたる方法(即ち一現象を分解して更に單一なるものとなし、而して其の單一なるものゝ結合と其の現象とを相同じと見ること)を論理及び知識論の上に應用したるものに外ならず。

斯くの如く凡べて吾人の知識は注意の作用によりて觀念を分析し而して分析し出だせるものゝ間に何れが何れと相同じきかといふ關係を發見するに在りて、其の他に特殊なる種々の能力の吾人の心に具はれるものなし。而して注意といふ作用其のものも畢竟強き感覺に吾人の心の全く奪はれたる状態に外ならず、感覺を強く感ずるといふこと以外に特別に注意といふ能力の具はり居るにはあらずと。

かくの如く説き來たりてコンヂヤックは終に吾人の凡べての觀念及び凡べての心作用の淵源を唯感覺を感ずといふ一作用にのみ歸せしめ了せり。一切の觀念は感覺か將た感覺の變形したるもの(Sensations transformées)なり故に思考する是れ畢竟感覺するなり(Penser est sentir)

〔一二〕感覺は或は快きものとして或は快からぬものとして感ぜらる、故に快不快の感は決して感覺と別なるものに非ず。而して快樂苦痛の感是れ吾人の動作を決定する所以のものにして、注意といふことは是れ亦快樂苦痛によりて動かさるゝものなり。吾人の心は快なるものに住せんとするものにして聊も興味を感ぜざるものは影の如く吾人の心より消失す。吾人が曾て快しと感じたるものを再び想ひ起こす、是れ欲求の生ずる所以なり、欲求を本として愛憎、希望、恐怖等一切の情緒を生じ、終に意思の作用をも生じ來たる。善しと云ひ美はしと云ひ名つくるものは詮し來れば凡べて吾人に快樂を與ふる事物の性質を指していふに外ならず。

〔一三〕斯くしてコンヂヤックはロックの創始せる觀念の研究をば終に感覺論にま

で持ち行きたり、されど彼れはまたデカルト學派の二元論を保持する所あり。彼れ既いて曰はく人間の罪惡に墜落せざる前と死したる後とは現今の狀態と同一にはあらざれども是れ彼れが其の宗教上の信仰に假して言へるもの(現今に於ては吾人は全く身軀に繫がれ居るを以て其の媒介に依らざれば一の觀念をも得ること能はずと。されど彼れは又物軀の運動と感覺とは全く相異なるものとし、物軀が心作用を爲すと云ふことを以て決して考ふべからざるとせり。このゆゑに彼れ考ふらく身軀上に於けるの變動は是れ唯身軀とは異なりたるものに觀念の起こり來たる物軀上の縁に外ならずと。斯くコンディヤックは心物を相異なるものと見たれども、また身軀も物軀も共に其の根本の性質に於いては吾人の知り得る所に非ずと考へたり。彼れは又更らに進んで廣義(是れ本來は視覺によりて得ず、唯觸官によりて認むべきもの)も亦是れ一種の感覺なることを許し唯是れは他の感覺に比して最も恒に存在する要素にして他の感覺の集結する中心となるものなり、而も是れ亦詮する所吾人の知ることを得ざる或者によりて吾人の心に喚び起さるゝ吾人の感覺に外ならずと説きたり。斯く云へる所より見れば彼れは

吾人が目を以て睹、手を以て觸れて認むる物象も是れ亦吾人の心の觀念にして吾人の心に其れらの觀念を喚起すものゝ何たるかは吾人の知るを得ざる所なりとせるなり。要するにコンディヤックは斯かる知識論上の觀念とデカルト學派風の二元論との間に彷徨せるものと思はる。斯く彼れは唯物論の立脚地を取らざりしと共にまた固より神の存在をも否まざりき。

〔一四〕コンディヤックの説きし所は當時佛蘭西の啓蒙時代に於いては哲學思想として最も堅實なるものなりき。彼れは専ら吾人の心に有する凡べてのものゝ心理的生起の由來を究めんとせし者なるか、ヒュームも亦同しくロックの立脚地より出立して其の説を單純なる又首尾貫徹したるものと爲さんとせる者なるとはさきに叙述したる所の如し。ヒュームは印象及び想念といふとを以て其の出立點となしたれども、凡べて吾人の觀念を分解して唯感覺のみなりとは爲さざりき、即ち彼れの論は觀念論といふべくして感覺論といふべからず。コンディヤックは唯個々の感覺といふとを以て出立し演繹的に論じ去りて凡べてが皆是れより成り上がるべきものと考へたり、彼れの論するやヒュームに比すれば更に獨斷的なり。ライプ

ニッツも亦吾人の心が漠然たる感覺の狀態より漸次に發達し行く順序を説かんとしたれども彼れの説とコンヂヤックの見る所とは發達といふことを倒まに考へたるが如き趣あり。ライプニッツは感覺を以て吾人の高等なる知識作用の初歩と見たり、換言すれば吾人の心作用に感覺と云ひ知識といふ別種類のものあるに非ずして前者は唯後者の未だ發達せざるものなりと見たり。コンヂヤックも亦ライプニッツと同じく感覺と知識とを相異なるものと爲さしりしが彼れは後者を以て唯前者の複雑に成れるものに過ぎずと見たり、即ちライプニッツは感覺に在りて已に高等なる知識作用か唯其未だ充分に開發せざる狀態に於いて含まるゝを見、コンヂヤックは高等なる知識に於いても唯感覺の複雑となりたるものなることを認めたるなり。

〔一五〕コンヂヤックは各人の快不快の感は其の動作を決定するものなりと説きたれども彼れは倫理上猶ほ決して自利説を發表せるにはあらずき。道德上に感覺論を移し來たりて茲に自己的快樂説を明瞭に主張したる者を

ヘルゼンヌス (Helvetius. 一七一五—一七七二)

とす。彼れに従へば吾人の精神は本來唯感覺を感ずる力及び自愛の性のみを具有するものなり。自愛の性とは自己の快樂を求むる心の謂ひにして、此の心實に是れ吾人の一切の舉動を左右する唯一の動力なり。道德界に於いて各人が凡べて自己の利益を求むといふの法則の行はるゝは譬へば猶ほ物理界に於いて遍く運動の法則の行はるゝが如し、吾人が種々の事物に注意するも畢竟無聊の不快を脱せんが爲めにして學問といふこと、究竟するに是れ亦快苦の感を以て其が動力となすものなり。吾人を性來の怠惰に傾く、狀態より驅り動かすものは是れ唯快樂苦痛の感より、徳行も不徳行も均しく同一の動力によりて出で來たるものにして徳を行ふものと不徳を行ふ者とは唯其が快樂を覺ゆる事柄を異にするのみ。友誼といふも是れまた吾人が友を得て交際の快味と利益とを得んが爲めなり、志士仁人が従容として死に就くも是れ亦自己が最も多くの快樂を覺ゆる所に従ふものに外ならず、蓋し義人は義を爲すことに於いて最も多く快感を覺ゆればなり。されば正義と云ひ仁愛といふ是れ亦畢竟利益の觀念の上に建てられたる所のものなり。

「一六」當時倫理説上自愛説を唱へたる者には有名なる數學者にして純理哲學上は懷疑に傾けるモペルティイ(Maupertuis. 一六九八—一七九五)及び尙ほ他にも多かりしかども、それを最も明瞭にまた最も大膽に唱へ出でたるはエルエシユスなり。一千七百五十八年に彼れの著「De l'esprit」の出版せらるゝや物議囂然、巴理の大監督、羅馬法王及び巴理府の議會は皆之れを禁制したり。これが爲めに彼れは且らく外國に逃れざるを得ざることゝなれり。後彼れは當時手を廣げて如何なる種類の文學者及び哲學者をも招致したる、而して自から哲學的研究に心を用ゐて道徳上は利益主義を唱へたるフリードリヒ大王の朝廷に行きて其處に滯留せしことあり。エルエシユスは天性優しきに過ぐるほどに善心に富める人にして、其の財産及び所得を抛ちて公共事業の爲めにするに躊躇せざりき。

「一七」エルエシユスの唱へたる所は哲學上堅固なる推理を以て其の歩を進めたるものにあらずして其の論の調子には寧ろ輕浮なる所あり、但しこは實に彼れのみにあらずして啓蒙時代の論者の一般に亘れる傾向なりき。志かも此くの如く輕く又一方向きに唱へられたる説の奥底に於いては又啓蒙時代の高尚なる思想の奔流を認むることを得。彼れはロクに哲學的基礎を有する而して當代の一般の思想とも見らるべきものを語り出て、曰はく、凡そ吾人の各自の生れ付きに得たる所は皆相均しきものなり、即ち其の感覺する力と其の自愛心とに於いて生來は皆平等なるものなり、唯外界に接して種々の經驗を得ることによりて個人の間種々の差別を生じ來たるのみ、教育一切の境遇の影響をも含めて廣き意味に解したるもの(の)注意せらるべく、重んぜらるべき所以實にこゝに在り、而して教育はまた政治の如何に係るものにして權利上及び財産上の差等の減少するに従ひて俊傑と稱すべきもの益、減少し來たれども人間一般に就きていふ時は幸福を増加し來たると。斯く性に於いては吾人は皆相等しく平等なれども唯習によりて差別を生ずと見、而して本來の性に於いては吾人は皆卑近なる所に始まりて利益の觀念に動かさるゝものなれども、其の自利心を利用して善く教育を施すことによりて吾人を如何なる高等なる者とも成し上ぐることを得といふ思想是れ即ち啓蒙時代に於ける一の特殊なる信仰なりきいふも不可なく、此の信仰によりて當時種々の光彩ある運動は喚起せられき。

「一六」當時倫理説上自愛説を唱へたる者には有名なる數學者にして純理哲學上は懷疑に傾けるモペルティイ(Maupertuis. 一六九八—一七九五)及び尙ほ他にも多かりしかども、それを最も明瞭にまた最も大膽に唱へ出でたるはエルエシユスなり。一千七百五十八年に彼れの著「De l'esprit」の出版せらるゝや物議囂然、巴理の大監督、羅馬法王及び巴理府の議會は皆之れを禁制したり。これが爲めに彼れは且らく外國に逃れざるを得ざることゝなれり。後彼れは當時手を廣げて如何なる種類の文學者及び哲學者をも招致したる、而して自から哲學的研究に心を用ゐて道徳上は利益主義を唱へたるフリードリヒ大王の朝廷に行きて其處に滯留せしことあり。エルエシユスは天性優しきに過ぐるほどに善心に富める人にして、其の財産及び所得を抛ちて公共事業の爲めにするに躊躇せざりき。

エルゼシユスが政治上の改良を主張するや其の言論に一種の光彩ありき。以爲へらく、道德の腐敗は個人の非行に存するよりも寧ろ社會一般の利益と個人の利益との相分離することに存す謂はゆる道義學者等が社會一般の壓制と虐待とを排撃することを爲さずして専ら個人の私行に於ける不徳を責むるは是れ寧ろ偽善といふべきものなり。道德、立法、教育の三者は各自異別のものに非ずして皆同一の目的に向へるもの、此等は畢竟唯社會一般の利益と各人の利益とを相合せしむる所以の道に外ならず。個人を善くすると共に社會をも善くするの途は唯兩者の利益をして相合せしむるに在り、品性の高尚なると利益の觀念とは決して相離れたるものにあらず、志操の高き人とは唯社會一般を益する事柄と自己の利益とする事柄との相離れざる底の人物をいふのみ。

エルゼシユスはかくの如く大膽に利益主義の道德説を主張したりしが彼れは専ら其の眼を倫理の上のみ注ぎたるにて、唯物論を唱へたるにもあらねばまた神の存在を否みしにもあらず、宗教上は寧ろデイスト風の見地に立てりき、但し彼れは神の深奥なる性は吾人の知り得べからざる所なりと云へり。

自然科学者と唯物論

「一八」 ヨンテ、ヤックはロックの創めたる觀念の研究に専らにして特に生理的方面に向かひて其の研究を進むることを爲さしりしが、吾人は自然科学者の中に心理上及び知識論上の研究の結果と生物學及び生理學上の觀察とを結び付けたる者あるを見る。中に就き吾人の先づこゝに掲ぐべきは自然科学の研究に心を用ゐ、*コンテ*、*ヤック*に似てまかも彼れほどに判然と言ひ現されざりし感覺論を唱へたる者なり。

「一九」 *シャルル・ボンネ* (Charles Bonnet) 一七二〇—一七九三

なり。彼れは吾人の心生活に於ける凡べての内容の起原を感覺に歸し、*コンテ*、*ヤック*が用ゐたると同じき譬喩を用ゐて刻みたる像に於いて感官が一つ／＼に開け行くに従うて如何なる觀念の吾人の心に入り來たるかを説明せんと試みたり。彼れは感覺によりて吾人の心に種々の作用の起こさるゝことを委しく説明せんと試み而して是等の感覺は感官の受くる刺撃に對して非物質なる靈魂の反應することと起こるとなせり、即ち彼れはロックが吾人が心を白紙に譬へ外物に接する

經驗によりて其の上に文字の記さるゝが如くに言へるを改めて吾人の心の反應といふことに重きを置きたるなり。彼れ以爲らく吾人の心は我といふ念に於いて統一の意識を有す、而して此の統一及び單純なることは多くの部分の結合によりて成る身軀の有し得ざる所なり、されど靈魂の活動は唯外物の影響を受くるに従うて起こり來たるものなるが故に其の活動も畢竟するに感覺するといふことに歸し得べきものなり。吾人の靈魂は本來物軀と相結ばりて存在する様に成り立てるものにして、吾人は靈魂なき身軀にもあらねばまた決して身軀なき靈魂にもあらず。然れども身軀には通常吾人の指して云ふ體身と共に精微なるエーテル質の細身を有す、而して件の細身は體身の死滅する後にも猶ほ潰頽することなくして常に靈魂に纏はれるものなり、此の細身あるによりて吾人は死後にも現世に於いて經過したることの記憶を保存し、またこの細身が來世に於いて更に身軀を形つくるの種子となるなり。

「一九」かくの如くポチーは吾人の心身の相結ばりて離れざることを読くに重きを置けり。彼れが好んで云へる言に曰はく亞米利加土蕃人の頭腦にモンテス

キニーの靈魂を入るとも、之れによりて吾人の得る所はモンテスキニーに非ずして亞米利加土蕃なりと。斯かる見地よりしてポチーはちのづから主として其の眼を生理的方面に注ぎて一切の心作用の物質的條件を攻究せんと力めたり。以爲へらく感官器に於いて喚起されたる興奮が傳播して腦に至り其處に腦纖維の振動を起す、この振動なくして心作用の起り來たることなし、此の故に感官は吾人の心に觀念の入り來たる唯一の通路なり。斯く腦纖維の振動が心作用に必須なる生理的方面なるのみならず、同様なる刺激に應ずるには一定せる腦纖維あり、各種の音及び各種の色に對しても皆それ／＼に定まれる腦纖維あり。吾人の腦を組織する分子が外界の刺激の傳はるによりて一旦變動を起こしたる後に於いて其の變動は痕跡を遺すがゆゑに再び同一の感覺を感ずるも其は全く新しき感覺としては感せられず曾て經驗したるものとして認めらる。習慣といふもの及び習慣の一種なる記憶と云ふものの成り立つ所以こゝに在り。腦纖維相互の間に聯絡の生ずる是れ即ち聯想の成るなり。吾人が種々の感情を覺ゆるや腦に於いては必ず一定の纖維の變動あり、而してそ

れが意志の作用の伴ふ繊維の變動を機械的に起こし又其の變動よりして同じく機械的に筋肉の收縮を生じ來たる。此のゆゑに吾人の意志を以て行動する時にも生理的方面に於いては全く機械的作用の行はるゝなり、又心理上に於いても意志は必ず最も強き動機によりて決定さるゝものにして動機の如何にかゝはらずして能く何れをも選擇し得ること (Aequilibrium arbitrii) なし。斯く意志は動機によつて決定さるゝものなればこそ教育をも施すことを得また賞罰も其の功を奏するなれ。

〔二〇〕上に述べし精微なるニール質の細身を云ふの臆説はボネーが生物學上の推究と相關係せる所あり。彼れは説いて曰はく一説の生物には本來種子ありて而して其の種子は一として亡ぶることなし、凡そこの物は皆段階を成して其の間に飛び越ゆることを要する缺陷なしと。

彼れが所説の中尙ほ一點の注意するに値するは、ボネーが謂はゆる實在上の本質 (essence réelle) と名稱上の本質 (essence nominelle) との區別を説き更へて前者を物其れ自身に於けるの當體 (chose en soi) とし、後者を以て物の現れてゐる體 (Ce que les choses

Paraît être) とせざる點なり。

〔二一〕心的現象を觀るに之れを以て必ず生理上の變動に伴ふもの或は其の變動を以て條件となすものとする、是れものづから心理を考ふる上に於いて機械説の方面に一步を進めんとしたるものなり。蓋し英國聯想學派の所説に於いて吾人の見たるが如く、生理的方面の本より機械的に考ふべきのみならず、心作用を以て必然腦分子の變動に應ずるものとせば、殊にボネーの言へるが如く各種の感覺にそれ／＼に定まれる腦纖維ありとせば、心作用をも機械的作用に準へて考へんとするは自然の結果なり。かくして自然科学界の氣運は機械的説明を心理の方面に移し來たらんとすると共に生理的方面其の物即ち一切の生活的現象を全く機械的に説明し得ることを明かにせんと力むることに向かひ行けり。蓋し已にデカルトが有機物の生活も亦須からず機械的作用として見るべきものなりと唱へたりとは云ふものから、純然たる物體界の運動の全く機械的に説明し得べきものなることのニールトンの證明によりて疑ふべからざることとなりたる如くに明瞭なる證明を與へられたるにあらず。ニールトンが物理學上證明したる機械説を

能く生物上の現象にも適用し得るか否かは實に當時に至るまでの一大問題なりき。而して之れが解釋に一步を進めんと試みたるは

ブフオン(Buffon. 一七〇八——一七八八)

が唱へ出でたる有機的分子(molécules organiques)の臆説なり。彼れの大著“Histoire naturelle générale et Particulière”(一千七百四十九年以降其の死に至るまでに三十六卷を出版し彼れの死せし翌年拾遺七卷を出版せり)は其の文章の美なることに於いて佛文の一好模範とまで見られてアンシクロペヂイと共に廣く愛讀せられ、又それと同様なる影響を當時の思想界に與へたり。

ビュフオン以爲へらく他の力を假ることなくして自ら繁殖するやうに原子の結合せるものあり、之れを有機的分子と名づく、而して此等の分子は機械的法則の下に在りて外界に應接して一切の有機體を形づくるものにして、此の有機的分子は一切の生物の原質とも名づくべきものなりと。此の臆説は要するに物質の機械的作用により如何にして生物の形づくらるゝかを考へ易からしめんがためのものに外ならず。

〔二二〕 ビュフオンが有機的分子の説は已にスピノーザの説ける所に胚胎し居るのみならず、彼れが其の他に説ける所にして亦スピノーザの影響を受けたることを示すものあり。彼れが此の有機的分子の臆説に類似したるは

ロビネー(Robinet 一七三五——一八二〇)

がロイエンハック(Lewenhöck)の唱へたる種子的動物を以て尙ほ更に原始なるものとせらるべき種子の集合して成したるものと見たるの説なり。ロビネーは生物の種子一として滅するものなく凡べての物皆連続したる段階を形づくるといへることに於いてライブニツの影響を示したるが、ロビネーは更に彼れにも優りてライブニツの思想に感染したる所あり。彼れは其の主なる著書 De la Nature(千七百六十一年出版及び其の他の著述に於いて説いて曰はく凡べての物は限りなく多くの形を示し而して其等は皆連続せる段階を成し其の各段階は皆心と物との二要素を具へ居るものなり。但し此の二要素は無數に異なる割合に於いて相混和せられて其の一方に多く開發するほどに他方に於いて減退す。生物の活動に於いても亦此くの如く精神の方面に於いて力を用ゐたる程は身軀の方面に於い

て失はれ、身軀の方面に於いて増長したるほどは精神の方面に於いて萎縮す。而して此の兩方面の中基礎となるものは寧ろ物質の方にして精神は物質より出で、又物質に還ると見らるべきものなり。至世界はまた兩極の間に振り動く搖錘の如くにして生と死は善と惡、美と醜、真と偽の二面を等しく具ふ、此の二面の調和是れ即ち宇宙の調和といふべきものなり。

ボテリは其の感覺論の立脚地より神といふ觀念も亦感覺上の觀念 (*idées sensibles*) より來たると云へり、されど彼れはもとより神の存在を否みたるに非ず。ロビテリも亦神を置き之れを以て萬物の不可知なる原因とせり。以爲へらく吾人は無限なるもの、觀念を有せず、故に神を考へて之れを意志あり智あり徳ある者ぞせんには必ず假りに之れを人間に擬せざるべからずと。

「二三」 ヴルテールは感覺を以て運動と共に物軀の本具し居る性質なりとなせり、委しく云へば一實軀が物質的性質を有すると共に精神の作用をも有すと見たるが、ボテリもロビテリもロビテリも各、心作用と物理的方面とを相離さず進んでは物質的方面を以て精神的現象の基礎とすることに向かひ行かんとせり、就中

ピチーの唱へたる所の如きは之れを一種の唯物論と云はんも必しも不可なることなし。されど此等の人々の立脚地に比して更に明々地なる唯物論と稱すべきものは已に早く

ラメトリー (*La Mettrie*、一七〇九—一七五二)

の唱へたる所のものなり、是れを以て或は彼れを當時の佛蘭西に於ける正當なる意味にての唯物論の創始者と爲す人あり。ラメトリーは軍醫なりしが當時一般に行はれたる醫術を攻撃し、また彼れの意見を初めて其の著『精神の自然史』 (*Histoire naturelle de l'âme*、一七四五年出版) に於いて發表するや、彼れはそれが爲めに其の職を失ひ、其の書は議會の命によりて焼かれたり。かくて彼れは佛蘭西を去りて和蘭に行きしが、又次いで其の著したる『人間は一の機械なり』 (*L'Homme Machine*) と題する書の爲めに其處にても露々たる物議を惹き起こして安居するを得ざりしかば、フリードリヒ大王の許に至りて其の厚遇を受けしが、一千七百五十一年に卒然歿せり、其の致死の原因は確には知られざれど或は毒殺の疑ひありともいふ。ラメトリーは其の性頗る勇敢なると共に又傲岸なりき。

ラ、メトリイ曾て熱病を患ひて血液循環の急激になり來たることが其の思想の出沒に著大なる影響を及ぼすことを實驗し吾人の心作用は生理上の作用を以て説明し得べきものなることに考へ付きしが、此の思想を開發して初めて彼れの唯物論上の意見を發表したるものは其の著「Histoire naturelle de l'Âme」『精神の自然史』なり。彼れが其の後一千七百四十八年、即ちアンシクロペヂーの初刊に先だつと四年、コンヂヤックが『感覺論』の著述に先だつと六年、エルゼシユスの『ド、レスプリー』に先だつと十年、ロビチーの『ド、ラ、ナチュール』に先だつと十三年に出版したる「L'Homme Machine」に於いては更に其の歩を進めて其の唯物論を明瞭に言ひ現しき、是の故に彼れを以て佛蘭西に於ける正當なる意味にていふ唯物論の開祖と稱する人もあるなり。彼れはデカルト學派の物理說即ち機械的説明を全く人間に應用して一切の心作用を物質の活動なりと見たり。以爲へらく物質が感覺作用を爲すといふとの眞なるは何處を見るも物體を離れたる心現象なく、また身軀の組織の異なるに従ひて心作用も異なるによりても明かに證せらるゝを得べし。一切の思想は悉く物質上の變化に外ならず、吾人の腦裡に多くの思想の宿り得るとより

見れば其れらの思想の各が占領する場所は極めて狭小なるものと云はざるべからず。吾人の精神の高尙なることは非物質といふ無意義の言語に存在せずして其の思想力其の明瞭なると及び其の及ぶ範圍の廣きとに存在す、物質其の物の性に廣袤といふことが具はり居るが如くまた運動といふ作用も具はり居るものにして而して運動する物質がまた感覺といふ作用を具へ居ると見るべきなり。

〔二四〕デカルトは下等動物を見て一の機械に外ならずと説きたれども其の人間に對するや之れを身軀上一の機械なると共にまた物體ならぬ他のものを具ふと考へたりき。ラメトリイは人間と下等動物とを比較し二者は畢竟程度の上にて於いて相異なるものにして、人間に於いて他に存せざる特別のものゝ存在を説くべき理由なきことを示さんと欲したり。論じて曰はく、啻に下等動物のみならず植物と人類との間にも畢竟すれば亦唯だ程度の差別あるのみ、下等動物の如く、また植物の如く人間は唯だ物體即ち物質的機械に外ならず、されど之れと共に下等動物及び植物も亦人間に異なる所なく決して全く精神無きものに非ず、感覺は凡べて生ある者の具ふる所たるなり。

かくの如く幾多の生物が其の差等に於いて段階を成し居るを見てラメトリーは之れを下等なるものより高等なるものに向かひ行く順序となしたり。而して斯く生物をして發達せしむる動力は其が衝動なり欲求なり。植物より動物に至るの段階を見るに營養を得んが爲めに動くべき必要の多きほど其の生物は知力に於いて多く進歩したり、人間は最も多くの欠乏を感じ従ひて最も多くの動作を爲さざるべからざる必要に迫られ居るがゆゑに、また最も多く其の知力の發達したるもなり。

以上のラメトリーが生物論を見るも、又ロビネー及びボネー等の説く所を見るも如何にライブニッツ風思想が攝取され變形されて當時の自然哲學に宿れるかを知るに足るべし。

〔二五〕ラメトリーは其の著「Histoire naturelle de l'âme」に於いてはロックより出立して吾人の有する一切の觀念の起原を吾人の感官に求めたり。以爲へらく、外物に接し他に交ることによりて、吾人は我が心の内容を得るなり、若し一人をして他と交らしめずして孤獨に生活せしめば其の心や眞に幼稚なる状態に止まり居ら

んど。斯く考ふることに於いてラメトリーはコンディヤックの感覺説の先驅者となりしと共に又利益主義の道德説に於いてエルゼシユスの爲めに其の途をなせるものと云ひて可なり。彼れ以爲へらく吾人は唯身軀を有するのみ、故に快樂といふも亦畢竟身軀上のものに外ならず、唯其の中に強けれども雲時の間繼續して止むものと、靜かなれども長く繼續するものとの區別ありて、前者を感官上の快樂と云ひ後者を精神上の快樂と名づくるに過ぎず。德行とは社會一般の安福を來たすの行爲に名づけたるものにして、悪人は法律を以て制御せられ善人は名譽を以て導かるれども、善人と云ひ悪人と云ひ其の行ふ所を極むれば均しく皆機械的必然の作用によりて決定さるゝに外ならず、故に良心に問うて自らを責め悔むことを爲すが如きは無益の業なり。罪人は恰も病人の如き者にして社會の安寧を保たんが爲めといふこと以上に彼等を苛酷に取り扱ふの必要なし。唯物論は吾人をして宗教上の迷信及び恐怖の情より脱せしむ、無神論者の組織する國家はペールの云ひたるが如く皆に成り立ち得べきものたるのみならず最も幸福なるものなり。

佛國に於ける彼の革命時代に在りては醫士カバニス (Cabanis. 一七五七—一八〇八)が唯物論上心作用を説明して吾人の一切の思想は凡へて腦より分泌するものなりと説きたるあり、デメテット、ド、トラシー (Destutt de Tracy 一七五四—一八三六)また之れと相似たる唯物説を唱へたり。

アンシクロペヂイスト (Encyclopédistes)

〔二六〕一切の學術及び技藝に關する新思想を一般の讀者に解し易からしめ啓蒙的潮流を集收して之れを當時の社會に奔流せしむることに與りて最も力ありしものはかの有名なる『アンシクロペヂイ』 (Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des Sciences, des Arts et des Métiers.) 即ち百科全書なり (此の書は一七七一—一七七二年までに二十五冊、一七七二—一七七三年までに二十冊、一七七三—一七七四年までに十冊、一七七五—一七七六年までに十冊、一七七八—一七八〇年に拾遺五卷、一七八一年に『Table analytique』二冊を出版せり)

此の百科全書を創設しまた編輯したるはダランベール及びディチローにして之れに助力したる者にはテュルゴ (Turgot) グリム (Grimm) ヘルマン (Holbach) 等あり、デルテール及びブルソも亦之れに筆を執りき。

ダランベール (D'Alembert. 一七一七—一七八三)は數學家にして哲學上は懷疑説の

立脚地に在りき。以爲へらく物體及び心靈が其の性體に於いて如何なるものなるかは吾人の知り得ざる所なり。吾人が感官を以て其の存在を知覺すと思ふが如く、果たして吾が心に對して何物か外界に存在するありや、又若し在らば何物の存在するかは吾人の知識し得る所に非ずと。彼れは哲學上懷疑説の立場を守りたりしと共に道德説に於いても亦自利説の正當なるものなることを承認するに至らざりき。

〔二七〕アンシクロペヂイストの中に在りて最も傑出し、最も多才多能にして濃厚の情を湛へ、詩人にして又哲學者たり、其の辯論及び文筆を以て當代に偉大なる影響を與へたる者は

ディドロ (Diderot. 一七一三—一七八四)

なり。其の初期の著作に於いては彼れは猶ほデスト風の立脚地に在りて天啓的宗教の成立し得べきことを信じ、神の存在を否む者に向かひて盛に攻撃を加へ、道徳論に於いてはジャンペリー風の思想を懐き居たりしが、其の一千七百四十七年に書き下したる『Promenade d'un Sceptique』 (此の書は一千八百三十年『Mémoires, Co-

respondance et Ouvrages inédits de Diderot” に於いて初めて世に公にせられしものなり)に於いては彼れは已に懷疑説の見地に進み、次ぎに一千七百四十八年に著したる“Pensées Philosophiques”(此の書は巴理議會の命によりて焼かれたるもの)に於いては其後年に唱導したる自然論的尙有神説に向かへる跡を示し、尙ほ“Pensées sur l'Interprétation de la Nature”(一七五四出版)に於いては更に明かに彼れが後年の説を現し、而して彼れが最後の立場は一千七百六十九年に書き下したる「ダランベールとデ・メロイとの對話」(Entretien D'Alembert et de Diderot)及び「ダランベールの夢」(Rêve d'Alembert)此の兩者は上に掲げたる書と共に一千八百三十年初めて世に公にせられたるもの)に於いて最も善く現れたり。彼れが「アンシクロペディー」に其の筆を揮ふや其の懐抱を表すにも禁止の累禍を免れんが爲め故らに婉曲の筆を用ゐたるを以て彼れが眞實の意見は明らさまに其の中には發表せられ居らず。デ・メロイ説いて曰はく物質其の物が生活及び意識の作用を具し居り、物體の無始無終なるが如く生命及び精神も亦無始無終なるものなり、生命及び精神は唯機械的變動の結果として見ることを得ず、生なき個々の部分が相集まりて生ある一

物を生ずといふは考ふべからざることなり、故に生物の種子は本來存在し居るものと考へざるべからず、高等なると下等なるとの別は唯前者に於いては生命及び精神作用が相集結し後者に於いては其の放散し居ることに在り。感覺作用を有する物質が複雑なる結合を爲し動物となるに至りて感覺はこゝに初めて有意識的のものとなる、而して吾人の一切の思想は感覺より成り立つものなり。デ・メロイはこゝに自ら一の非難を提出して曰はく斯く物體の微部分其の物に各、精神作用の具はるありとするも其れらが相集まりて如何にして一團體を成し意識の統一を來たすかは頗る考へ難きことなりと。彼れは宇宙に存在する凡べての物は活動する一全體を成し一つの生命が其の凡べての部分に通ふと考へたり。斯く一の微部分が他の微部分に相接して其の間に同じき生命の相通ずと見て而して幾分か是れによりて精神上の統一を考へたるかの如く見ゆ。「二八」彼れが宗教上及び哲學上の思想の變じ行けるに伴ひて道德上の思想も亦均しく變化をなしたり。彼れは初め吾人は自然に是非の念を具へ居る者なりと考へたりしが、後に至りては是非善惡を判定する道德心も亦本來吾人に具はれ

るものに非ずして寧ろ微小なる多くの経験を結合して成れるものなりとし、以爲へらく、吾人が或事柄を是非する時に當たりて其が動機となるものは多くの経験より來たりて今は唯だ其の動機の各々を意圖することを爲し居らざるなり、道徳上の軌範も要するに人間の性情に基きて立つべきものにして、而して其の軌範は利己に非ずして一般の安福を來たすことにあらざるべからずと。彼れはかくの如く説きたりしが其の説の向かふ所終には徳行も不徳行も其の起り來たる所以を尋ぬれば其の基く所畢竟各人の氣質にありとし、而して所謂氣質は種々の事情に従うて一人には幸に徳を爲す様に形づくられ、他人には不幸にも不徳を行ふ様に形づくられたるものなりと考ふるに至れり。

宗教に對しても彼れは後に至りては専ら其の弊害に着目することとなれり。以爲へらく禮拜、儀式及び神學上の教義が吾人の自然の道徳に取りて代はるに至るは是れ宗教の害ある所以なり、宗教に於いて吾人の自然の道徳以外の事をいふは是れ皆僧侶の造り設けたるものなりと。

かくの如くディテローの思想は其の初年の立場より大に變遷し行きたれども猶ほ

其の道徳論に於いてエルゼシユスの見地にまで至り世界論に於いてラントリーの唯物論にまで進むことは彼れの取てせざる所なりき。吾人はディテローに於いてブルテールが出立したるアイスト風の立場よりして當時の啓蒙的思想の極端なる結果へ向かひ行ける變化の段階を認むることを得、而して此等の極端なる結果は已に他に於いて明かに言ひ現されたる所のものなり。凡べて此等の思想の發達して向かひ行ける結果を集合したるものを吾人は最もよくかの無神論者のハイナルと稱せられたる

『システーム・ド・ラ・ナチュール』(“Système de la Nature.

ou des lois du monde physique et du monde moral.”)

是れなり。

【二九】『システーム・ド・ラ・ナチュール』は著者が假名を用ゐて一千七百七十年に出版したるものにして『アンシシク・ロベテ』にも筆を執れるホルベ、ハ男爵の家に集合して論議することを習ひとせる人々の中に成れるものなるが、大抵は

ホルベ、ハ男爵 (Baron von Holbach.) 一七二三獨逸に生まれ、一千七百八十九

の筆に成れりと思はる。されど其の中にはグリーク(Grimm) 一七二三獨逸に生まれ一八〇七死す)及び數學者ラグランツ(LaGrange) 一七三六—一八一三等の筆に成れる部分もあり。此の書は啓蒙的思想の唯物論的結論を發表したるものゝ中にて最も組織立ちたるもの最も概括する所の廣きもの、又最も推理の堅實なるものなり。

此の書は自然論的機械説を世界に於ける一切の事物に打ち擴げたるものなり。説いて曰はく、運動する物質の外に宇宙に存在するものなし、物質其の物には廣がりといふことの在るが如く又運動といふ力の具はれるあり、而して吾人は凡べての出來事を説明する上に於いて是れより以外に要するものなし。唯吾人が看ることの足らずして自然の原因を發見し得ざるところより靈魂又は神といふものを持ち來たれども、是れは眞實説明といふべきものに非ず、寧ろ學術を殺すものと云はざるべからず。吾人が自らを二重に見て心物二種の實體より成れるが如くに思ふ理由は吾人が唯だ我が身軀に於ける外形上の運動を見るのみにして其を

來たしたる内部の精微なる分子の運動を見ざるがゆゑなり。世人はかく自己を二重にするが如く又此の世界をも二重に見て物界の外に靈なる神といふものを置けど神てふ觀念は畢竟するに此の世に種々の災禍あり而して其の災禍の起因を考ふるとに於いて世人の無知なるより生ずるものなり。神を以て世界を造り且つ動かす所の非物質のものと思ふも其の觀念を詳かに考ふれば非物質といひ無限といふが如き消極的性質を附することに於いて已に其の觀念の價値なきものなることを認むるを得。神の存在を云ふは無用のことなり、何となれば凡べての物が宇宙といふ一組織を成し居る外に何物の存する筈なく、また其の存在する全軀のものも其を活動せしむる所以のものを分かつべき理由なし。神といふ觀念は啻に無用なるのみならず、また自家撞着のものなり、何となれば一方に於いては上に云へるが如き消極的性質を附すると共に他方に於いて又人間の如く限りある者に於いてのみ言ひ得べき道徳的性質をも附すればなり。神てふ觀念は啻に自家撞着なるのみならず、又有害なるものなり、何となれば世人をして宗教上現世を輕んじて只管來世を望ましめ、又神の怒りを思うては吾人をして無益なる

不安の念を懐かしめ、又宗旨上の憎悪を惹き起こしては人々をして相反目せしむるに至るが故なり。人は元來其の災禍に遇ふと又其の無知なるとの故を以て自然に神々の存在を信ずるに至らんも其の信仰を組織立て、一の教旨となしたるは是れ皆僧侶の所爲に外ならず、而して其の信仰は狂熱と詐偽とによりて飾装せられ世人の孱弱なる信じ易き心によりて更に増進せしめられ、習慣はそを敬ふべきものとし、壓制はそを堅固にして之れを用ゐて愚民を制御するなり。姑く愚民の爲めに迷妄を説くと云ふべき理由なし、之れを説くは恰も人に毒を服せしめ、其の勢力を殺滅して而して之れをして亂暴を行はざらしめんと云ふが如し。須らく世に唱ふべきは不信神の福音なり、是れ最も世を救ふ所以の教なりと。

〔三〇〕自然界は一の自ら活動する全軀にして凡べての物は止むことなき運動の狀態に於いて在り、凡べての物は或は因となり或は果となり相連続して絶ゆることなし、秩序と云ひ若しくは調和といふが如きは是れ自然界其の物に存在するものに非ずして唯だ吾人の心の思ひに在るものなり、存在し居るものは一個物に於いても又世界全軀に於いても唯其の存在を維持するといふことあるのみ、又自

己の存在を保存する諸物が因果の關係を成して相動くことあるのみ、其れらが或宜しき目的にかなへりと云ひ又は然らずと云ひ、其が善美なる秩序を現し居ると云ひ又は然らずといふは是れ畢竟吾人の主觀的に思ひ設けたる標準に照らしして吾人の思ひ設けたる差別に外ならず。

人間に於ける事も凡べて悉く物理的運動の法則によりて説明すべきものなり。心理學も倫理學も詮ずれば物理學に外ならず。感覺は腦分子の運動にして其の運動は例へば醗酵する時に又は營養作用の行はるゝ時に行はるゝ運動の如きものなり。感覺を有せざる物質分子が相結合する所に感覺と謂ふもの生じ來たる(如何に純然たる唯物論の明言されたるかを見よ)而して吾人の凡べての心作用は皆感覺を本として起こりたるものなり(こゝに感覺論の攝取されたるを見よ)。

物理界に於いて情性と名つけらるゝものは人間に於いては自衛の性となり、前者に於ける牽引力及び反撥力は後者に於いては愛憎の情となる、彼れと是れとは詮ずれば一なり。吾人が自然法に従うて我が目的を達せんには如何なる方法を取るべきかといふことの規定さるゝところに義務の觀念は基づけり、蓋し義務とは

我が目的とする所に達せんには吾人の必然に取らざるを得ざるの道を謂へるものなり。理性と名つくるも是れ畢竟自然科学上の知識を吾人が社會に於いて云爲することの上に應用したるものに外ならず、而して理性は吾人に告ぐるに我が幸福が全く他人の幸福と相離しては得られざるものなることを以てす。凡べて吾人の行爲は皆利益の觀念によりて出で來たるものにして善人と云ひ悪人といふ其の區別は畢竟其の身體組織の如何と及び其の何を以て自己の幸福となすかどにかゝる。此の故に德行は他人の幸福を以て自己を幸福ならしむるの術といふべきものなり(こゝに利益主義の道德説の説かれたるを見よ)。

自由の意志といふことは一種の迷妄なり、是れ唯神をして此の世に於ける罪惡の實に任せざらしめんが爲めに造り設けたる觀念に外ならず。若し意志が自由なるものにして全く自己の活動によりて其の意の儘に或事柄を創始し得るものならば是れ全世界を改造する全能力を有すると同一なり、何となれば此の世界の一事を其の必然に在るべき所より改むといふは是れ取りも直さず全體を改むるといふことを意味すればなり。例令吾人に意志の自由なくとも世に刑罰を行ふべ

き理由あり、何となれば是れ恰も川を堰き止めて溢れざらしめんとするに同じければなり、此の心を以てして始めて刑罰も亦有効なるものとなるべし。未來の生命といふことは是れ亦常に迷妄なるのみならず、吾人の現世に於ける生活上寧ろ有害なる信仰と云はざるべからず。道德を講ずるよりも寧ろ人々をして身體上健康なるものとならしむるが彼等を救ふの道なり、吾人の要する者は僧侶に非ずして寧ろ醫師なり。

〔三一〕 以上述べ來たれる所によりて當時の啓蒙的運動の主なる潮流が盡く『システーム、ド、ラ、ナチュール』の中に集收せられたるを看るべし、感覺論も此に在り、利益主義の道德説も此に在り、意志自由論も其の中に在り、唯物論も無神論も聊も隠蔽せらるゝ所なく其の中に現れ出でたり。而して啓蒙的潮勢が斯くの如き傾向を取りて進み行けるを見て茲に一大反抗を要を感じて起ちたる者は彼の

ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 一七一二—一七七八)

なり。彼れは啓蒙的思潮の單に理解力を以て進み行くに對して直接なる感情の要を説き、啓蒙的運動を産み出だしたる文化に對しては純樸なる自然の狀態の美

を説かんとしたるなり。文藝復興時代以後文化は疑々として進み來たりしが、こゝに初めてルソーに於いて文化進歩の果たして眞實に善なるものなるかを疑ふの聲は聞こえたり。是に於いてか文明問題は彼れによりて最も初めて明瞭に提出されたるなり。

ルソーは一千七百十二年六月廿八日を以てゼネツに生れき。其の境遇と其の天質とは早くより彼れに於いて現在を後ろにして種々の理想を其の心に描くことに耽るの傾向を養ひたり。定まらざる青年の歲月を送りたる後巴理に來たり或は教師として或は他人の書記として或は謄寫を業として漸く其の口を糊したり而して彼れが文界に於ける生涯は其の著「Discours sur les Sciences et les Arts」(一七五〇出版)を以て始まりぬ。此の書は其の出版の前年「學術及び技藝の復興が道徳を高むることに與りて力ありきや否や」といふ題にて提出されたる懸賞論文に應へんとしたるものにして此の書によりて彼れの名は初めて世に知られたり。彼れの自ら言へる所に従へば此の問題を考ふることによりて全く新しき眼界が彼れの心中に開かれ彼れは全く新しき人間となれりといふ。彼れは此の問題に對

して否定の答案を與へたり斯くして彼れが新たに開かれたる新眼界に向ひて其の思想を進め行くに従うて益々一方に於いては啓蒙的運動の指導者として現社會の状態を攻撃する者又他方に於いては保守的精神を維持して現狀態の爲めに辯護せんとする者の双方に向かひて反對の地位に立つこととなれり。彼れはまた後に更に他の懸賞問題に對して著したる「Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes」(一七五三出版)に於いて歩を進めて實に學術復興が道徳上の進歩を益したることを疑ふに止まらずして文明の社會的生活其の物が元來善きものなるかを疑ひて吾人は寧ろ純樸なる天然の狀態に反るを要すと主張するに至れり。

【三二】ルソー初めはアンシクロペテイストの仲間に入り謂はゆる「哲學者等」と相交り其の同志の一人として認められたりしがアンシクロペテイの傾向が益々其の意に協はざらんとするを見て一千七百五十七年終に之れを脱したり(同じ年にダランベール及びディドロも其の編輯者の職を辭せり)。彼れの胸裡にはアンシクロペテイスト仲間の朋友等の了會し得ざる思想の鬱勃たるものありきかくて彼れ

は天然に往きて其の慰安を求め質朴なる田野の生活に退きこゝに彼れが思想的生涯に全く新生面を開くことゝなれり。彼れは文明社會の造り飾りたる儀式的なることに對して單純なる質朴なる粗野なるものを愛し、自然の狀態に於ける直接の感情に向かひて其の指導を求めたり。彼れはまた世の謂はゆる開けたる人々が眼下に見て齒するに足らずとしたる下等社會に對しても、其の知慮の上に於いては如何なる差等の存するにも拘らず相一致し得べき所のものあるを感じ彼等に向かひて深く同情せり、而して彼れが共通のものとして感じたる所是れ即ち人間が凡べて自然に有する直情なり彼れは時として名狀すべからざる感情の溢れ來たることを覺えたりしが彼れは其の感情を現すに適當なる言語を即坐に發見し得るの技倆を欠きたり。故に彼れは禮儀と好辯とを要したるサロンに於いては光彩を得放つべき性質の者にあらざりき。感情の哲學は彼れに於いて眞に適當なる唱道者を發見したりといふべきなり。彼れは感情其の物を知力と區別して吾人に取りて獨立なる指導者となしたり。心理學に於いては吾人の心生活の特殊なる方面として感情の價値に重きを置き、又文學に於いては感情に耽り之

れを樂しむ一派の潮流を惹き起こしたることに於いてはルソンの唱道與つて大に力ありき。彼れは自ら其の感情を顧るとを樂しみ其の『懺悔録』(Confessions)に於いては誇るべきことゝ恥づべきことゝを問はず、自己の心裏の經驗を聊も蔽ふ所なく描き出でたり。

一千七百六十二年ルソンは有名なる『民約論』(Du Contrat social ou principes du droit politique.)を著して現社會を改造する標準となすべき社會制度を描き、また同年に『エミール』(Émile ou sur l'Éducation)を著して彼れが理想とする教育法を描きたり。

當時の社會は此の畸人をして安き生活を送らしめざりき『エミール』は政府の命を以て燒かれ、また著者に對しては逮捕狀を發したり。是に於いてルソンは瑞西に逃れたれども彼れはこゝにてもまた安居することを得ざりき、かくて彼れは彼處、此處に於いて或は政府に或は人民に窘迫せられ委さに辛酸を嘗めたりしが、曾て巴理に於いて彼れと相會したることあるヒュームが此の時彼れを招きしを以て彼れは其の招きに應じて英國に渡りしが其處にて病に罹りしが爲めに英吉利に於ける朋友の惡意あらんことを疑ひて再び佛蘭西に遁れ歸れり。此の實に常人には

在り得べからざるが如き猜忌心は善くルソーが性質の暗黒なる方面を示すと共に彼れが奇癖の人たることを現すものなり。彼れは佛蘭西に歸りて後諸方を流浪しつゝありし中急病に罹りて遂に一千七百七十八年に死せり。

〔三三〕ルソーはコンディヤックの感覺説に反對して思考する及び判定する等の作用は感覺するといふことと相分かつべきものなりと見て以爲へらく、後者は所動的にして前者は能動的のものなり、吾人は我が直接の感情によりて我れの存在することを知り、また我れなる者が自由なる思想及び意志の作用を有する者なることを知り、此のゆゑに又我が靈魂の物質ならざることを知る。而してかくの如く直接に我れの何たるかを知り又我れに接する外界の存在することをも知ると共に現世に於いては悪人も或は榮え善人も或は不幸なることあるによりて吾人は尙ほ來世に於いて生活するものなることを知ると。彼れは宗教上に於いてはデイスト風の立場を取り、以爲へらく、物質は自ら動き得るものに非ざるを以て之れに活動を與へ意匠に従ひて世界を形つくりし者なかるべからずと。かく彼れは世界の構造を以て神の存在を證し得と考へたれども彼れが信仰の眞

實の理由は其の心情の求めに在りき。以爲へらく如何にして吾人の意志は自由なるか、如何にして、此の世界が神に形づくられたるか、又如何にして精神が物質に働くかといふが如きことは到底了解す可からざるとなりとするも猶ほ其れらの事の正確なる事實たることは我が感情によりて確めらる。彼れは其の著「エミール」の中に於いて其の自説を吐露せしめたりと思はるゝサザアの牧師をして言はしめて曰く「予は哲學上論究することを爲さずして唯だ我が心情に感ずる所を描く、聞くものに向かひても亦其を自ら我が心情に實驗せんことを求む」と。彼れは直情によりて感ずると云ひ彼の蘇國學派は常識を以て直講すと云へり。

ルソーの見る所に從へば物質は神の活動に制限を與ふるものにして神は物質を造れるものに非ず、故に物質は創造せられたるにあらずして唯だ神が之れを取りて之れに與ふるに秩序を以てし之れを形つくり之れを支配するのみなり。彼れは此の世に於ける凡べてのものが善美なるの故を以て神を信ずるといはんよりも寧ろ神を信ずるがゆゑに此の世界に於ける凡べての事物を善なりと認めたるなり。彼れはデルテールに向かひ此の感情を言ひ現して、汝は現實に楽しまん

し我れは希望を懐くと云へり。ルソーは斯くして宗教の根據を世界の成立を考ふる上に置くよりも寧ろ吾人各自の感情的生活の上におけり。彼れが感情を以て世界に對するや名狀すべからざる思ひを其の胸中に湛へたりしが彼れに取りては是れやがて宇宙の神に對する宗教的感情を成しき。彼れは自ら當世紀に於いて神を信じたる唯一人なりと云へり。彼れ尙ほサチアの牧師をして言はしめて曰はく汝の心をして常に世に神の在らんことを欲する底の狀態に在らしめよ、然らば汝は彼れの存在を疑ふことなかるべしと。之れを要するにルソーが宗教上の信仰は其が感情の要求に根據したるものなり。

ルソーは上に描きたる所に基き自然宗教を取りて教會的宗教を捨てたり而して自然宗教は彼れに取りてはやがて基督教の心髓といふべきものなりき。蓋し彼れは基督教に於ける道德上の教を以て其が精神と認めたるなり。

彼れはまた吾人の良心を以て直接に吾人の行爲の誤らざる指導を爲すものとし、また利益主義の道德説に反對して吾人の自然に有する仁慈及び正義の念を説き其は決して故らに作れるものに非ず、また實際世に無効力なるものにもあらざる

ことを示さんと力めたり。以上述べたる所によりて見れば、ルソーが感覺論、意志決定論、唯物論、無神論及び自利主義の道德説に反對して當時の大趨勢と戦はんとしたる者なること明かなり。

〔三四〕 彼は其の著“Discours sur l'Origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes.”

〔二七五三出版〕に於いて人類社會が其の原初の純樸なる自然の狀態より墮落し來たれる次第を描けり。以爲へらく吾人々類は原初に於いては各、獨立に又自由に生活したる者なり。而して其の生活せんとするや自ら猛獸の害を防ぎ又食物を得るの必要あるより先づ器具の發明を爲すことによりて其の心力の發達を來たし、次いで各、小やかなる茅屋を造りて之れに住するに至り、是に於いて初めて家族的生活の端緒を開き、又財産の萌芽を發したるものなり。かくて初めには水草を追うて生活したる者か後には一定の場所に住所を卜し而して自然に村落を成すに至り、且此くの如く集合的生活をなすに至りてはそれ迄は存せざりし新しき感情及び善徳を喚起し來たると共に惡徳も亦萌芽し來たり、何となればかく相集合して生活するに至りては其の間已にものづから多少の不平等及び其れに起因

する悪感情を生ずるとなればなり。されど此の段階に於いては人類猶ほ甚だ質朴にして其の欲望する所亦少なく、全躰より云へば此の状態は吾人に取りて最も幸福なるものなりき、此の段階の幸福なるは其の欲望と能力との相平均し居たることとに在り、人類は宜しく此の段階に止まるべかりしを不幸にも更に其の歩を進めて次きなる段階に移り行けり、而してこゝに社會に大變動を來たしたるものは金屬を使用すること及び農業を盛にするに至りしことと是れなり。之れによりて人々は多くの土地を耕すこととなり、従うて分業の必要起こり又資産を蓄ふることの必要を生じて遂に之れが爲めに富の甚だしき差等を來し、それより以後は此等の結果として社會に數へ盡くすべからざる害毒の醸成さるゝこととなれり。人類を文化に進むると共に之れを腐敗せしめたるは詩人の曰へるが如く金銀には非ずして奪る鐵と穀物となりと。ルソーは此の如く説き來たりて社會の暗黒なる方面を描き出だし尙ほ論ずらく、こゝに至りて人類は猜忌と憎惡と利益の争とによりて常に相反目し常に争鬪するが如き状態に立ち至れり、蓋しホッブスの謂はゆる自然の状態は人類の最初に居りし所のものにあらず其の變遷するに従

ひ漸く茲に達して初めて其の如き状態となるに至れるなり。ホッブスの謂はゆる戦争の状態が人類原初の自然の有様なりきとは考へられず、何となれば一つには其の如き戦争の起こらんには各人が多くの欲望を感せざるべからず、されど人類が原始の状態に於いて其の如き多くの欲望を感じたりとは考ふべからず、二つにはホッブスの謂ふが如き戦争の状態の始まらんは人々相互の交通の廣くなりて後の事ならざるべからざればなり。且つ又ホッブスは人間の自然に具へたる同情の性を看過したり。されど社會は終に各人皆自利を求めて相争ひ一人として安居すること能はざるの状態に立ち至れり。是に於いてか財産を有する者は甚だしき危険を感ずるととなり富者相計りて一の狡猾なる策を思ひ出だせり、此の世に於いて他にかばかりの奸策の人の心に浮かべるものあらざるべし。彼等富者は他に告げて曰はく我等が此の如く互に相争して各不安の状態に在らんよりも寧ろ正義と安寧とを保たんが爲めに茲に一の制度を設け、而して各人が現に有し居る所を以て其が正當の所有となして又相犯さざらんが爲めに法律を設くるの優れるに如かずと。彼等の策略其の圖に當たりて人々皆其の奸計に欺かれ、而し

て茲に政府及び法律といふ新しき桎梏を貧者に加へ又新しき武器を富者に與ふることとなり是に至りて各人の自然に有し居たる自由は沒了して財産所有權及び之れに伴ふ不平等を法律上神聖なるものとなすこととなりぬ。斯くして社會に於ける不平等の増進し來れる段階を約言すれば第一には法律及び財産所有權を立て貧富の懸隔を生じ第二には有司を置きて強弱の差別を生じ第三には素と相約して有司に委ねたる權力をば變じて君主の專制權となすことによりて主人と奴隸との區別を生ずることとなり。之れを要するに文化の進歩はかくの如く不平等の増進しまた其れに伴ふ害惡の増加し來たれる歴史に外ならずと。以上は是れルソーが描き出でたる人類墮落物語の梗概なり。

〔三五〕文化の害や擧げて數へ難し貧富の差別及びこれに從ひ起る諸多の差別に生じ來たる一切の猜忌心憎惡心及び之れより發する争鬭又一方には醜態として其の欲望を充たさんことを求むると共に一方には遊惰文弱に流れぬきて外形を飾り種々の繁文縟禮を設けて中心の誠を蔽ひ了ること又階級制度を以て下等人民を壓制すること又分業が一部の者をして他者の奴隸たらしめ而して之

れを使役するによりて一部の者は愈其の所得を増すと共に又其の所得を利用して益他の者を使役するに至る等皆是れ文化の弊害といふべきものなり。斯くの如く文明の進歩は決して社會を善からしめたるものに非ずして却て之れを腐敗せしめたるものなり吾人は寧ろ社會的生活に入りかゝりたる時代即ち社會の猶ほ少壯なりし時に於いて止まるべかりしなり。今や社會は已に老衰しつゝありされど一旦かく純樸の状態より離れ來たれる以上は到底再び元の儘なる状態に復ること能はず唯吾人は社會の眞正の成立を知りて其の弊害を除去するの法を講せざるべからず而して其を來たすべき一方法は即ち教育なり。

〔三六〕ルソーが教育説は先きにコックが英國の紳士を養成することを目的として唱へたりし思想を採用し來たり彼れが自然主義に基きて更に之れを打ち擴げたるが如きものにして其の思想に於いては特に新發明の見といふべきものなしとするも彼れの天才が之れに與へたる表現は其の思想をして新奇なる力を有するものたらしめ延いて歐洲の思想界に大なる影響を與ふることとなり。彼れ以爲へらく天然のままなるものにして宜しからざるものなし唯人其の手を

添へて不頁なるものとするのみ。吾人が教育を施すに當たりて人為的により種の事柄を注入するは正當の途に非ず、人を教育する宜しく其が自然の開發に任すべし。教育の事は他の權力を以ても又啓蒙的教訓を以ても外より強ひて壓迫し注入すべきものに非ず寧ろ唯だ其が自然の開發に障礙となるべきものを除去し而して其の開發に合へる境遇を與ふるとを止めざるべからず。各人が自ら學得し自ら力を用ひて得たるもの換言すれば自己の天稟と實驗とによりて發見したるもののみ眞に其の者の所得となり得べし。一言に云へば其が教育上の眞正の發達は他より注入すべきものに非ずして自發すべきものなり(ライフニツの謂はゆるモナドの自發するといふ思想と相比べよ)。各人の性格となりて開發する種子は凡べて天稟に具はるものなり、而して天然の性情及び衝動は其のものづからに開發し活動し出づべき時機あるを以て、教育は之れに與ふるに其の時を以てせざるべからず、之れを誘き出ださんとすること早きに過ぐるは却て之れを害ふ所以の道なり。嘗に人心自然の開發に任すへきのみならず各人皆其の特性を具ふるを以て之れを教育するや宜しく其の各自の特性に従ひて其の自然の開發を

助け行かざるべからず、即ち強ひて一の模型に鑄入することを爲さずして各自の個性を破らざる様に教育せざるべからず。小兒の時代を見て唯だ大人となることの準備のみ思ふべからず、小兒は小兒の時代に於いて其の開發し行く所其のものに殊特なる人生の趣味の存するあるなり。之れを要するに教育上の手段は唯小兒をして罪惡に染まず過誤に陥らざる様に監督するに在るのみ心身の發達そのものは自然に任せざるべからず。

〔三七〕以上叙述せる所はルソーが其の著『エミル』に於いて彼れの自然主義に基きたる理想的教育法を述べたる趣意の大要なり。彼れは更に其の名著『民約論』に彼れが理想とする社會的制度を描けり。以爲へらく、人類は其の自然の狀態に於いては個々獨立のものなるがゆゑに此の社會は後に彼等が相互に結びたる契約を基礎として成れるものと考へざるべからずと。蓋し此の民約説の端緒は已に希臘に於いてエピクロスの説に現れ中世紀の終り近世に入るに及んでは此の思想復活して種々の形に於いて唱へられ、尙其の説の脈絡は延いて十七世紀に至れを見る。さればルソーの民約説は思想の上よりいふ時は決して新しきものに

はあらねど彼れの天才に發揮せられて歐洲一般の思想界に大なる影響を與ふる衝動方とはなりたり。彼れ論じて曰はく上述の如く國家は民人の契約によりて成れるものなるがゆゑに其の主權は民人の有する所なり、行政官は唯だ民が主權を以て定めたる所を實行する者に外ならずと。ルソーはロック及びモンテスキエと其の説を異にして國家の權力を分割せずして曰はく、立法權是れ即ち眞實に國家の主權なり、行政權は決して之れと相並立すべきものにあらざして寧ろ之れに隸屬すべきものなり、人民が自ら相約し首長を立て、之れを仰くは契約にはあらざして其の關係は寧ろ唯委任といふべきものなり、主權は何處までも人民の有する所にして決して人民の手より離るべきものにあらざと。此の點に於いては彼れはロックの正反對に立てると共に又代議政體を以て正當なるものとせざることに於いてロックと其の論を異にせり。彼れ曰はく行政官が其の權を濫用せざらんが爲めには人民が常に自ら代人にあらず相集まりて會議を開くことを要すと。此の點より見る時は彼れが理想とする政體は彼れの故郷なるヂュネブ又は古代希臘の市庶の如き所に於いて最もよく實行さるべきものなり。然らば近世に至り

て生長發達したる廣大なる國家に在りて此の制度を用ゐんには如何にすべき。此の點に向かひても彼れは一の考案を懐けり、其は即ち右に云へるが如く人民の自活によりて成るものを幾多集合して一の大なる聯合團體となすこと是れなり。此の考案是れ即ち大西洋の彼方の岸に於いて實行されたるもの即ち合衆政治といふべきものなり。

人民相約して一の國家を組織したる以上は個々人の意志は皆全體の意志に服従せざるべからず、謂ふ所全體の意志とは其の人民の多數の意志により代表さるゝもの、謂ひなり、而して國家に於いて法律を設くるものは是れ即ち此の多數の意志にして其の目的とする所は人民の全體に自由と平等とを與ふるに在り、これなくして社會は幸福なることを得べきものに非ず、法律上吾人の第一に得ることを要するは自由と平等となり、但し各自の欲望其のままに行ふは眞正の自由に非ず、自ら設けたる法律に従うて行ふものは是れ即ち眞正の自由なり。此のルソーの思想は已に佛蘭西の大革命の根本思想を發表せしものにして、彼れ自らは決して其の所説のかくの如き結果に立ち至ることを豫想せるにはあらざるも、彼の大革命は

取りも直さず彼れの思想を實現せんとしたるものと云ひて不可なし。

〔三八〕ルソーの説ける所は根本思想の上より見て特に大なる新發明の見と云ふべきものにあらざりしか、彼れは時人よりも明瞭に之を看取し且彼れの天才が之れに特殊なる表現を與へたりしの故を以て恰も全く新奇なるものゝ如く殆んど魔術の力歐洲の思想界を動かしたり。且つ彼れの説ける所には論理上の關係の明瞭ならず寧ろ相反するが如き節も無きにあらず例へば彼れが教育論に謂ふ個人各自の自由なる自然の開發と其の國家論に於いて個人の意志が多數の決議によりて發表さるゝ全體の意志に全く服従することを要すといへるとは思想上如何に相關係すべきものなるか、又彼れが吾人の社會が其の純樸なる自然の状態より墮落したる次第を述ぶる所と後に其の民約論に於いて描ける所との間にも相和せざるが如く見ゆる點あり例へば一に於いては財産所有の權が社會の凡べての罪惡の根元となり居るが如くに説き、他に於いては所有權を以て眞正なるものと云ひ居る所あり、又彼れが社會の墮落を言ふ時の非現世説と其が宗教思想との間にも亦相和せざるが如き所ありといふことを得。之れを要するにルソーは

決して組織的思想家なりしに非ず、されど其の唱導せる所の中には後世の大なる新運動の種子を含めるを以て近代の民主政體及び共產主義も彼れに其の脈絡を引き無政府黨までも彼れより其の思想を汲み來たりと稱せらる。哲學及び心理學に於いて吾人の「心生活の特殊なる方面として感情の價値をいふに至れるは彼れに負へる所多く、又教育に於ける自然主義、文學に於けるセンチメンタリズム及びロマンティズムの如きも亦彼れに其の少くも一部の淵源を有する所あるなり。

〔三九〕當時社會問題に對して最もよく其の眼を注げる者は先づルソーを推さるべからざるが、其の他主として經濟上より此の問題を論じたる輩にはクヌチ・クエナイ・一六九七—一七七四及びテュゴット(Turgot. 一七二七—一七八一)等あり、又共產主義を唱へたるものにはモレリ(Abbé Morelly. 彼れの説はプラトーンの國家説に感發されたる所あり)及びマンロー(Mably. コンチヤンの兄、一七〇九—一七八三)等あり、其の他革命の哲理を論述したる者にはサンランベール(St. Lambert. 一七一六—一八〇三)コンドルセー(Condorcet. 一七四三—一七九四)及びバルネー

〔Volney. 一七五七—一八二〇〕等ありき。

第四十五章 獨逸に於ける啓蒙時代

〔一〕 ロックが其の心理説を唱へしより第十八世紀に至るまで當時の學者は専ら其の眼を人間の研究といふことに置きたり、故に當時哲學の題目となりしものは（ロックの著書及びロック以後の學者の著述の標題を見ても知らるゝ如く）人心の研究といふことにして而してこれが當時の啓蒙的思潮の一大方面を成したりしが、其の思潮に尙ほ他より加はり來たれる要素は其の頃に至るまでに大なる進歩を遂げたる科學的研究の結果を通俗にして之れを一般に普及せしめんとしたるは是れなり。過去に於いて此の時勢と最も能く相比すべきは古代希臘に在りてソフィスト及びソクラテースの出でたる時代なり、其の後に至りてはルマサンス學藝復興時代亦之れと相類似せる所あれど、特にソフィスト等の時代に於いて希臘の哲學思想が専ら智識及び道德の論に向かひたりしは歐洲に於ける啓蒙時代の思潮と頗る相似たる所あり。上に云へるが如く當時の啓蒙的思潮の一要素を成したる

自然科學の發達及び其の普及の結果として一切の事物に自然科學的研究の見方を應用するに至り、遂に唯物論を喚起し又社會制度の論に於いても其の影響を及ぼせる所ありき。

〔二〕 啓蒙的思潮の特徴といふべきは各人が其の知を明かにし其の知解力を用ゐて凡べての事物に明瞭なる判断を下し行くこと即ち差別智を主とするの說及び社會を以て個々なる獨立の人の相集合したるものと見ること即ち個人的思想是れなり。此の點に於いてライプニッツの哲學はデカルトに出で、スピノザの萬有神説に至れる純理哲學派の組織とロックに始まれる啓蒙的哲學との間に立てるが如き趣あり。彼れの哲學は多元論即ち多くの個々獨立のものを以て實在となすの論にして又吾人精神の根本的作用を以て理解力（知力）なりとするの說なり、而して此の說が後にゾルフ學派の唯理説に至りし次第は曾て述べしが如し。ライプニッツの哲學は此の兩點に於いて啓蒙的思潮の精神を含めるものと云ひて可なり。

上に述べたる啓蒙的思潮の特色に本づき其の先導者の求むる所は個人が獨立に

各、自己の知見に従ふといふことにして従ひて其の思想に於いては自由ならんとを求め、此の傾向は宗教に於いては教權に反對する自由思想となり、政治に於いては階級的制度に反對する自由主義となれり、されどかくの如く其の見地の個人的なりし之を以て社會の有機的組織を了解すると充分ならざりき。而して當時に有りて此の有機的組織を認むるに近き者に於いてはライプニッツ風の調和といふ思想先づ其の最も優れたるものなれど、其の思想また是れより以上には出でず、蓋しライプニッツの唱へたる調和説も元來獨立の單元を根本となすものなるがゆゑに、其の謂はゆる調和を解するに多くの困難あることは曾て述べしが如し。當時思想界の傾向が此くの如く個人的なりし結果として人皆凡べての事に於いて個人的の心を好み又各自が自己の心を觀察することを好み而して其の結果として自ら我が感情を樂しむことに耽るの傾きを生じ自叙傳風のもの多く出で來たれり、其の好例はルソーに於いて之れを見るべし。又おなじ傾向の結果として哲學其の物も各自の心を自觀する心理の研究と殆ど同一なるに至れり、是れ英國に於いては蘇格蘭學派に於いて見る所にして獨逸に於いては心理的研究の盛

なりしことに於いて其の最も著るきを見る。またおなじ傾向の結果として凡そ主觀的なるもの、凡そ特性の存するものを喜ぶの心を惹き起こし來たれり。上に云へる如く自然科学研究の見方(時間上の發達よりも寧ろ永恆に變はらざる物理的法則に着眼したる見方)を以て其の要素としたることの結果として啓蒙的思潮にはおしなべて歴史的眼孔に欠けたる所あり。唯ヒュームの如きが當時に在りては歴史的發展を解するとの最も勝れたる者の一人なるべし。此の點に於いてライプニッツが發達論は當時の啓蒙的思潮の上に出で其の眞價値は該思潮の先導者等によりては充分に了解せられざりき。

〔三〕 以上述べ來たれる啓蒙的思潮は歐洲の思想界に於ける一般の現象にして英吉利に於いても佛蘭西に於いても又獨逸に於いても皆之れを見る。但し此等三國に於ける啓蒙的思潮には多少の差別なきにあらず、英吉利に於いてはヒュームのボツテ、ギブズ、テイストの宗教的運動、シャフツベリ等の道義學及び聯想派心理學者の生理的唯物論の如きを以て其が哲學的方面に於ける結果と見ることが得べく一般に云へば英吉利に於ける啓蒙的運動は溫和にして常に英國人の特長

とする常識によりて支配せられたる趣あり、且又英國社會の狀態は當時の歐洲に在りては最も多くの自由を許したるの故を以て啓蒙的思潮に對して頑固なる無謀なる抵抗を爲し却て之れを激せしめ極端に赴かしむることなかりし趣もあり。佛蘭西に於いては其の學者の一般の傾向として其が啓蒙的思潮を理論上大膽に推究して其が極端なる論理的結論に赴くことに躊躇せざりき、且つ社會制度の上にては專制政體及び階級的壓制に對して終に甚だしき反抗を惹き起すこととなれり。獨逸に於いては啓蒙的思潮の全體の傾向は折衷的にして其が主要なる要素はゾルフ學派の唯理説より流れ來たれるものなりき、蓋し吾人の理解力を以て何事をも明瞭に解し得べきものとし之れに合はざること皆之れを迷妄として排斥すること即ち唯理學派の精神が取りも直さず啓蒙的思潮の骨子を成すこととなれるなり。されど之れに加へて佛蘭西及び英吉利より輸入したる思想亦其の動力となりたりき。尙他に多少獨逸に於ける啓蒙的思潮に貢獻する所ありしものは三十年戦争以來教義上の争ひに飽き他に精神上真正の宗教的生活を求めんとしたる需要に應じて起こりハルレ市を中心として廣く勢力を及ぼし

たるヒエテリストの運動是れなり。此の運動はライプニッツと相知り相敬したるスペーネル(Spener: 一六三五—一七〇五)によりて創始せられ次ぎにフランケ(Francke: 一六六三—一七二七)の組織的才能によりて勢力ある運動となりしものにして其の趣意とせる所は教會が其の教權を以て教ふる教義に重きを置かずして専ら各自の直接に意識する敬神の念と其を發表する實行とを貴べることとに在り、是を以て此の派は其の教會的ならぬ點に於いてあつたから啓蒙的思潮の宗教上の方面に於けるものに左祖することとなれり。之れを要するに獨逸に於ける啓蒙的思潮の傾向は其の哲學思想をも成るべく通俗ならしめんと力め、佛國に於けるが如く極端なる論理的結論に走ることを爲さざりしも其は猶ほ當時の社會に於ける諸方面に亘りて一代を蓋ふ所の大潮流となれるなり。

〔四〕獨逸に於いて上に述べたる啓蒙的思潮の先驅者となりしはライプニッツと略ぼ其の時代を同うし獨逸語もて初めて學術的雜誌を發行し且つハルレ及びライプツヒの兩大學に於いて初めて獨逸語もて講義を開きたるクリスチアノ、トマッス(Christian Thomasius: 一六五五—一七二八)なり。彼れに従へば哲學は世界に

關して一般に解せらるべき有用なる知識を與ふるものなり。彼れが論述の法は組織的に推理することに重きを置かずして寧ろ平易且輕快ならんことを力めたり。此の點に於いて彼れが論述の方はゾルフ學派のと異なれり、されど其の述ぶる所の趣意に於いては偏に吾人の知解に訴へて明白にし得ることの外を悉く排斥したるが爲め幽玄飄逸の趣味に乏しかりき、是れゾルフ學派の唯理説より來たる自然の結果なり。彼れは其の學説に於いては折衷的にして最も心を道德論に用ゐ、又宗教に於いては寛容の精神を唱道しき。又彼れは自然科学上の知識を有すること少なかりしも、其の代りに社會制度の種々なる弊害に向かひて批評を加へ且つ當時一般に行はれたる種々の迷信及び其の他頑冥なる思想に基ける諸の惡弊を攻撃することに其の力を致したりき。此等の點に於いて彼れの學説は十八世紀の獨逸の啓蒙的思想界に於ける殆ど凡べての重要なる要素を含めるものと云ふべく、彼れが該思潮の先驅者と稱せらるゝは此のゆゑなり。……

己にトマッウスに於いて認め得る如く獨逸の啓蒙時代に於ける思想界の問題の最も主なるものは道德上の論なりき、而して道德論に於いては吾人人生の目的を

以て各々が完全になることゝ幸福を享くることゝに置けり。蓋し完全及び幸福といふことはゾルフ學派に於いて己に相混和したるものとして説かれたりしが茲に至りライプニッツが謂はゆる發達といふことの深き意義を了解し得ずなれりしに於て右の二者の中幸福の方漸次に重きを爲すことゝなれり。此の道德問題に結んで當時の思想界の問題とする所は吾人に幸福を與ふる神の存在を證すること(是れ専ら天地に現れ居る目的を根據として論じたるもの)及び吾人が來世の存在を證することに集注せり。斯く神及び來世の存在を論證せんと力めたることとの動機は詮すれば個々人が各々幸福なる生活を送らんことを求むるの要求に在りき、是れ即ちゾルテールが宗教の根據を吾人が道德上の要求に置きルソーが其を感情の要求に置けると相類似したる思想の調子を示せるものと云ひて可なり。又同一の原因よりして當時に於いては心理的觀察に心を用うること盛に行はれ殊に吾人の心理の感情的作用の方面に注意を向くることゝなれり。

〔五〕啓蒙時代に於いて該思潮の一代表者として、主として神學的方面に於いて大なる勢力を振るひたるはライプニッツ(Reimarus、一六九四—一七六五)なり。彼

れは盛に無神論を攻撃せると共に又教會の教へたる天啓的宗教の信仰に向かひても毫も假借する所なく批評を試みたりしが其が攻撃の武器とせる所は専らデルフ学派より得來たれるものなりき。彼れ以爲へらく世に奇蹟といふべきは唯だ萬物の造化されたることの一あるのみ、天啓と謂ふものも亦唯だ自然界に現れたるものあるのみにして是れ凡べての人の認め得る所、且つ吾人が幸福を得んには此の自然界に現れたる天啓を知ることの外に要すべきものなし、其の他に特殊なる奇蹟の行はるといふは是れ却て神の完全なること及び神が將來を透見するの全智と相容れざるものなりと。斯く彼れは唯一般の道理の上より天啓的宗教に就く所を攻撃したりしに止まらず、之れに加へて聖書に掲げられたる證據の果たして頼むに足るべきものなるかを批評し、人間の證言の誤り易きこと、聖書の中に記載しある事柄に矛盾したるものあること、及び神の啓示を傳へたりと稱せらるゝ人物の言行の神の使者たるに相應しからぬこと等を掲げ論ぜり。

ライマールスは並べてガイスト風の論者の唱へたるが如く宗教上唯だ事實なるものは凡べて吾人知力の理解し得べきものにして其の他の荒唐無稽なる事は一切假造若しくは詐僞によりて成れるものと見て其が歴史的發達の方面に眼を著くことを爲さず、又聖書の批評を爲すにも文書の穿鑿には涉らざりしか、原文書の歴史的批評に着眼して此の方面の研究を開くことに與りて功績ありしはセムレル(Semler: 一七二五—一七九二)なり。

〔六〕啓蒙的思想の産出せる思想家の中最も明瞭なる批評的頭腦を有し且つ後思想の啓發に益すること多かりし者は有名なる文豪レーシング(Lessing: 一七二九—一七八二)なり。彼れが文學上及び美術論評上に於ける功績は且らくことに言はず、彼れは當時の啓蒙的思想の中に立ちて肝要なる位置を占めたる者にして其の哲學的思想はライプニッツの所説より來たれるものにスピノーザの哲學を加味したるが如きものなり(後世の思想界の眼を注がしめしニコニコに與りて大に力ありし一人なり)。彼れに従へば神明は凡べてを統括する最高の活きたる一體にして全く差別と變化とを排するものに非ず、萬物は彼れ以外に存するに非ずして寧ろ彼れに於いて保たるゝもの、又各個物は皆神の圓滿なる相の分かれたるものにして云はゞ各制限せられたる神力なり、而して各個物は其の制限せられたる相に

於いて一種の相離れたる獨立の存在を成す。一切のもの皆活力あるものなれど其の活動の程度は大に相異なり凡べて段階を追うて發達し行くなり。レッシングが宗教上の思想に於いて合理的宗教を以て理想とする所は一般アリスト等の説ける所と相同じされど彼れはアリスト等に優りて歴史的發達の何たるかを解し又其の之を解するやヒュームの解釋とは其の趣を異にしたりき。以爲へらく合理的宗教は最後に來たるべきものにして此の最後なる極致に達せんが爲めに種々なる宗教は行はるゝなり。蓋し此等諸宗教は神が由りて人間を教育する所の方法にして之れを以て單に追造せられ又は詐偽に生じたるものと見るべきにあらで、即ち吾人が小兒を教ふるや種々の方便を以て其が知識を開發することを要する如く神は人類の初めより今に至るまで天啓によりて吾人を教育したるなり、天啓は決して無用なるものにはあらずして寧ろ永遠に行はるゝ人類の教育法なりといふべし。凡べての事は決して一時に吾人に教へらるべきものにあらず、吾人の進歩の段階に適するものと然らざるものとあり、昔者猶太人の神に於けるや唯だ之れを國民の守護神と視るに止まりしが之れを以て世界の獨一神とする

することはペルシア人によりて初めて得たる思想なり、其の後舊約書に次ぎて更に之れに優りたる第二の教科書即ち新約書の興へらるゝに至る、基督出でし初めて明かに靈魂の不死を説き又來世に於いて現世に於ける吾人の善惡業に對する報酬を得ることを教へたり、されど是れ亦吾人を徳に進むる一の教育法に外ならずして、吾人の達すべき最高の段階はこゝにあらず、其の最高の段階に於いては吾人は徳を行ふこと其れ自身の爲めに行ふに至らざるべからず。吾人は漸次此の完全なる段階に近づきつゝある者にして此の發達の目的なる第三時期は是れ即ち合理的基督教の成り上がる時代なり、是に至りては今まで種々の教育上の方便として譬喩等を用ひて教へたることを要せずして合理的意義其のまゝと道徳とを直に了解し實行することを得るなり。レッシング又以爲へらく個人は各、人類が發達して到れる段階を経過するものなりと。彼れは此の思想に基きて個人は唯一度其の生を保つに止まらざれば幾たびも生れ變はりて一般人類の其の時に進歩し至れる段階に進み至ることを得るものなりと考へたり。

「七」 哲學を解し易き形に於いて當世に説かんとしたる者即ち通俗哲學者と名つけらるゝ者の中最も主要なるはメンデルスゾーン及びニコライ等なり。モーズスマンアルスゾーン(Moses Mendelssohn. 一七二九—一七八六)は猶太人の家に生れき。彼れに従へば哲學は吾人の常識を以て認めたる事柄を更に明かに又更に確實にするものなり、彼れは神の存在及び靈魂の不滅を論證せんことに最も力めたりしが其の論證は畢竟するにゾルフ學派の所説より得來たれるものなりき。彼れの志せる所及び其の説ける所には頗る高雅なるものありと雖も其の思想に於いては特に發明の見として取り出て言ふべき程のものなし。

ニコライ(Nicolai. 一七三三—一八一)はレッシング及びメンアルスゾーンと相友たり、彼れは世人をして諸の迷信、偏執及び口碑等の束縛より脱せしめんことに其の力を盡くせり。啓蒙的運動の方面に於いて彼れが力の及ぶ所は決して少小ならざりき、されど建設的方面は彼れの長所に非ず又彼れ自らの所懐に於いて其の了解の甚しく狹隘なる所あるを見る。

其他以上の學者等と同部類に屬する者にはアムト(Abbt. 一七三八—一七六六)エ

ーベルハント(Eberhard. 一七三八—一八〇八)フエーデル(Fodor. 一七四〇—一八二二)

エンゲル(Engel. 一七四一—一八〇二)ガルス(Garve. 一七四二—一七八九)プラットチ

ル(Platner. 一七四四—一八一〇)マイネルク(Meiners. 一七四七—一八一〇)等あり。

サンスーシーの哲學者フリードリヒ大王は當時の思想界に於いて一の特殊なる位地を占めたる者なり。彼れはゾルフ學派とロック及びザルテールの思想とペールの懷疑説との影響を相混じて受け、其の道徳思想に於いてはエピクロス學派風の快樂説とストア學派風の堅固なる義務的道徳主義との兩面を有したりき。但し彼れが軍人としての精神が彼れをして其の心を義務的觀念の重きを説くことに傾かしめたるなり。

「八」 當時知識論上の問題に於いて獨立に研究の地を開き後にカントの組織したる知識論の少なくとも一方面と頗る相類似せる思想を唱へ出だし且つカントに重んぜられたる者はラムベルト(Lambert. 一七二八—一七七七)なり。彼れはロックが研究の結果とライプニッツ、ゾルフ學派の思想と、換言すれば經驗説と唯理説とを相結合せしめんと試みたり。以爲へらく吾人は吾人の思想の形式を其の内容より

取り出だすこと能はず、又其の内容を其の形式より得來たること能はずと。斯く彼れが吾人の知識の成り立ちを説明することに於いて、其を思想の内容を成すものと形式を成すものとの二要素に分かち而して其の一を分解して他に歸せしむること能はざるものとし、又其の一を欠きて吾人の知識は成り立つこと能はずと唱へ出でたる所、是れ即ち知識論上一新路を開かんとしたるものにして、カントが取りて哲學史上の大革命を爲したるも亦此の道によれるなり。されどラムベルトは斯くして吾人の經驗を分析して得たる規律を直ちに客觀的實在其の物の規律として用ゐたるがゆゑに、其の結果として彼れは從來の本體論風の哲學組織を立つることに躊躇せざりき。カントが其の批評哲學を完成する以前の一時期に於いてはラムベルトの攻究と略ぼ相同しき方面に向うて其の思想を運ばしなり。

當時心理學の研究に心を用ゐたる者頗る多かりし中に就いて最も重要なる位地を占めたるはテーテンス(Teichens. 一七三六—一八〇五)なり。彼れがカントに影響を與へたること決して少小にあらず。メンデルスゾーン及びスルツェルはライプ

ニッツ、デルフ學派の心理説より出立して吾人の感情的心作用に注意し特に之れを吾人が心的生活の一方面として眺かんとすることに向かひたりしが、最も明かに之れを他の心作用と區別して之れに感情(Fühlungen)又は(Gefühle)と云ふ名を附し、吾人の心作用の分類法として從來多くの學者の取り來たれる知力と意志との二分法に換ふるに知情意の三分法を以てしたるはテーテンスなり。此の三分法は後にカントが更に之れを用ゐ傳へてよりは殆ど心理學上の通説たるかの如き觀をなすに至れり。尙ほテーテンスは吾人の知識の成り立ちを説明して知識は自動的知力(Verstand.)の與ふる形式と、及び感覺によりて與へらるゝ内容と、此の二者の結合により成ると言へり。此等の點及び其の他彼れが知識論上の所説はカントより影響を受けたるが如く見ゆ。

其の他心理學者として茲に其の名を掲ぐべきものにはテーテンスの論敵にしてポチーの説に傾きたるロッシュウス(Losius)、又ロックとライプニッツとの中間に其の位地を占めんと試みたるカシミール、フンク、クロイツ(Casimier von Creuz. 一七二四—七七〇)、又同じくロック及びライプニッツの所説を接合し且哲學歴史家として其の名

を遺したるティエマン(Tiedemann. 一七四八—一八〇三)等あり。

又當時に於いて美學上の著述を爲したるものにはスルツェル(Sulzer. 一七二〇—一七七九)及びモリッツ(Moritz. 一七五七—一七九三)あり。彼等の所説はまゝむねパウムガルテンの所論を根據としたるものなりき。

〔九〕當時の學者の中人類歴史の哲學的見解に心を用ゐて思想界に輕からざる位地を占めたるは當代の一文豪ヘルデル(Herder. 一七四四—一八〇三)なり。彼れは其の歴史上の見解に於いて一般の啓蒙的學者の平準以上に出でたる所あり。彼れは吾人の自然に發達する能力を有することを根據として歴史上の變遷を説かんとせり、即ち彼れの根本思想はライプニッツが哲學思想より得來たれるものにして、而して其が哲學の眞意を解することに於いて彼れは當時の一般の啓蒙的思潮の上に出でたり。ルソーは人類が今日に至るまでの社會文化の進歩は寧ろ墮落にして、是れより以後に於いて若し改めて其が眞正なる自然の發達に任すれば吾人の實に幸福になり得べきことを信じたりしが、當時佛蘭西に於ける社會改良家は概ね皆此のルソーの信仰を受け繼ぎたる者なりき。ヘルデルは同じく自然

の發達を説き而して彼れは此の思想を過去の歴史に用ゐて人類が今日に至るまでの經過も亦ちのづからなる發達の順序を経たるものにして、其が起原に於いても人類の思慮して相約したることに始まれるにもあらねば又特に神明の制定せたるにもあらず、寧ろ人間天稟の性に從ひて自然に成り立ちたるものなりと云へり。彼れは又此の思想を用ゐて言語の起原を説明せり。當時言語の起原を論ずる者、コンヂヤックの如きは言語は人間の知慮を以て發明したるものなりと云ひ、ジュースミルヒ(Jussimilch. 獨逸人)等は上帝の吾人に授けたるものなりと説けり。ルソー既にこれに關して説を爲して人間の性能の自然に開發し行く所に言語の起原を求めしが、ヘルデルは更に明かに自然に成り立ちたるものとして言語の起原を説かんとせり。

斯くヘルデルに從へば人類の歴史段階を成して其が自然の發達を遂げ行くものにして、一國民は其の天稟の性質と境遇とによりて自然に其の歴史をなし行き、而して全人類は段階を成して其が完全なる状態に向かひて進み行くものなり。斯く全人類が完全なる状態に向かひ段階をなして進み行くといふ思想は以て能く

古來種々なる國民の盛衰の歴史を説明し得べきものにして、一國民が一たび榮えて衰へたる後他の國民が其の文化の遺物を傳へて更に一步を進め行くことを見るなりと。以上の歴史哲學的思想は是れヘルデルが其の著「Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit」(一七八四出版)に於いて述べたる所なり。

當時廣く愛人の主義を唱へて社會を改良し教育の進歩を圖らんと力めたるには有名なるベースドゥ(Basedow、一七二三—一七九〇)あり。彼れが教育上の思想はロツクの影響を受けたるものにして、又ルソーが其の教育上の意見を發表したるに接しては大に之れを歓迎したりき。彼れが同志の者には盛にルソーの説を唱導したるカムベ(Compe、一七四六—一八一八)あり。其の外普通教育制度の改良に盡瘁して教育歴史上不朽の名を垂れたるペスタロツツ(Pestalozzi、一七四五—一八二七)あり。ペスタロツツが教育論上の根本思想は人間を一の有機體と見而して其は自然界に於ける他の有機體の發達に於けると同一の法則によりて發達し行くものなりといふに在りて此の思想を廣く實際に應用せるものは是れ即ち彼れが教育上の意見なり。彼れがルソーの思想に喚起せられたる所あるや明かなり。

「二〇」以上掲げし獨逸に於ける啓蒙時代の學者の多くはカントと其の時を同じうしたる人々にして、且つカントが其の新見地を發表したる時には彼等の中には之れに向かひて攻撃を加へたるもの多かりき。カントは其の時代より云へば啓蒙的思潮の盛なりし時に遭遇せるのみならず、實際彼れ自ら該の思潮の影響を示し居る所あり、嘗に其の思想發達の初期に於いて然りしのみならず、其が特殊の立場の成り立ちたる後に於いても猶ほ啓蒙時代の思潮の痕跡を止めたる所あり。されど彼れは其の哲學組織の成り立ちに於いて在來の哲學思想の潮流を一轉せしめて茲に哲學界の新時期を開き出だしたるがゆゑに、彼れを以てこゝに至るまでの歐洲に於ける哲學の發達を結束せるものと見做し得べきと共に、又其の以後に於ける新潮流を開き出だしたる者といふべし。是を以て哲學史家或は彼れを呼んで歐洲近世哲學の中心點とする者あり、而して其の中心點たる所以は、彼れが一方に於いてはゲルマン學派に於いて極まれる唯理學派の潮流に應接し、他の一方に於いてはロームに於いて極まれる經驗學派の潮流に應接し、而して此の二大潮流を自家の所説に萃め、同時に此の兩者を脱出して茲に新しき批評哲學を打ち立

てたる所に在り。

第四十六章 イムマヌエル、カント

「一」カントは其の思想發達の上より云へばゾルフ學派に出立して中ごろ經驗學派の影響を受け後遂に其の「批評哲學」の新見地を開ける者なり。今試に翻りて彼れに至るまでの歐洲哲學思想の發達を案するに唯理學派と經驗學派との二大激流ありて前者に於いてはデカルト之れを創めてより偉大なる純理哲學上の組織を打ち建てたる人々の續出し來たれるあり而してライプニッツを経ゾルフに至りては唯だ吾人の概念を唯だ論理的に取扱ふことによりて吾人の一切の知識を形つくり得る如くに考ふるに至りたり、換言すれば彼等が哲學研究の方法は演繹的また數學的なりきといふ可く、數學上吾人の概念の關係を確實に定め得るが如くに哲學上の知識をも亦概念の相互の關係として之れを演繹的に論じ定めんと欲することとなれり。されどかくの如く唯だ概念を分析して演繹的に論じ行くことによりては實際吾人の知識の内容を得ること能はず其の論歩を進め行く途すがら知らず、經驗上の事柄を取り入れざるを得ざりしことは前にゾルフ學

派を叙せし所に於いて已に述べたる所なり他方に於ける経験學派の立場よりすもば其の極まる所はヒュームにして而して彼れに至りては吾人は自然界に關しても通通なる學理的法則を立て得ざることとなり因果律といふも亦是れ吾人の心理上の主觀的習慣に外ならずといふに至れり。斯くの如く一方に在りては通通の理を説かんと力をめて終に知識の内容を爲す事柄を得るの道を説き得ざるの失あり他方に於いては知識の内容を成す事柄を得るの道を説くことに力めて而も之れを知識となす所以の理を得るの途なきに至るの困難あり。是れ畢竟するに一方は吾人の知識の形式をのみ與へ他方は吾人の知識の素材をのみ與へんとするが如きものにして其の形式と素材とを引き離す所是れ即ち兩學派各の弊の存する所にはあらざるか。かく見て吾人の知識は形式と素材との兩要素を以て成れるものなりとして茲に新見地を開くの途を發見したる者は是れ即ちカントなり。

カントの見る所によれば從來の哲學は、二大潮流の何れを見るも先づ吾人の知識の成り立ちを考ふることを力めざる點に於いて誤れり。ゾルフ學派は吾人の知識の成り立ちを考へずして豫め之れを以て實在の自性を窺ふに足れるものと定め吾人の論理上考ふる所は取りも直さず實在そのもの、相を示すものなりとして其の論歩を進めたり。されど是は畢竟吾人の知識の成り立ちが果たして其の如きことを爲すに堪ふるものなるか否かをも詳しく考へずして唯だ其の然らんことを獨斷して進み行けるものなり其の病根こゝにあり。他方に在りてヒュームは吾人の知識を以て實在の通通的實相を窺ふに足らざるものとなしたれども、其の懷疑は未だ充分に吾人の知識の成り立ちを鑿索したる結果として得たるものにあらざ、ロックを始としてヒュームに至るまで吾人の知識の起原及び成り立ちを考究せざりしにはあらず而も其の考究は専ら心理學上の觀察に止まり唯吾人が心理的發達の經驗上の順序を云へるものにして未だ能く知識そのもの、成り立ち又經驗そのもの、出來べき所以を考究したるものにあらず此の點に於いては彼等も亦獨斷的(Dogmatisch)たるの弊あるを免れずと。かく考へてカントは彼れ以前の哲學者が先づ吾人の知識の成り立ちを考ふることを爲さずして直に實在の研究に進み行けるを殊にゾルフ學派の唯理説を名つけて獨斷説(Dogmatism-

自己と呼び做せり、而して彼れは此の唯理學派の獨斷説とヒュームの懷疑説との上に出で、新しく知識研究の道を開き此の知識論を以て哲學の當に開拓すべき領域となせり。後に哲學史上知識論を以て哲學の全部分又は其の主要なる部分と見做すの説あるは蓋し彼れに始まれるなり。但し彼れに至るまでの哲學思想の發達を顧れば、ロックの己に彼れに先だちて知識論上の問題を掲げ出だし其の方面に向かひて哲學の研究を進めんとしたるあれども近世の歐洲哲學に於いて知識論を以て甚だ主要なる問題たらしめ、且つ此の問題の最も深き意味を明かにしたるものはカントなり。而して其の然る所以を尋ねれば是れカントが同しく知識の研究を爲すにもロック等の經驗心理學的觀察を以て正當に其の問題の所在と性質とを看取れたるものに非ずとなしたるにあり。蓋しカントが知識論はロック等の研究と全く其の着眼點を異にせり是れ彼れが「Transcendentalismus」を開き出だしたる所以なり（下去つて説く所を看よ）。斯くして知識論の根本的問題がカントに於いて最も明かに言ひ現さるゝに至れるは彼れが唯理學派と經驗學派との衝突の間に其の問題の存在する所を發見したるが故にして、而して彼れは之れを説かん

が爲めに唯理學派にもあらず又經驗派にもあらずる批評的哲學（即ち先づ吾人が哲學的研究の機關として用ゐる吾人の知識の起原成り立ち及び界限を批評的に研究することを目的とするもの）の新天地を開けるなり。

〔二〕カントが家の所傳によれば其の家はもと蘇格蘭より獨逸に移住したるものなりと云ふ。彼れの父はクリニヒスベルヒに住みて馬具用の皮帶を造ることを業として其の家計は食しかりき。イムマヌエル・カント (Immanuel Kant) は一千七百二十四年四月二十二日其が長男として生まる。彼れの父母は當時盛に行はれたるピエテイスト風の宗旨を取りて固く之れを信じたり。此の敬虔の念に富みて和睦せる父母が其の家庭に施したる道徳上嚴肅なる教育はカントの性質に抜くべからざる痕跡を遺せりと考へらる。彼れは一千七百四十年以後其の生地クリニヒスベルヒの大學に入りて哲學、數學及び神學の講義を聽く、此の大學に學べる間彼れは殊に數學及び哲學を好み此處にてニュートンの物理學上の知識を得、尙ほ廣く自然科學上の研究に其の心を用ゐ、而して哲學上は當時一般に行はれたるデアルフ學派の思想の中に養はれたり。斯くして彼れが研究は多くの學科に亘れ

り家貧なりしが爲に大學に在りし間多くは自ら給せざるを得ざりき。大學を卒へて後一千七百四十六年より九年間ばかりは二三の人々の家に在りて師傅となり居り其の間の干係により一候爵の家と相識るに至れりとおぼしく上流社會の交際にも慣るゝことゝなれり。一千七百五十五年の冬より彼は生地の大學に無俸給講師(Doctor)として講義を開くことを許されたりしが彼れが爾來講義せる課目には數學、物理學、論理學、純理哲學、道徳學及び法理學あり其の他にも曾て地文學及び人類學を講し又自然神學及び教育學をも講したり、且つ一たびは金石學の講義をも爲せりと考へらる。彼れは曾て數學及び哲學の員外教授の椅子を得んとしたれども會々此の椅子の廢せらるゝに遭うて其の目的を達すること能はず、一千七百五十八年には論理學及び純理哲學正教授の椅子の空しくなりしことありしも是れ亦他人の占むる所となり、一千七百七十年に至りて漸く此の椅子を占むることを得たり。彼れは曾て他の大學より招聘されたることありしも辭して行かず一意其の大學に於ける教授に心を傾けて一千七百九十六年に至るまで絶えず其の職に力めたりしが此の年に至りて老衰の爲めに止むを得ず講義を止むることゝなり、一千八百〇四年終に老病を以て逝きぬ。彼れは終生娶ることなかりき

又生涯東普滬士の域外に出でたることなかりき。

カントの講義は大に學生等の愛する所となりき。一千七百六十二年より一千七百六十四年に至る間彼れの講義を聽きたるヘルデル(當時ケニヒスベルヒに在りて一學校の教師たりき)は後に彼れの講義を稱揚して、最も思想に富みたる講演は彼れの唇より流れ出でたり彼れの講義に於いては滑稽も亦乏しからず、彼れが講演の席に侍することは最も樂しむべき課業なりきと云へり。彼れの講義するや専ら學生に與ふるに知識を以てするのみならず又道徳及び宗教上其の心を堅固にせんことを心掛け、而して其の大學の學生に對するの講義と廣く世の學者社會に訴ふるの著作とを分別したり、故に其の論述の趣に於て彼れ此れ同一ならざる所あり。カントは其の性頗る温厚快活にして規律正しく且つ信義を重んじ又人と交るには頗る友誼に厚かりき。彼れは食事の時に朋友を招きて共に相語ることを樂しみしが其れらの談話に於いては哲學上の事を避けて専ら政治上の事を談ずるを好みき。彼れば政治上に於いては自由主義を懷き亞米利加合衆國の獨立戰爭及び

佛蘭西の革命事業に對して大に同情を表したりき。彼れが獨立を愛するの氣象は其の言葉によりても明かに認むることを得、彼れ曰はく、「一人の行爲を他人の意志の下に隸屬せしむることばかり忌み嫌ふべきものなし」と。彼れが生活上規則正しかりしや朝に臥床を出で、より夕に寢に就くに至るまで或は業務を執り或は食事を爲し或は散歩する等悉く其の時間を違ふことなく唯だルソンの著「エミル」の出版されたる時之れを播き見て其の面白さに其が常規なる午後の散歩を怠たれることありきといふ。彼れは大にルソンを愛讀し教育思想に於いてはルソンの感化を受けたるもの多かりき。

「三」カントは當時一般に獨逸の學界に行はれたるライプニッツ、ゲルプ學派の中に養はれ後遂に其の批評哲學を形づくるに至れるものなるが彼れが思想發達の順序に就いては哲學史家の間其の見を異にする所あり、蓋し今日に遺存せる材料少なからぬと尙ほ委しくは決定して云ひ難き所あればなり。されど其の大體に就きていへば畧之れを四期に分かつことを得べし。第一期は即ち彼れがライプニッツ、ゲルプ學派の獨斷說に居りし時代なり。第二期は彼れが唯理學派の立脚地

に疑を起こし經驗學派の思想によりて動かされ終には純理哲學に對しては頗る懷疑的になり、而して此の方面に於いて其が確信を失ひたる代りに道徳上の直接の感情を奪み之れを以て純理哲學的論證を要せず之れとは全く相異なる範圍に屬するものとなして恰もこゝに其の安居を得んとしたるかの如くに見ゆる時期にして、此の期に於いて彼れは英吉利學者の影響を受けたることを最も著かりき、彼れが思想の此の變遷は一千七百六十年以後の彼れが著述に於いて見ることを得。第三期は彼れがヒュームの哲學の影響を受けながら中心之れに満足せずしてラムベルトと共に知識論上の研究に着手し哲學攻究の方法に改良を行はんと力め其の後に建設をたるとる批評的哲學の途に向かひて進み行かんとし而も又ライプニッツが其の著「人知新論」に於いて發表したる思想を探り用ゐて茲に一面唯理學派の學相を具へ又多少神秘的趣味を加へたるが如き哲學組織を案出したる時代簡に云へば彼れが其の批評哲學に向かひて一步を進めたると共に又第二期に於いて大なる影響を受けたる經驗學派の思想より多少唯理學派に立ち戻りたる時代に於いて是れ彼れが一千七百七十年に正教授の講座を得たる時にものせる就職論文に

於いて發表したる立脚地なり。第四期は彼れが遂に其の特殊なる批評哲學を成したる時期にして其の思想は彼れが一千七百八十一年に公にせる名著「純粹理性批判」に於いて發表したるものなり。されど彼れ一千七百七十年其の就職論文に於いて言ひ現したる所より其の固有なる批評哲學を完成するに至る間に於ける思想發達の次第に就いては明瞭にし難きものあり。此の期間彼れが書簡によりて察するに彼れが新見地を發表すべき著述を世に公にするとの近きにあらんとを豫告しながら尙自ら其の望を滿たすと能はずして久しく其の完成に至らざりしと思はる。

〔四〕カントが初年の思想の發達に最も大なる影響を與へたるはデルフ學派の思想とニートンが物理學的世界觀となり。此の二つの思想は大に其の由來と趣きを異にするものにてありながらカントの思想を形つくることに於いて共に其の痕跡を遺せり。彼れが初年の著述を見れば其の如何に自然科学上の研究に其の意を注げるかを知ることを得べし。彼れは其の最初の著作(一千七百四十七年出版)に於いてデカルト派の物理學者とライブニッツとの間に於ける問題(カント

は此の問題を言ひ現して運動する物體の力は物體の量と單に其の運動の速力とを相乗したるものなるか、將た其の量と運動の速力の自乗とを相乗したるものなるかといふ點に在りとなせり)を論じ又彼れが學位を得たる時の論文(De igne. 一千七百五十五年)に於いて物體の相牽引するは其が直に相觸るゝことによらずして其の間に彈力ある物質の存在するによるとし、且つ光及び熱も亦此の物質の振動の傳はることによりて起ることを論じたり其の他彼れが自然科学上の著作として最も大なる價值を有するは「Allgemeine natur Geschichte und Theorie des Himmels.」(一七五五出版)なり。彼れは此の書に於いて自然科学の機械的説明と神の作爲を言ふ所の目的觀との相背戻するものに非ざること論じて謂へらく、自然の勢力は自ら整然たる秩序を爲す様に働き物質はあつから法則に従うて目的に合へる組織を成す、而してかく物體の諸部分があつから相合して美なる結構を形つくるといふことが神の存在を證するものなり、若し神なしとせば物體の運動が自ら此くの如き秩序をなすといふことは解すべからず、故に一方に於いては目的觀を排斥すべからざると共に又物體の運動を説明せんには何處までも其が直接の

原因を自然の勢力に求むべきなりと。ニュートンは引力以外の前進的運動を最初物體に與へたる者は之れを神の直接の働なりと考へざる可からずと云へりしがカントは其の前進的運動の直接の原因をも猶ほ物體其の物の關係に於いて求むべしと考へ、而して彼れが之れを説かんが爲めに案出したるものは是れ即ち星雲説なり。其の論に以爲へらく太陽及び遊星等元來凡べて混沌たる雲霧の状態をなし、ものが自然に相團結せんとしたる結果として茲に引力以外の運動を生ずることとなり、從ひて同一の仕方によりて太陽系統のみならず、一切の恒星の系統も亦形つくられたるものなりと。此の意を以てカントは若し物質をさへ與へられなば之れよりして自然に世界を成り立たしむることを得べしとまで云へるなり。此の星雲説はラブラリスも亦獨立に考へ出でたる所にしてカントのよりも數學上精密なる論を立て、之れを其の一千七百九十六年に公にしたる“Exposition du Systeme du monde.”に於いて發表せり。此の星雲説に於いてカント及びラブラリスは自然科學の機械的説明に於いてニュートンよりも更に一步を進めたるものなり、蓋しニュートンは遊星及び慧星の軌道を亂らざらしむるとに於いて神が時々

外より其の力を添ふることを要するが如く考へたりしが、此の星雲説に基きたる天文上の構説は一切其の如き外より添ふる力を要せずあらゆる星體の運動を自然の機械的法則を以て説明することを得と爲せるものなり。

ライプニッツ、デルフ學派の影響の下に於いてカントが著作したるもの、中にて先づ最も初年に屬するは彼れがケーニグスベルヒ大學に講師たりし時の論文“*Principiorum primorum Cognitionis Metaphysicae nova elucidatio.*”（一七五五出版）なり。彼れが此の著に説ける所は其の要點に於いてはちほむねライプニッツ、デルフ學派の所説を守りたれどもそを説き變へたる所亦少ならず蓋し彼れはライプニッツ、デルフ學派を奉じたりとはいふものから、初めよりして此の派の説き傳へたる儘を守れるにはあらずき。次に此の部類に屬する彼れが著作の主要なるものは一千七百五十六年に出版せる“*Monadologia Physica.*”なり。彼れは此の書に於いてはライプニッツが謂へるモナドの説を改めモナドを以て多少の廣さを有して而も單純なるものとなし、而して其の結果としてアルノー風の説に似よれる思想を吐露せり、されど彼れはモナドが空間を占領することを説明して以爲へらく是れ其が

反撥力と牽引力とによるものなり、換言すれば物体が若干の空間を占有し他の物体に對して障礙を呈するは此の反撥力と牽引力との結果にして、此の二つの力が相平均したる所是れ物体の界限を成すものなりと。即ち彼れは動力的説明を以てして物体の廣袤に關してはライプニッツの説とニュートン風の説との中間に立たんとせる者なりと云ひて可なり。

一千七百六十三年に著したる『神の存在を證明する唯一の證據』と題する書に於いては彼れが純理哲學上の確信の已に大に動搖したるを見る。彼れ言へらく吾人の幸福を全うせんには吾人の自然に具へたる常識の直接に示す所に従うて神の存在を確認するを以て足れりとす特に哲學上之れを嚴密に論證するの要なしと。されど彼れは尙ほ神の存在を以て吾人の論證し得べきものとせり。但し曰へらく概念の分拆を以て神の存在を論證すること能はず、蓋し存在といふことは一物の性質たることを得るものに非ず、存在する或は存在せざるといふことは一物に就いて立言し得べき性質を増減するものに非ざる故に一概念を分拆して其中より存在といふことを論じ出だすこと能はざるなりと。尙ほ彼れは一千七百

六十四年の著“Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral.”に於いては進んで哲學及び數學兩者の攻究法を比較して之れを以て全く相異なれるものと見るに至れり。以爲へらく數學は證明を施すべからざる少數の原理より出立し其れより演繹的に論じ出だして一步々々に確實に其の事柄を組立つるもの即ち総合的 (Synthetisch) のものなり、哲學は經驗として吾人に與へられたるものを取り之れを分析して其の中に行はるゝ法則を發見せんとするもの即ち分析的 (Analytisch) のものにして之れを研究する方法はニュートンが自然科学が研究に於いて取ることとを要すとしたる方法と同一の道を取らざる可からず此の外に之れを確實ならしむるの道なしと。而して彼れの見る所に從へば斯くして攻究すべき純理哲學は諸種の學問の中にて最も困難なるものにして嚴密に云へば事實には未だ一の純理哲學の作られたるものなしといふべきなり。かくカントは純理哲學に對する確信を失ひ來たれる其の代りに道德的・感情的を以て獨立固有の領域及び根據を有するものとなせり彼れは此の書に於いて善を認むるの感情と眞理を知るの能力とを以てものづから相異なるものとなし、ゾルフ學派が善を認むる

の作用を知力の一種として論ずることを非なるものとせり。彼れは其の著“*Begriffungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen.*”(一七六四出版)に於いても亦善美に對する感情を説いて其は道德上の指揮を與ふるものとして確實なるものなるが如くに云へり。此等の論に於いてはカントが英吉利のシャップベリ、風の思想に感化され居る所明かなり。

一千七百六十六年の著述なる“*Träume eines Geistesehers.*”に於いて彼れは更に進んで懷疑説に向かひ行けり。以爲へらく吾人が純理哲學上種々の考説を構へ得ることは争ふべからず、されど此は狂人が種々の妄想を思ひ浮かぶると相選ばざるが如き所あり、靈魂の本性と云ひ自由意志と云ひ及び其の他の純理哲學上の問題は吾人の知力を顧ることを爲す哲學に取りては到底解釋し得べからざるものなりと。彼れは又精靈に受ることによりて秘密を知り得と説く神秘説(スエーデンボルクの説くが如き)をも充分論理的に構設し得て驚くべき意見に到達し得ることを示さんとせり。蓋し彼れの意は經驗を離れては如何に奇怪なる説をも均しく能く構設するを得といふことを諷刺したるものと見ゆ然れども降神術を信

ずる論者中にはカントをも其の身方なりと主張せる者あり。斯くカントは懷疑説の方面に進み行きて純理哲學は學理としては立つこと能はずといふ結論に達したるものから猶ほ道德上の命令は別に其れ自身に獨立の効力を有すといふことを主張せり、蓋し彼れに取りて知識上の事と道德上の事を分別異なる範圍を成すといふ思想は早くより其の根柢を固めつゝありしなり。斯く彼れは其の思想の明かに懷疑説に進み行けることを示し居れども猶ほ其の一千七百六十八年に出版したる空間に於ける物體上の差別の根據を論じたる書に於いては先きにオイラー(Euler)が論じたる如く空間は唯だ物體の部分の相互の關係にのみ存在するにあらず、即ち關係的のものに非ずとして絶對的空間の實在を主張し、是は唯吾人の思想上に思ひ浮かべたるものに非ずと論ぜんとしたりしが(ニュートンが空間の論と比較せよ)、一千七百七十年の論文に於いては已に空間を以て單に吾人の心の上のものに見定むるに至れり。

上に云へる彼れが一千七百七十年のものしたる論文“*De Munde Sensibilis atque intelligibilis formae Principiis.*”はカントが思想發達の歴史に於いて重要なる地位を占む

るものなり。彼れ論じて曰はく吾人の知識に二種あり、感官上のものと理観上のものと是れなり、前者は事物を吾人の感官に現れたる様(ensibilia)に於いて示すものなり、後者は吾人の理智を以て看取する所のもの(Intelligibilia)にして事物を其れ自身の様に於いて吾人に知らしむるものなり。感官的知識に於いては吾人は更に素材と形式との二要素を分析せざるべからず。素材は即ち感覺なり、而して此の感覺に秩序を與ふる所の法則是れ即ち知識の形式にして吾人の心性に本具せるものなり。一言に云へば吾人の五官に感じたる種々なる感覺に關係を與へて之れを整ふるものなかるべからず、而して之れを爲す所の形式は即ち時間と空間となり。斯く感覺を時間及び空間の中に容れてこゝに初めて現象(Apparentia)は成り立つなり、時間及び空間は客觀的に存在する實物にあらざり、又其の實物の性質にもあらねば其の關係にもあらざり、吾人の心其物に具はれる主觀的の見方なり、換言すれば心性に本具せる純なる直觀(Intuitus Purus)なり。

斯くして感官上の知覺が成り立ちたる上に於いて吾人は尙ほ之れに論理的作用を施して之れを概念に纏め更に之れを普通の法則の中に纏めこゝに初めて經驗

(Experientia)は成り立つなり、されど件の論理的作用は感官上の物を聊も離れたるものにはあらざり、又此の段階に於いて吾人の知識は猶ほ感官的知覺の範圍を越えたるにもあらざり、唯だ知解の論理的作用を加へざる段階の感官的直覺(感性)は所動的にして論理的作用を用うる知解は能動的なるの差別あるのみ。

吾人の知力には上に云へる論理的作用の外に實在其の物を看取する理智的作用あり、而して純理哲學は此の範圍の知識を以て成るものなり。此の知識の範圍に於いては吾人の理智其の物に生得の觀念としてにはあらざり、唯だ其が本具せる法則として幾多の原理あり、例へば質料と云ひ、原因と云ひ、必然といふが如き觀念は本來吾人の理智に具はれる法則にして而して吾人は之れによりて實在其の物の相を認め得るなり、而して此等の原理を追求し行けば吾人は終に最高の存在者即ち神に到達することを得。

何故に吾人は我が理智に本具せる思想の法則に従ひて實在の相を認め得るか。カントはこゝにライプニッツの思想を取り來たり、吾人の心と其の他の諸物との間に相應する一致の存在することを以て之れに答へ、而して其の一致の根據は神に

存すとせしめ、言ひ換ふれば諸物の間に相互の關係ある所以又吾人が外物を知識し得る所以は凡べて吾人と外物とに通ずる原因即ち神によりて能くし得ることなりと説けり。

更に其の一千七百七十四年頃の純理哲學講義(ベリッテン Politz)が初めて出版したるもの(に於いては、カントは尙ほ一步を彼れが後の批評哲學の立脚地に向つて進めたるを見る)。

カントが其の批評哲學を發表して歐洲の思想界に一大新時期を開き出だせる名著『純粹理性批評』(Kritik der reinen Vernunft)は一千七百八十一年に出版されたり。彼れがメンデルスゾーンに送れる書翰によれば、此の書に陳述したる所のものは少なくとも十二年間の熟慮の結果にして其の編述は四月乃至五月の間に成し了へたるものなり、彼れ曰はく此の書に於いて最もよく注意したるは其の内容にして、特に讀者をして其を解し易からしめん爲めに編述の軀裁に力を勞することとなさずと。蓋し彼れの此の書を編述するや恐らくは彼れが其れより以前のものしたるものをも其の中に容れ込めたりと考へらる。此の書完成の時日に就きては

史家の間異説あれど多分一千七百八十年に成れりしものならん。此の書の第二版は一千七百八十七年に出版せられたるが、カントは其の第二版に於いては第一版に改竄を施したる所なり。斯く改竄を施したる第二版は果してカントの自ら言へる如く第二版の所論が其の第一版に論せんと欲したる所の趣意を更によく言ひ現したるものなるか彼れが批評哲學の眞意を見んには第二版を以て優れりとすべきか將た第一版を以て優れりとすべきかといふことに就きてはカントを研究する者の間に少なからざる議論あり。ハルテンシュタイン(Hartenstein)及びニールニヒ(Überweg)等はカントの自ら言へる所を善しとして其の第二版を取り、ローゼンクランツ(Rosenkranz)ミシエー(Michelet)及びシベンハウエル等は第一版を優れりとし其の第二版に於いて改めたる所は却てカントが批評哲學の趣意を害ふに至れるものなりとせり。但しシベンハウエルが云へる如くカントが世評を恐れて意氣地なくも其が前説を變更せりと云はんは其の實情を得たるものにはあらざらんが、兎に角カントが『純粹理性批判』の第二版に於いては彼れが其の第一版に於いて寧ろ充分明瞭に言ひ出だし居らざる實在論的方面の方に重きを置き、而

して此の實在論上の方面が第一版に於いても決して全く説かれざるにはあらずるも其が他の方面の爲め壓せられたるが如き趣あること明かなり而してカントは彼れが哲學に實在論的方面の存在することによりて世人の誤解を招きたりと考へたるより第二版に於いては主として此の方面に重きを置き論じたりといふほどのことは正確なるべし。一千七百八十三年カントは“Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik”を著せり。此の書に於いて既に彼れは其の『純粹理性批判』の第二版にて重きを置きて説かんとしたる實在論的方面をば其の第一版に於いてよりも明瞭に説き現したり。且つ此の書に於いては彼れが『純粹理性批判』に於いて綿密なる研究の順序を一々に示して到達したる結果をば簡明に結束して開陳せり。

彼れは一千七百八十五年には“Grundlegung zur Metaphysik der Sitten”を著して其の倫理説の原理を論じ、一千七百八十六年には“Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft”（自然科学の哲學的原理）を著せり。

彼れは一千七百八十八年には『實踐的理性批判』（“Kritik der practischen Vernunft”）を著しぬ、是れ彼れが有名なる第二の批評論にして吾人の道徳上に於ける理性を論じたるもの、又前に云へる“Grundlegung”と共にカントの倫理哲學を窺ふに最も肝要なる書なり。次いで一千七百九十年『賞鑑性の批判』（“Kritik der Urteilskraft”）を著しぬ、是れ彼れが有名なる第三の批評論にしてカントの美學説は此の書の中に於いて發見せらる。

彼れが一千七百九十三年に著したる“Die Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft”は彼れが『實踐的理性批判』の一部分と共にカントの宗教論を窺ふに必要な書なり。又一千七百九十七年に著したる“Metaphysische Anfangsgründe der Rechtslehre”及び“Metaphysische Anfangsgründe der Tugendlehre”（此の二つを合して“Metaphysik der Sitten”といふ）は彼れが講義を編輯したるものにして其の目的とする所彼れが倫理哲學原理に基づきて吾人の徳行及び法理を論ずるにあり。カントの著述には右の外人類學、論理學、地文學及び教育學等の講義の出版されたるものあり。彼れが時々著したる論文及び著書も亦少なからず。

〔四〕上に掲げたるカントが批評哲學時代の著述を以ても知り得る如く、彼れの

哲學は三つの主要なる部分より成れるを見る。彼れは先づ其の批評的研究を吾人の知識作用其の物に用ゐたり、是れ即ち其の純粹理性細しくは純粹知的理性の批判なり。彼れは次ぎに知的理性とは全く別なる範圍を占むるものとして吾人の道徳上の判定を論じたり、而して道徳上の判定に於いて現るゝ所のものは是れ即ち實踐的理性(又は行的理性)の指示にして、彼れが之れを知的理性と相分かちて全然異別なる範圍に置きたるは、上に彼れが著述を掲げたる所に於いても認め得らるゝ如く、彼れが其の批評哲學を完成するに先だちて已に早く思ひ到れる所の意見なりき。第三の部分は吾人が下す判定の美醜の品評に現れたるものを論じたるものにして、彼れは之れを吾人の感情の方面に係れるものとなし、之れに對して倫理の論は吾人の意志の作用に係れるもの第一なる批判は吾人の知性に係れるものと見たるなり。即ち彼れが哲學の三部分(三批評論は當時唱へ出だされたる心理學上の知情意の三分説を取りて之れに連結せしめたるものなり。以下先づカントが第一の批評論なる知識論より開陳せん。

知識論

〔五〕 上にも云へる如くカントの批評哲學は知識論上の問題より出立せるものなり。彼れは其の初めザルフ學派の獨斷説の中に養はれたるものにして、初年には其の説に従うて吾人が論理的に必然に考ふることは取りも直さず實在其の物の相なりと見たり、されど後に彼れは唯だ概念を用ゐて爲す論理的作用を以てしては實物の存在と其の因果の連鎖とを認むること能はずと見て、茲に獨斷説の羈絆を脱するに至れり。カントが此の思想の變化は一千七百六十年以後の著述に於いて認むることを得べく、彼れは當時吾人の概念を論理的に取り扱ふのみにては能く種々の説を構ふるを得而して論理的關係より云へば何れも皆至當なるものと云ふを得れども、畢竟此等は凡べて架空の論たるを免れずと見るに至れり。然らば實在の相を認めんには吾人の經驗によりて得たる觀念によらざるべからざるか、之れを以て善く實在に關する知識を形づくり得べきか。ヒュームは即ち此の方面に向かひて其の研究の歩を進めたる者にして、而して其の研究の結果の到る所終に吾人が實在の相を認むる時に用うる因果及び實跡等の觀念は吾人が經驗の根據たる感官的知覺よりしては到底正當に得らる可からざるものなること

爲へらく経験によりて與へらるゝものは唯だ知識の材となる感覺の外ならず、去
 かも吾人の知識は感覺のみを以て成ること能はず別に之れに形式を與へ之れを
 形つくるものなかるべからず、之れを形つくるものは吾人の心性其の物の具ふる
 働き様なり、此の働き様は経験によりて來たるものに非ずと、即ち彼れに於いては
 ライブニツが謂はゆる生得といふ觀念は更に改められて吾人が事物を経験する
 時に於ける心性其の物の働き様を意味することとなり、此の働き様によりて知識の
 素材なる感覺を形つくりて初めて茲に眞實の経験は成り上がることとなるなり。
 斯く形式は心性其の物の先天的なる働き様なるが更に素材なくしては形式其の
 物は全く空なるものなり、又形式なくしては素材は全く混沌たるものなり。素材
 其の物は聊も關係秩序規律を具へず。順序を與へず、統一することを爲さず形つ
 くることを爲さずしては其處に知識と名つくべきものは成り上がるべからず、而
 して斯く感覺に順序を與へ、それを統一し形つくる作用是れ即ち知識に於ける先天
 的要素なり。

〔七〕 經驗説の誤謬は件の先天的要素を認めざるに在り、故に經驗説の立脚地よ

りしては吾人の知識に與ふるに遍通性及び必然性を以てすること能はず、畢竟す
 れば個人的、主觀的なる觀念以外に眞實に客觀的効力を有すとせらるゝ知識を形
 つくること能はず、確實に客觀的遍通性を有せざる知識は、未だ眞に知識の特質を
 具せるものといふことを得ず、而して此の遍通性及び必然性は吾人の後天的に得
 るものよりしては如何にしても來たり得べきものに非ず。そは若し其の効力が
 唯だ經驗にのみ依り居るものならば吾人が其の場々^{／＼}に於いて經驗したる時に
 於いてのみそを然りといふべくして其の以外に於いては其を必ず然り或は遍通
 的に其の如かりといふこと能はざればなり。かくの如く遍通的なる又必然的な
 るものは必ず先天的のものならざるべからずといふこと、是れ深くカントが心底
 に横はりたる確信にして彼れが批評哲學の全軀を貫ける肝要なる思想なり。
 唯理説は其が取る所の論理的演繹的研究法によりて吾人の知識に與ふるに遍通
 性及び必然性を以てせんとするものなり、されど其の斯くして與へたる所のもの
 が果たして眞に實在の相なるかを示すこと能はず。唯だ論理的作用を以て概念
 を取り扱ひ居る間だ唯理説は到底實在の相を吾人に示し得るものに非ず、故に少

しも後天的要素を容れずして嚴密に其が唯理論上の研究法を運ばせ居る間は其の得る所は終に空なるものとなり了せざるべからず、蓋し其が論理的作用によりて與ふる所の判定は遍通的又必然的のものなりとはいふものから其の判定は詮ずるところ同言的判定(即ち甲は甲なりといふ如きもの)又は分析的判定の外に出でずして能く綜合的判定を與へ得るものに非ざればなり。件の分析的判定と綜合的判定との區別は其の名稱を異にしなごら已にロックの所説に於いて認め得る所のものなるが、此の區別はカントに取りては甚だしく肝要なるものとなり、又彼れの之れを脱きし後は論理及び知識の論に於いて特に學者の注意を引くものとなれり。カントに従へば分析的判定は唯だ其の主語なる觀念の中に含まれ居るものを其の客語に於いて分析し出だすに過ぎざるものなり、例へば物體は廣がれりといふは分析的判定なり、何とならば廣がり有するといふことを引き離して物體といふ概念なく物體といふ概念は空間に廣がれるものといふほどの意味なればなり。故に此等の分析的判定は先天的に遍通必然なるものと云ひて可なるも、而も其は唯だ觀念の分析たるに止まりて實在に關する知識を開くものに非ず。

綜合的判定は主語なる概念の中に含まれざる別なるものを客語にて言ひ現すものなり、例へば物體は重しといふ判定の如き是れなり、そは唯だ空間に廣がれる物體其の物といふ概念には未だ含まれ居らざる重しといふことを持ち來たりて之れを其の判定に於いて適合すればなり。かゝる綜合的判定が後天的に形づくらるるといふは論なきことなり、蓋し吾人が一物を經驗したる場合に甲といふ事柄と乙といふ事柄とが其の物に結合し居れりといふだけの事實は認むることを得、然れども其の結合が遍通なり必然なりといふことは後天的には知ること能はず。即ち綜合的判定は後天的に立てらるゝことを得れども後立的に立てたる其の判定は遍通必然なることを得ず。是に於いて吾人に迫り來たる問題は綜合的判定が先天的に立てられざるかといふことなり。若し其が先天的に立てらるゝを得ば其の先天的なるの故を以て其の判定を遍通必然のものと見ることが得べし。故に此の問題を解釋する是れ即ち知識論の問題を解釋すといふべきものなり。而してカントは此の問題を解釋せんとして知識に於ける二要素を分析し其の形式が素材に對する關係を脱けるなり、素材即ち多なるものに統一を與ふるものは

形式にして而して其の形式の何たるかを研究せんとするが彼れが知識論上の問題なり、一言にして蔽へば彼れが知識論の要は知的理性の形式は何ぞやといふこととなるなり(カントが吾人の知識の成り立ちを説いて多なるもの統一たることをいふに在り云々へるはフイブニツツがモナドを脱ける所を想ひ出ださしむ)

〔八〕斯くカントは吾人の知識を成す所の総合的判定を取りて其れが如何にして形つくられ得るかを問ふことに其が知的理性の研究を起し而してかゝる総合的判定は世に謂ふ數學、物理學及び純理哲學に少からず存在するものなりと見たり。例へば彼れは算術上五と七との和は十二なりといふが如き判定をも唯だ分析的のものに非ずと考へたり、何となれば五と七との和を言ふ時に於て唯だ概念としては未だ十二といふものは成り立ち居らず、十二といふ數を考へんには五と七を思ふ外に之れに數を綜合する作用を加へざるべからざればなり。又幾何學に於いて謂ふ所の公理を初めとし又其れに基づきたる證明は凡べて総合的のものなり、例へば二點の間の直線は其の間に引き得べき最も短き線なりといふ命題に於いて其の主語なる直線といふ概念に於いては最も短しといふ分量上の概念を含み居らざるが故に唯だ其の概念を分析したるのみにては此の命題を作

ること能はず。又物理的自然科學に於いては物體の變動するにも拘らず全物界に於ける物質の量は少しも増減せずといふこと及び惰性の法則等を初めとして総合的判定甚だ多し。純理哲學に於いても此の世界の起原に關する論を初めとして総合的判定を形つくること其が學問としての目的なり。

然らば茲に問ふべきは右等の學問に於ける総合的判定が能く先天的に形つくり得るか、又其は如何にして形つくりらるゝかといふことなり、カントの此の問題に答ふるや先づ如何にして數學に於いて総合的判定の形つくりらるゝかを論じ、次ぎに物理學に於けるものゝ論に亘り、終りに純理哲學に關するものゝ論に移れり。

(カントは此の第一部の論を『純粹理性批判』の『Transcendentale Aesthetik』に於いて、第二部の論を『Transcendentale Analytik』に於いて、第三部の論を『Transcendentale Dialektik』に於いて爲したり、後の二部を合稱して『Transcendentale Logik』とす。此の區分はデルフ學派の所説に本つけるものなり。今先づ第一部の論より解説すべし。此の所に於いてカントの論ずる所のものは純直觀の形式なり。

純直觀の形式

〔九〕 カントが此の第一の問題に對して答ふる所は要するに吾人の事物を経験するや時間及び空間の形式に入れて之れを知覺す、而して此の時空の形式は概念に非ずして純直觀(詳しくは純直觀の形式)にして且つ其の形式は先天的のものなりといふに在り。彼れ以爲へらく時空の形式は先天的なるものにして且つそれが純直觀なればこそ數學に於いて遍通必然なる綜合的判定の形つくらるゝなれど。彼れは先づ時空の形式の先天的なることを論じて曰はく、(一)時空は經驗に由來するものに非ず、何となれば其は吾人の經驗したる事物より得來たるものに非ずして、其れ等の事物は寧ろ時空の形式を假定するもの、換言すれば空間に隣接し時間に前後して初めて經驗上の事物たるを得るものなればなり、簡に言へば空間に於ける共在及び時間に於ける繼續が經驗を成り立たしむるにて、經驗が時間空間を作れるにはあらず。換言すれば時空は吾人の知覺を成り立たしむる根本的條件にして知覺を待ちて初めて成り立つものに非ず。(二)空間及び時間は必然なる觀念なり、吾人は能く種々の事物を無きものと考へ去るを得れども時間及び空間を考へ去ること能はず、即ち時空は事物の存在するに必須なる條件にして

而して吾人が必然に其の如く時空に於いて觀ずるといふことは是れ即ち時空の形式が後天的ならぬことを示すものなり。

次にカントは時空が吾人の概念ならざることを論じて曰はく、空間は唯だ一の相連接したる空間としてあるのみ、時間は唯だ一の繼續したる時間としてあるのみ、多くの空間又は時間を概括する所の概念ならず。個々の時間又は空間は一つの時間又は一つの空間を幾多の部分に區別したるものに外ならず、概念が個々の物に對する關係は全く之れと異なり、個々物が一概念の中に在りて其の個々の部分を成すといふに非ずして唯だ一概念に屬するものとせらるゝなり。然るに個々の空間及び時間は一の空間及び時間の部分に外ならず、是れ時空が概念に非ずして直觀なる所以なり。尙ほ時空の概念ならざることは其が無際限の分量を有し居るものなることを以ても知らるべし。吾人は空間及び時間の量に制限を附すること能はず、即ち時空には限りなく多くの部分ありと云はざるべからず。然るに概念なるものは其の中に限りなく多くの部分を含むべきものにあらず、若干の定まれる性質を指して云へるものに外ならず、此の故に時空は先天的なる直觀

なり。

「二〇」時空が先天的直観なればこそ數學に於いて総合的判定が先天的に立てらるゝなれ。「先づ其の判定の総合的なるとは時間及び空間が概念ならずして直観なることによりて解し得らる、何とならば直観なるがゆゑに吾人は幾何學に於いては空間に於いて形を作ることを得數學に於いては時間に於いて數の連續を形づくることを得ればなり。時空にして若し概念ならば其の概念の中に已に含み居るもの以外に一步も出づること能はざるべし換言すれば分析的なる外に進み行くの道無かるべし。然るに時空の直観に於いては皆に一部分の空間を描くのみならず其の空間に联接して更に他の空間を描き又一の時に連接して他の時間を描き而して其の相互の關係を総合的に直観することを得るなり、是れ數學に於いて総合的判定の形づくられ得る所以なり。

次ぎに総合的判定の通、通、必然なることは時空の直観が先天的なることによりて了解せらる。時空は經驗を待ちて初めて効力あるものに非ず吾人の心性に離れざる動き様なるがゆゑに其の心性の行くところ其の動き様の伴はざることなく従うて時間及び空間に於ける關係を成すものとして事物を直観せざることなし。何等の事物と雖も其が吾人に經驗さるゝ以上は時間に於ける及び空間に於ける關係を爲さずして經驗さるゝことなし。此の故に數學上の關係は凡べての事物に通ずべきものなり。

空間及び時間を直観の先天的形式と名づくるも其の意味は吾人が何等の經驗を爲さる前に換言すれば何等の感覺をも感ぜざる前に唯だ空なる形式として吾人の心に浮かべ居るといふ意味にあらず。時空は吾人の心性其の物の動き様なるが故に其はまた感覺を感ずる時の動き様なり、其れを感ずるに先だちて其の動き様のみが時空の形式として獨立に心に浮かべられ居るといふに非ず。是を以てカントは曰はく、此等の形式は經驗する時に即ち經驗と共に起り來たるものなれども經驗より來たれるものにはあらずと。但し茲に經驗と謂ふは感官に感覺を感ずることを言ふと解すべし、吾人は之れを感ずると共に其を時空の形式に入る、而して之れを感ずると其を時空の形式に入るとは離るべからざるものなれども一より他を取り出だすと能はず。斯く多なる感覺を時空の形式に入れ之

れに幾分の統一を與へて茲に初めて事物が成り立つなり。吾人が事物の経験は斯くして成るものなり。故に唯感覺を感ずといふに止まらずして嚴に云へば吾人はもとより唯だ感覺を感ずといふことなし、之れを感ずるや必ず時空の形式に於いてす、事物を知覺すといふ意味にての経験は時空の形式を用ゐて初めて成り立つものなり。されば斯かる意味にて謂ふ経験は時空によりて初めて成り立つものにして時空が経験によりて成り立つものにはあらず。

此くの如く經驗上の事物は時空によりて初めて成り立つものなるがゆゑに何處の如何なる事物と雖も時空の形式の中に在らざるはなく従うて時空に於いて認めらるゝ、數學上の關係に従はざるものなし。かくの如く時空は先天的なるものなるがゆゑに數學上の綜合的判定は通通必然のものたること明かなり、例へば吾人が色眼鏡を用ゐて物を見るが如し、如何なる事物も其の色を帯びて見えざることなしといふことを得、何となれば其の色を帯びしめて見るといふことが吾人が色眼鏡を用うる時の見様なればなり、若し其の色が吾人の見様に存在せずして吾人の見様以外なる對境に存在せば其の對境が或場合に其の色を帯びて見えられ

ばとて他の凡べての場合に於いても必然に其の色を帯びて見ゆとはいふことを得ず。若しかゝらば通通必然の判定は下し得べからず。唯空間及び時間が吾人の心性其の物の作用なるが故に如何なる事物も其の見様の中に入れられずして吾人に取りて經驗上の事物となること能はざるなり。

〔二二〕此くの如く時間及び空間は吾人の直觀の形式なり、之れを直觀の形式と云ひ或は純直觀といふは直觀に於ける素材たる感覺に對していふなり、感覺を抽き去りて後直觀に於いて殘るものは此の形式なり、素材たる感覺と時空の形式とが相合して茲に感官的直觀といふものが成り上がるなり。

詳しく云へば空間は外官の形式にして時間は内官の形式なり。蓋し吾人が外物と名づくるものは凡べて空間に於いて共在するものにして、吾人の心内に意識するものは凡べて時間に於いて連續するものなり。然れども空間に於ける事物も亦吾人の心に於いて經驗せられ而して心に於ける經驗は凡べて時間の形式の中に在るものなるがゆゑに吾人の外物を經驗するや又時間の中に於いてす。故に時間は内官の形式なるのみならず、間接には又凡べての事物の形式なり、事物の出

没變化するや凡べて時間の形式の中に於いてせざるなし。

〔一二〕 時空は心其の物の直観の仕方換言すれば其の主観的即ち心性的形式にして吾人の知覚に於ける凡べての物は皆該の形式の中に現すべきものなり。故に時空は所謂實物(心性以外に其が實在を有するもの)にもあらねば其の物の性質にもあらざ又其の相互の關係にもあらざ。若し其の如きものならば吾人は前に云へる如く其を先天的のものとして吾人の心に浮かぶること能はざると共に數學に於いても総合的判定が先天的に形つくらるといふこと能はざるべし。而して時空の先天的ならんには其れが上に云へる如き意味にて主観的、心性的ならざるべからず。斯くの如き思想の聯續よりしてカントに取りては遍通及び必然なると先天的なると主観的なるとは不離なるものとされり。此のゆゑに吾人が時空に於いて經驗する事柄は凡べて吾人の見様を離れたるものに非ず、即ち吾人の經驗は吾人の見様に現れたるの様、換言すれば現象(Erscheinung, Phenomena)の外に出ですと云ふべし。此の故に又カントに取りては主観的なる現象的なるとは相離れざるものとされり。斯くしてカントは吾人の知識を論じて其の遍通性

び必然性を救ひ得たると同時に其の確實に言ひ定め得べき範圍は唯だ現象に限らるゝこととされり、而して吾人の經驗上の事物是れ即ち現象なるがゆゑに吾人の知識に於いて遍通なる所のものは現象即ち經驗の形式以外に出づること能はずといふこととされり

〔一三〕 斯くしてカントは時間及び空間を主観的即ち心性的のものと見たるが、其處に主観的と謂ふは感覺を主観的なりといふとは明かに其の意義を區別せざるべからず。感覺を主観的なりといふとはカントがデカルト及びロックと共に疑はざる所なり。然れども其を主観的なりといふ理由を何ぞやと尋ねるに、其が個人的なるがゆゑなりと云ふこと換言すれば非遍通的なりといふとに在り是れ實にプロタゴラス及びティモクリトスが感覺を主観的の者と見たる理由なり。然るに時空は其れとは全く反對なる理由を以て主観的とせらる、即ち時空に於いて事物を見るときいふことは吾人人類の心性に於いて個人的の差別を容れざるものなり、例へば一物を見るの色或は其の聞く音聲は人によりて異なることならんも、其の空間に於いて見時間に於いて聽くといふことに於いては少しも異ならず。

故に感覺を主觀的なりといふ意味に對して云へば時空は寧ろ客觀的なるものと云はざるべからず。此のゆゑにカントに取りては遍通的及び必然的といふことは先天的といふこと、離れず、先天的といふことは心性的といふこと、離れず而して心性的といふこと、客觀的といふことは亦相離れず故に斯かる意味にて心性的を主觀的と云へば其の意味にて謂ふ主觀的はまた客觀的といふべきものなり。感覺は此の意味にて客觀的なりと云はるゝこと能はず。以上論じ來たる所によりて吾人は次ぎの如き結論に達す曰はく、時空は經驗上實在を有するもの(Empirische Realität)なり、蓋し經驗上の凡べての事物に遍通するものなるをいふされど經驗以外に於いて實在を有するものに非ず、即ち知識の成り立ちより云へば心上のもの(transcendentale Idealität)を有するものに外ならず。

純悟性の概念即ちカテゴリー

〔一三〕 吾人が經驗上の事物は唯其れが時間及び空間に於いて前後し又共在すといふのみならず、尙ほ其れ以上の關係によりて初めて成り立つものなり。而して吾人が自然界と名づくるものは唯だ幾多の感覺が空間に共在し及び時間に

前後するのみならずして若干の法則に従へる事物を以て成り立つものなり。感覺が時間及び空間に於いて前後し共在するのみにては未だ所謂事物なるものを成さず、自然科学が此等自然界の事物に就いて存する所は唯だ數學上の關係のみに非ずして又能く其等事物の相互の關係に於ける幾多の通則に及ばざるべからず。例へば因果の規律と云ふものゝ如き、自然科学は之れを捨て、成り立つべきものにあらざ、而して此等因果の規律等は唯だ空間及び時間上の關係として言ひ現す所の數學上の原理と同一なるものに非ず。是に於いてカントは進みて自然科学上なる吾人の知識を成り立たしむる幾多の原理が先天的に立し得らるゝか否かを問へり。是れ即ち彼れが『純理性批判』に於ける第二の問題なり

上に言へる經驗上の事物は時空に於ける關係以外の關係によりて結合せられて初めて成り立つものなりといふ意をカント言ひ表して曰はく、吾人の感覺を時空の形式に入れて成り立たしめたる直觀を更に統一的作用を有する概念によりて仕立て上げ茲に初めて經驗上の事物を成す經驗上の事物に於ける統一性は此の概念より來たるものなりと。斯くして彼れは感性の與ふる所を雜多なるものと

見之れに對して此等の雜多なるものに統一を與ふる概念を吾人に供するものをもつて悟性(Verstand)と云へり。

「二四」上に述べたるが如く悟性の吾人に供する概念を以て事物に統一を與ふる是れ即ち其を考ふるといふとなり、故に其等の概念は時空が直觀の形式なるが如くに吾人の思考(Denken)の形式なり、此等形式によりて思考するに及びて初めて感覺上の雜多なるものが客觀的事物となるなり、而して此等思考の形式即ち悟性の概念は吾人が事物を考ふる上に於いて必須なるものなると恰も時空の形式が直觀上に必須なるが如し、而して其等の必須なること、是れ取りも直さず其等の先天的なることを示すものなり。若し其等が吾人の悟性の先天的形式ならずは吾人は自然界の事物に關して遍通必然なる知識を有すること能はざるべし、換言すれば自然科学は嚴密なる意味に於いて成り立つこと能はざること恰も時空の形式あらずば數學の成り立つべからざるが如くなるべし。故に一言に云へば經驗上の事物に統一を與へて之れを眞に客觀的事物として成り立たしめ、又自然界をして整然たる客觀的規律によりて支配さるゝものたらしむるは究竟するに是れ

吾人の心性作用即ち吾人の心性其の物に具はる先天的形式の爲す所に外ならず。時間及び空間が吾人の直觀の仕方なるが如く、其等自然界に法則を與へて自然科学を成り立たしむる所以の形式即ち悟性の供する概念は吾人の思考の仕方なり。「二五」然らば吾人の悟性は如何なる概念を以て働くものなるか。カント以爲へらく此等の概念は吾人の思考力によりて爲さるゝ統一の仕方以外ならず、而して思考によりて爲さるゝ統一是れ即ち論理學に謂はゆる判定作用に於いて現るゝものなり、吾人の事物を考ふといふは換言すればそれに就いて判定を下すと云ふことなりと。斯く見てカントは悟性の概念は論理學上吾人の認むる種々なる判定の形式より得來たるべきものと考へたり。尙ほ以爲へらく一切感官上の事物を除いて直觀の純形式を得たるが如く、判定に於いて存する一切の事柄を引き去りて判定の純なる形式を認むること、に於いて純悟性の概念を發見し得べしと。斯くしてカントは形式的論理學に謂ふ判定に新意義を與へて茲に其れとは全く異なる目的を有する彼れが知識論上の論理學を打ち建てたり。形式的論理に於いては判定に現るゝ關係も畢竟するに已に與へられたる概念を取りて其を分

析し又其が關係を認むるに於いても單に矛盾律に従ひて一概念を以て指示する所と他の名稱を以て呼ぶ概念の指示する所との異同を認むるに外ならず。カントが茲に謂ふ論理上の關係は其れとは異にして事物を成り立たしむる所以の統一的作用を謂へるなり、換言すれば吾人の感官的知覺より思考の對境たる經驗上の事物を造り出だす悟性の創造的作用を謂へるなり。則ちカントが此論に於いて知識論上の論理學が新生面を開けりと云ふべきなり。

〔二六〕かくの如くカントは判定に於いて現るゝ吾人の統一的思考力を看るに之れを新しき知識論上の論理的立脚地よりしたるが、而も所謂判定の種々なる形を列擧して其處に悟性の種々なる概念を發見せんとする時には當時一般に行はれたる通常の論理學上の所見によりき。彼れは其の所見によりて判定を量、質、關係及び様狀の四種の見方によりて別かち而して其の各に於いて更に三種を別かてり。次表の如し

(形式的論理に於ける)

判定

(知識論に於ける)

範疇

單稱	一昧
特稱	多性
全稱	全昧
肯定	實有
否定	非有
不定	界限
定言的	昧性
假言的	因果
選言的	相關
或然的	可能、不可能
單然的	存在、不在
必然的	必至、偶然

斯くしてカントは十二種の判定を掲げて其の各に一の統一的概念が働き居ると見都合十二種の概念を擧げ之れを名づけて十二の範疇(Kategorie)と云へり。右の中

質及び量に於ける六種の判定には其の各に於いて知識論上の概念が單に一なるものとして働き居れりカントは之れを數學的と名づく、關係及び様狀に於ける他の六種には概念が相對したるものとして働き居れり例へば躰と性と相對し可能と不可能と相對するが如し之れを力學的と名づく。右四部類の各に於いて第三の概念は第一及び第二の兩概念の結合によりて成れるものと見て可なり例へば多なるものを一躰として見れば全體を成し、實有と非有とを相結べば界限を成すが如し。

〔二七〕 以上列擧したる概念を用ゐて思考するに及びて初めて經驗上の事物を成す。例へば此の花は紅なりといふ時に於いて此の花と云ひ其を一つの花として見る所に已に一躰といふ概念働き、又此の花といふ一物が紅なりといふ所に已に躰性といふ概念が働き、又紅なりと肯定する所に實有といふ概念が働き居り、又火熱が暖を融かすといふ時には因果といふ概念が働き居るが如し。斯く上にいふカテゴリーを用ひて官感的直觀上の多なる事柄に統一を與へて茲に初めて經驗上の事物を成すなり。故に此等の統一作用は經驗によりて初めて出來上がる

ものに非ずして寧ろ經驗を成り立たしむる先天的條件といふべきものなり。されば經驗上の事物の在る所此等の概念の應用せられざることなし、何となれば凡べて經驗上の事物は此等の概念によりて初めて造り上らるゝものなればなり、猶ほ吾人の感官上の直觀に於いて時空の形式に支配せられざるものなきが如し。故に此等の範疇は客觀的に通通なる効力を有するものなり。

斯くの如く吾人の經驗を成り立たしむるに必要な統一作用を分析して考ふれば其中に三個の要素を發見すると得即ち多と一と及び多を一に統ぶる作用と是れなり。次に又此の統一作用は三段階を経て進むものなりといふことを得即ち第一直觀に於ける知覺の綜合、第二想像に於ける再現の綜合、及び第三概念に於ける認識の綜合是れなり。蓋し統一的作用によりて事物の成り立つ順序を見るに、先づ吾人の直觀するや其處に已に多なる事柄の綜合されたるものあり、次に又吾人の全き知識を成さんには曾て見たる事物を想像に浮かべて其を再現することゝ要す而して此の再現に於いて又綜合作用あり、次に尙ほ直覺上知覺したるものと想像の上に再現したるものとの外に是れは彼れなり例へば今見る是

れは即ち花といふものなり」といふ認識加はりて茲に初めて知識を完成せるなり。」
 右いふ統一作用によりて茲に初めて經驗上の判定を成す。カントは此の彼れが
 謂はゆる經驗上の判定(Erfahrungsurtheil)と知覺上の判定(Wahrnehmungsurtheil)と名づ
 くるものとを區別せり。以爲へらく統一作用が唯だ感官上の知覺に止まり居る
 判定は單に時空に於ける共在及び前後をいふに外ならず、而して其れが空間に共
 在し時間に前後すといふ事は遍通的のものとして先天的に断定し得れども其の
 前後し共在する事柄の間に必然の關係ありといふことは断じ得べからず、之れを
 例すれば知覺上の判定に止まり居る間は日が照りたり次ぎに蠟が融けたりとい
 ふ前後したる事實を言ひ表はし得るに過ぎずして日の照ることが(因となりて)蠟
 を融かすといふ果を生じたりといふ判定には進むこと能はず、即ち眞に因果の關
 係を其の間に言ひ現すことを得ず、畢竟するに其の種々なる感覺の時空に共在し
 又前後するは唯其の時其の處に於いて是かあり、又或個人に對して是かありきと
 いふに止まり遍通的又客觀的なる關係を成すものとしては認識すること能はず、
 一言に云へば個人の觀念の相聯絡する心理上の關係を云ふに止まる。之れを要

するに感官的知覺上の關係に止まり居る間はヒュームの立脚地以外に一歩も出づ
 ること能はざるなり、而して若し其の立脚地以外に出で、眞に客觀的効力を有す
 る吾人の知識を成り立たしめ、時空に於ける感覺の共在及び聯絡をして更に客觀
 的規律に従へる事物たらしめんにはヒュームが謂はゆる聯想律の如き心理的法則
 とは全く其の性質を異にしたる知識論上の立脚地より見て知識を成り立たしむ
 る先天的條件とせらるべき統一作用即ち悟性の與ふる概念の効力を謂はざるべ
 からず。此等悟性の概念を用うることに於いて初めて經驗上の判定を成すべし。
 されば空間に於ける關係は唯だ悟性の與ふる統一的規律によりて眞に客觀的又
 遍通的なる効力を有するものとなり得べきものなれども、個人の經驗的意識は此
 の統一的作用をば寧ろ既に成れるものとして發見す、換言すれば悟性の根本的統
 一作用其の物を意識せずして寧ろ其の作用の結果を認む。故に茲に云ふ吾人の
 智識作用の根柢に横はれる統一作用は個人的意識の範圍内に於いて行はるゝも
 のと云はんよりも寧ろ其の意識の遍通的根柢に於いて已に横はれるものと見る
 べきなり、換言すれば個人の經驗する意識以上に(又は其の根柢に於いて)更に共同

的なる意識ありて、而して其の意識が個人の經驗的意識の範圍に既成の結果として現れ來たるものと見ざるべからず。是れ即ちカントが其の著「プロレゴメナ」に於いて共同的意識(Bewusstsein überhaupt)と名づけ又「純理性批判」に於いては知識の先天的條件を成す統一作用(Transcendentale Apperception)或は「我」と名づけたる所のものなり。蓋し此の「我」といひ共同的意識といふは知識論上より見て吾人の意識を成り立たしむべき通通なる先天的條件といふべきものなり、尙ほ詳しく云へば個人の經驗的意識に於ける統一作用(即ち知識論上其が先天的條件と見るべき統一作用)の根柢を成すべきものを謂へるなり。然れば此處に於ても經驗的心理學上に言ふ所とカントが知識論上先天的條件として謂ふ所と區別せざるべからず。

〔二八〕悟性の概念を感官的直観に用ゐて而して始めて經驗上の事物の成り立つとせばこゝに説明を要するは如何にして彼れが此れに用ゐらるゝかと云ふこととなり。概念と直観とは全く其の趣を異にして恰もカントの説く所に従へば(見知らぬ他人の如く其の間に何等の關係あり又何等の共通的基本あるかを認め難きものなるに奈何にして能く前者が後者に宛てはめらるゝぞ。カントは此の間に

答へて各範疇と直観との媒介を爲す圖式(Schema)あり而して之れによりて能く前者が後者に宛てはめ用ゐらるゝと云ふ。是れ即ち彼れの謂はゆる範疇圖式の論にして純理性批判論の中其の最も苦心せる所又最も難解の所たるなり。彼れ説いて曰はく、感性と悟性との中間に位するものとも見らるべき想像力(Einbildungskraft)が謂ふところ概念を直覺に媒する圖式を與ふ、而して此の圖式は時間的直覺の上よりして得らるゝものなりと。蓋し直観の形式の中にてカントが内官の形式と名づけたる時間は是れ一切の經驗の直観的形式たるものにして何等の事物と雖も時間に於いて經驗せられざるは無く隨うて概念を用うる時に於いても最も此れに親密なるべきは此の時間の形式なるべければなり。一言に云へば時間上の或關係に従うて(或はそれを便りとして、記號として)悟性の概念が感官的直観に應用せらるゝなり。

一、群、多性及び全群の三範疇を用うる時の圖式は數(即ち同様なる部分を時間において相重ねたるもの)なり。實有の範疇を用うる時の圖式は充たされたる時間(即ち時間に於ける有)なり、非有の圖式は虚なる時間なり、制限の圖式は充たされたる

事に限りの有る時間なり。絆性の圖式は時間に於ける常住、因果の圖式は時間に於ける規則立ちたる前後、相關の圖式は時間に於ける物の共在なり。可能存在及び必至の圖式は何等かの時に於いて在り得べきこと、或一の定まりたる時に於いて在ること及び凡べての時に於いて在ること、是れなり。此くの如く時間に於ける或關係即ち圖式が媒介となりて各範疇を直観上の現象に用ゐ得るなり。

〔一九〕上に述べたる圖式に従ひ範疇を用ゐること、因りて吾人は自然界に於ける法則を立することを得、而して此等の法則は吾人の先天的に立し得る所のものなり、蓋し自然界其の物は吾人が之れに對して此等の法則を與ふることによりて初めて成り立つものなればなり。此のゆゑに吾人は自然界に關して先天的に立し得る知識を有することを得。而してかくの如く吾人の先天的に立し得る所のものは是れ即ち「純自然科學」(「Reine Naturwissenschaft」)の基礎となるものにして、カントが「自然界の純理哲學」(「Metaphysik der Natur」)と名づけたるものは是れなり。

純自然科學の基礎を成す所の原理は量質關係及び様狀の四方面より見たる範疇に於いてそれ／＼に認めらる。第一、量の原理は凡べて吾人が自然界に於いて經

験するものは皆廣がり、に於ける量即ち大さを有すといふことにしてカントは之れを直観の公理(Axiom der Anschauung)と名づけたり、言ふところは吾人の直観に於ける凡べての物は皆大さを有すといふに在り。第二、質の原理は凡べて吾人の知覺する所のものは強さに於ける或程度を有すといふことにして、カントは之れを名づけて知覺の豫期(Antizipation der Wahrnehmung)と云へり。第三、關係の原理を名づけてカントは經驗の類推(Analogie der Erfahrung)と云へり。蓋し常住、前後、及び共在の三つに對して三個の類推あり、一に曰はく、凡べて現象の變化する中に在りて物の絆は常住にして其の全體の量は増減することなし、二に曰はく、凡べての出來事は規則立ちて前後するもの、換言すれば因果律に従ふものなり、三に曰はく、凡べての物絆は其が共在する點に於いては皆相關的關係を有するものなり。第四、様狀の原理を名づけてカントは經驗的思考其の物の要求(Postulate des empirischen Denkens überhaupt)と云へり、之れは三つの原理あり、一に、經驗の形式的條件即ち直観及び概念の形式に従ふものは可能なるものなり、二に、經驗の素材的條件即ち感覺に合するものは存在するものなり、三に、經驗の全體に通ずる條件に従うて存在に

合したるものは必至なるものなり。以上掲げたる原理の中第一及び第二の原理は吾人の経験する一切の事物は皆な
 大さ及び強さに於ける分量に属するものなりといふことを言表したるもの、第四
 の原理は可能存在及び必至といふことの意義を言表したるもの、而して第三の原
 理は自然界に關する吾人の知識に於いて最も肝要なるものにして此の所是れ即
 ちカントが依りて以てホームの疑ひ(即ち其が實體及び因果といふ觀念の批評に
 於いて言ひあらはせる所)を解かんとしたる所のものなり。カントに従へば凡そ
 或事柄の同時に在り或は前後して在るといふは一の常住なる跡に於いて初めて
 出來得ることなり、變化は其の常住なる跡に於けるの狀態なり、此常住なる跡を置
 かずしては變化する狀態を考ふべからず、即ち是れは吾人の思想の成り立ちの然
 らしむる所たるなり。而して前後して生ずる事柄に對して彼れが是れを生じた
 りと見る(即ち因果の關係を成せるものと見る)も、又相共在する物跡を無關係のも
 のとせず相關聯して一なる自然界を成すと見るも是れ亦吾人の思想の成り立ち
 の然らしむる所なり。カント又以爲へらく自然界の一切の事物は分量を有し居

るものなり、故に之に關する科學的知識は數學的のものならざるべからず。され
 ば數學的に考定し得る限り吾人は科學的知識を有し得るなり、故に數學を用ひ得
 ざる心理學及び化學は嚴密に謂ふ自然科学の範圍内に在らず、此等は唯だ敘述的
 のものなり。而して自然界に起こる一切の事件を數學的に考ふるや之れを空間
 及び時間の直觀に於いてせざるべからず、即ち運動(即ち數なる觀念を時空に結び
 たるもの)といふ觀念を用ひざるべからず、物理學上は一切の現象を分析して之れ
 を物跡の運動に歸し得べし。之れを要するに運動の法則範疇及び數理に基きて
 吾人の先天的に(即ち運通的に)又必然的に立し得る所のものは是れ即ち自然科学の
 總理哲學的基本を成す所のものなりと。カントは又物質の成り立ち其の物を牽
 引力及び反撥力の相互の釣合の結果として説明せんと試みたり。
 (二〇) 此くの如くカントは自然界を成り立たしむる所以の法則即ち形式は吾
 人の思考力即ち悟性其の物の働き方なりと見て自然科学に於ける綜合的判定の
 先天的に立せらるゝ所以を説明せんとせり。以爲へらく若し綜合的判定に於い
 て綜合せらるゝ事柄が唯だ後天的に與へらるゝならば吾人は何ゆゑに其の必然

的に又通通的に然るかを了解し得べからず、然れども其の綜合は吾人の思考力其の物の與ふる所なるを以て吾人の思考力を以て接する所必ず其の綜合の行はれざることをなし、吾人の自然界に於いて觀る法則は吾人の心性其の物の與ふる所なるがゆゑに其の法則は通通的又必然的なるを得るなり。

以上述べたるカントの知識論に於いて吾人が知識の成り立ちに關する新見地の開かれたるを觀るへし。希臘哲學者の見地及び其の見地に從へる以後の一切の說に於いては凡べて吾人の知識の對境は外より與へられ吾人の知識は其を寫映するに外ならざるものゝ如くに考へたりしがカントに至りては一轉して知識の對境其の物が吾人の知識力なる心作用の所造に外ならずと見るに至れり。以爲へらく事物を知識すといふは己に成り上がれるものを恰も鏡面に映すが如くに我が心面に寫すの謂ひにあらざして其の物を成り上がらしむることが是れ既に知識其の物の作用なり。吾人が自然界を知るといふは我が悟性の作用によりて知識の對境を造り上ぐるなり。故に自然界の法則は他より吾人の心に與へらるるものに非ずして、吾人が自然界に與ふるものなり、立法者は外物にあらざして我

れなり。かくの如く自然界は吾人が之れに因果律等の法則を與へて初めて成り上がるものなるがゆゑに其の界の全範圍を通じて因果律等の法則の行はれずといふことをなしと。斯く考へてカントはヒュームが嚮に因果律は是れ唯だ吾人の主觀的習慣に基けるものにして自然界に客觀的に通通なるものとは斷す可からずと云へるの疑を破するを得と思へり。即ちヒュームに從へば因果律は主觀的なるが故に通通的ならずと云ひ、カントに從へば其れが吾人の心性そのものゝ働きにして、其の意味にて主觀的のものなればこそ又能く客觀的に通通なる効力を有するものとして認めらるゝなれと云ふ。此の點に於いてカントは往時コペルニクスが天文學上に爲したると同様なる(但し云はば其を倒にしたるが如き)革命を哲學界に行ひたるものなりと自告せり、蓋し世人が地球を中心として天は廻轉すると思へるを破り地球は太陽を中心として廻轉すを見てコペルニクスが初めてよく天文上の問題を解くの道を示したるが如く、カントは在來の哲學者が自然界を立法者として吾人は唯だ之れに從ひて其の法則を授かるが如きものなりと見たる關係を倒にし立法者は吾人にして自然界は吾人の心性を中心として廻轉するも

のなりと見ることによりて初めて能く知識論上の問題を解き得べしと考へたればなり。

〔二一〕かくの如く吾人は自然界に關して遍通的知識を立し得るものにして因果律等の自然の法則は先天的に必然遍通の効力あるものとして認め得らる、されど其の効力ある範圍は現象界に限る換言すれば吾人の經驗の範圍内に於いてのみ然りと云ふことを得るなり。蓋し其等の法則は吾人の經驗其の物の先天的條件なるがゆゑに吾人の經驗し得べきものは必ず皆其らの法則に従ふべきものと斷し得る代りに之れと同一の理由を以て吾人の經驗し得ざる範圍にまでも其等の法則の効力は達すべきものに非ずと云はざるべからず、一言に云へば悟性の概念を基礎として自然界の純理哲學は立てらるれども其の純理哲學は吾人の知識の成り立ちより見て唯經驗の範圍内に於いてのみ云ふべきもの即ち含著的(emanent)のものにして超越的(transcendent)のものに非ず。但し吾人の概念によりて經驗以外の事物を考ふることの出來ざるにあらず、然れども其の思考は畢竟するに架空なるものにして知識を成すものとは云ふべからず何となれば知識の對

境は範疇の圖式によりて換言すれば直觀より來たれるものに用ひて初めて成り立つものにして其れら經驗の範圍外に出でたる思考は終に知識の對境を作ると能はさればなり。故に其れらの範疇を其が圖式によりて直觀の範圍内に用うれば換言すれば經驗の範圍内に含著的に用うれば其處に知識を成すといふことを得、然れども其の範圍を超えて用うれば其は唯だ空なる思考たるに止まりて其處に確實なる知識は形つくられざる也。但し若し吾人の悟性即ち思考力が知識の對境其の物を與ふることを得ば換言すれば吾人の考ふる(即ち思考の形式を用う)こと其の事に於いて又能く思考の對境を造り出だすことを得るものならば、其處に吾人の今現には有せざる一種の知識を形つくることを得るならん、カントは其の如き能力を名つけて理智的直觀(intellektuelle Anschauung)と云へり即ち理智的直觀は吾人の感性的直觀の用と悟性の用とを兼ね有するが如きものなり、思考の形式を與ふると共に知識の對境を造り出だす所のものなり、而して其の如き知識の對境を名つけて物自體(Ding an sich)換言すれば眞實體といふことを得。然るに吾人の心性には其の如き物自體を吾人の知識に與ふる理智的直觀といふべきもの

なし。吾人は直観を有すれども其は感性的のもの、吾人は悟性を有すれども其は感性的直観より其の對境を與へられて始めて知識の對境を成すものなり。此のゆゑに吾人の知識は物自體(Ding an sich)又は眞實體(Noumenon)といふべきものを吾人に與へ得ざるものなり。但し吾人は眞實體を解して積極的及び消極的の二義に見ることを得積極的とは感性的ならざる直観即ち理智的直観又は直観的理智と名つくべきもの、消極的とは感性的ならざるものをいふ、而して是れは全く或然的のものにして吾人は其の如きもの、有無を斷言すること能はず、唯た若し其の如き直観を有し居る者あらば其の者の知識に對してのみかゝる意義にての眞實體ありと云ひ得るのみ、されど吾人には其の如き理智なし、故に吾人の知識は其の如き眞實體を掲ぐることを得ず。消極的主義とは吾人の感性的直観の對境とならざるもの、いふ、此の消極的主義に於いても亦吾人はそれに關する知識を得ること能はず、されど吾人は吾が經驗を限るものとして其の如き意味にての物自體を考へざるべからず、何となれば若し其の如きものを置かずば吾人の經驗に現れたるもの、み實なるものにして其の他には何物も存在せずといふ斷定に陥らざるべからず而

して是れは吾人の知識の成り立ちの上より觀て吾人の斷定し得可きこととあらざれば也。故に吾人は吾人の知識の達し得る範圍を現象と名つけ而して其れに對して物自體の界即ち眞實體界を置かざるべからず、換言すれば物自體は界限的概念(Grenzbegriff)として吾人の用ゐざるを得ざる所のものなりと。斯く考へてカントは現象及び物自體の二界を分かち吾人の知識は唯だ前者に對してのみ効力あるものとせり。プラトーン以後哲學界に於ける現象界と眞實體界との區別がカント知識論に於いて如何に新面目を着けたるかを見よ。

理性の觀念

〔三二〕 上に論じたる所によりて明かなるが如く悟性の概念が感性的直観によりて與へらるゝ事物を超えて用ゐらるゝ時には其の思考は全く空なるものとなる、一言に云へば吾人の知識は經驗の範圍以外に到達せざるなり然らば經驗の範圍を超えたる所に吾人の確實なる知識を到達せしむるものといふ意味にての形而上學の成り立ち得べからざることは以上カントが知識の成り立ちを論じたる結論としても當に豫想せらるべきとなり。カントは其が知識論に於ける第三の

問題に入りて形而上學に於ける綜合的判定の先天的に立てらるゝことを否みずルフ學派等に謂ふ所の形而上學の論が確實なる根據を有せざることを詳しく論ぜんと試みたり。されど又彼れの形而上學の問題に吾人の心を運ばすことを以て吾人が知識的要求のちのづから然らしむる所なりとせり。たゞ彼れの意見は其の事の知識的要求上の自然なるに拘らず之れを以て吾人の確實なる知識を成せるものとは考ふ可からずと云ふにあり。之れを要するに彼れの意は先きにヒュームが心理的研究の上よりして因果律を初めとし其の他純理哲學上の觀念は吾人の心理作用の自然の結果として形づくらるゝものなれども其等は知識上確實なるものといふことを得ず、即ち心理的作用の自然の結果なると共に知識上充分なる理由を備へたるものに非ずと論じたるに似たり、但しカントはヒュームが専ら心理學上の立場より考へたるとは異なりて彼れが掲げたる特殊の知識論上の見地よりせるなり。カントの意見が如何に多くの點に於いてヒュームの所説と相接近して而もまたちのづから其の面目を異にせるを看よ。

(三三) 形而上學上の論に吾人の心を運ばすことが何故に知識的要求上自然の事なるか。以爲へらく前章に論じたる悟性の概念は統一的な作用を有するもの、されど其のなす統一は局部的のものなり、換言すれば一現象と他現象とを關係せしむる上に於いて其の統一的な作用を爲すのみにて其の外に出でず。例へば吾人が全軀又は一軀といふ概念を用うるも其は畢竟唯或局部に限りたる處に全軀又は一軀の統一を與へ得るのみ例へば此の花を一つの花として或は花の全軀を指してまかゝなりと云ふ如きも要するに唯だ一事物一現象に於けるの統一に外ならず。吾人の實驗する所は全軀といふも一軀といふも又因果といふも畢竟個々なる現象に於いての事にして、有りともあらゆるもの、絕對的統一は吾人の經驗内に存せざるなり。因果の規律といふも此の一現象が他の一現象の原因又は結果たるの關係を有することをいふものにして一切事物の絕對的原因といふが如きものは吾人の經驗の範圍内に在らず。かくの如く吾人の悟性の概念を正當に應用し居る間は常に相待的(being)の範圍内に在るものなり、是れ恰も論理上吾人の推理作用が理由と斷案との關係に従ひ一歩々々に進み行きて其が絕對の始及び絕對の終を定むること能はざるが如し。

されど一旦吾人の概念を用ゐて事物の統一を爲し而して其處に初めて知識と名づくるものを形づくりてからはそのづから益々其の統一を擴張し行かんとすべし、而して其を擴張しゆくことの究極は終に絶対的統一を全うせんと試みるに至るべし、而も其の如く絶対的統一を全うせんとするに至れば必ず吾人が経験の範圍を超えざるべからず、何となれば絶対的といふことは吾人の経験の範圍内に存せざればなり、カントは此くの如く絶対的統一を與へんと力むるものを名づけて吾人の理性(Vernunft)と云ひ、而して其の統一を與ふるが爲めに用うる概念を名づけて理性の概念と云へり。通常謂ふ所形而上學は此の理性の概念を用うることによりて形づくらしものにして而して謂ふ所理性の概念は悟性の概念以外別に存するものには非ず、寧ろ唯其の概念を絶対的に用ゐたるものに外ならず。一言に云へば悟性の概念を相待的統一を與ふるものとしてのみ用うる間は吾人の経験の範圍内に在りて正當の意味にての知識の對境を超ゆると無けれど、其を超えて絶対的統一を與ふるものとして其の概念を用ゐたるものは是れ即ち理性の概念なり。

(二四) カントはザルツ學派の意見に従うて理性を形而上學の上に用ゐたるものに三方面を別かてり。而して此の三者の各に於て用ゐらるゝ理性の概念あり。其の一は靈魂といふ概念にして是れ純理哲學的心理學(Rationale Psychologie)の根本概念となる所のもの即ち吾人の内なる(精神的)経験の全軀に絶対的統一を與へんとする所のものなり。其の二は宇宙を全き一軀と見たる概念にして純理哲學的世界論(Rationale Cosmologie)の根本概念となるものは是れ吾人の外なる経験即ち吾人の心に對する世界の全軀に絶対的統一を與へんとする所のものなり。其の三は森羅萬象の絶対的原因としての神といふ概念にして純理哲學的神學(Rationale Theologie)の根本概念となるもの即ち吾人の内なる及び外なる経験の全軀に究極的統一を與へんとする所のものなり。カントは此等三個の理性の概念の應用が皆正當なるものにあらざることを次の如く論述せり。

第一、純理哲學的心理學に謂ふ靈魂てふ概念の吾人の心的現象を考ふるに便利なるは吾人の精神的作用の悉くが凡べて恒有なる靈魂てふ實軀に統一せられ居ると見るがゆゑなり。然れども斯く吾人の實驗する心作用の外に其を統一する一

實体を置いて考ふるは論理上の誤謬に基けり、何となれば吾人が「我」と名づくる一切の心作用の淵源となる一實體即ち靈魂の存在するが如く思ふは詮すれば吾人の意識に統一作用あるが故に外ならねばなり。我といふ意識は畢竟吾人の心に經驗する一切の事柄を統一するの意識なり、我れ思ふといふことは斯く統一して意識すといふことに外ならず。このゆゑに「我」と名づくるものを以て論理上の主者(Subject)とすることを得れどもそれより直に實體としての主者ありといふことを得ず。一言に云へば靈魂なる實體を置くは吾人が思考作用の論理的な主者と實體としての主者とを混同したる論理上の過誤に外ならず、カントは之れを名づけて純理哲學的心理學の論議(Paralogisms)と云へり。蓋しカントが自然科学を論じたる所に於いても實體といふ概念は時間における吾人の感官的經驗の常住を意味するものに外ならぬがゆゑに、其の如き範圍を超えて吾人の精神的現象の裡に又は其の根底に吾人の經驗の範圍に入り來たらざる靈魂といふ實體ありといふことは固より證せらるべき限りのものにあらざる。

〔三五〕 次きにカントは純理哲學的世界論の成り立たざる所以を論じて吾人の理性が斯かる範圍に用ゐらるゝ時には自家撞着に陥ることを示さんとせり。以爲へらく吾人の知識が純理哲學上には正當に形づくられざることば世界論に於ける理性の觀念其の物の示す所の相反するを見ても知るべしと。彼れは之れを名づけて純理哲學的世界論に於ける矛盾(Antinomie)と云へり。カントは之れに就きて四ヶ條の矛盾を擧げて曰はく、第一純理哲學上の世界論に於いては世界は時間に於いて其の始めを有し又空間に於いて其の際限を有すといふことが立てらるゝと共に其の反對が均しき根據を以て立てらる。第二一切の物は單元より成れりといふことが立てらるゝと共に其の反對即ち世に單元といふべきものなく凡べての物は皆合成のものにして無窮に分割せらるべしといふことも亦同じく立てらる。第三自然法に従へる因果の關係以外に全く自由に動く原因ありといふことが立てらるゝと共に之れに反して世には自由原因といふべきものなく凡べて事は皆自然界に於ける機械的關係によりて必然に生ずるものなりといふことも亦能く立てらる。第四世界には必然に存在すと考へざるべからざる絕對者ありと立てらるゝと共に之れに反して世界の内に於いても又其の外に於いて

も絶対に必然なる存在者といふ如きものなく世に存するは凡べて相待的のもの
 凡べて條件付きのものなりといふことも亦能く立せらる。以上純理哲學的世
 界論に於ける四ヶ條の相反する立言の中カントは其の前なる二つを名つけて數
 學的のものと云ひ後なる二つを力學的のものと云へり。彼れ以爲へらく若し純
 理哲學的世界論に於いてするが如く宇宙を客觀的に全き一躰を成せるものと見
 ば上に云へる如き矛盾を解釋すること能はず斯く吾人の理性を用ゐて考ふるこ
 とによりて起る立(Thesis)と反立(Antithesis)とは共に均しき根據を有し居るもの
 とせられざるべからずと。斯くてカントは此の困難を解釋するの道は唯だ彼れ
 が知識論上の新見地よりして初めて得らるべしと考へたり。

彼れ以爲へらく初めの二ヶ條の矛盾に於いては立も反立も共に誤れり何となれ
 ば二者共に宇宙の全躰を完了せる一躰と見ることより出立せるに實際吾人の經
 験には其の如き完了せる一躰といふ如きものなく完了せる全躰は唯だ理想とし
 て吾人の思ひ設くる所に外ならざればなり。實際世界は唯幾多現象が相關係し
 其の關係を追うて一より他へ移り行くものとして存在するなれば其の一より他

へ移り行きて其の全躰を經過し悉すと能はず其の如く全躰を經過し悉したる完
 了せる一躰としては世界は吾人の知識の範圍内に存在せざるなり。故に世界は
 完滿なりといふ意味にて無限なるものにあらず又其が際限に到達し得べきもの
 もあらず。時間及び空間は吾人が事物を觀る見方にして其を性質として具へた
 る世界といふ一全躰が客觀的に存在するには非ず若し其の如く客觀的に存在す
 る世界てふ一全躰のみつから具ふる性質として時間及び空間を實在するものと
 見ば其の時こそ實在する時間及び空間は際限あるものか又は然らざるかと問ふ
 とを得べし然るに時間及び空間は我が心の見様にして吾人が自ら時空を限りて
 見れば其處に限りあり又其の限れる一部分の時間及び空間の外に他の部分なる
 時間及び空間を連接せしめて見れば其の連接の最後に達することなしにふ意味
 にて無際限なるものとなる。凡べての物が分かつべからざる單元より成れるか
 將た限りなく分かつるものなるかといふことに就きても又同様の説明を爲す
 ことを得。蓋し空間に於いて分かつるか否かは吾人の見様なり吾人が分割を
 止むれば其處に一物を成し若し分割を進むれば其を合成物として更に分割する

ことを得。空間は吾人の見様なるがゆゑに究竟する所吾人自らが分割し或は分割せざるまでのことにて別に無窮に分かたれざる又は分かたるものゝ客觀的に存在するにはあらず。

次に後の二つの矛盾に於いては立も反立も若し其の指す所の範圍を異にすれば共によく眞なるものとせらるゝを得換言すれば其の意義を解き分かつとによりて其の矛盾は消滅するものと考へらる。自然界即ち現象界に於いては自由原因といふべきものなく凡べて機械的關係に従うて必然的に生起變移すと見るべきなれども現象界を超えたる眞實界に於いては自由意志といふが如きものありども考へらる別語にて云へば自然科学上の見方よりすれば自由は無きものとせられ道德を言ふ上に於いては自由は在るものとせらるゝを得更に換言すれば吾人の知識の對境に於いては凡べての事物は機械的必然の關係より成り、道德の要求としては自由を置きて言ふことを得。斯くの如く吾人の知識を現象界に限り而して之れと眞實界を相分かつ所よりして上に云へる如き理性の矛盾も却て能く之れを説明し得べき道の開かるゝ望あるなり。然らば如何にして吾人の

自然界を知る知識以外に道德の要求を説き且つ其の要求として眞實界に關する立言を爲すことを得るかといふことは是れ即ちカントが後に著したる『實踐的理性批判』の問題となる所のものなり。而してかく自由と必然との反對を融解せしめ得るが如く又能く宇宙に於いて絶対に必然なる存在者の在りと云ひ無しといふ矛盾をも去ることを得。但しカントは吾人が知識の範圍内に於いては其の如き絶對者の存在を立證すること能はずと見たり。是れ彼れが次に純理哲學的神學を批評せる旨意に於いて詳なり。

〔二六〕カントは從來神學者の用ゐ來たれる神の存在の證據論を以て一切其の目的を達せざるものと見たり其の證據論の一なる實證學的論證は畢竟するに吾人概念より直に實在を證せんとするものにして、此の點に於いて其の論證は倒れざるべからず。其の論證に曰はく神といふ概念は必然に其の存在するといふことを含む何となれば神は最も實有なる最も完全なればなりと。然れども存在といふことは概念の内容の一部分を成すものにあらず換言すれば完全の相の一部分を形つくるものに非ず即ち存在は一概念の内容を成す性質として其れに就い

て言ひ現はさるべきものに非ず。故に其の概念を分析するも其の中より存在といふことを取り出だすこと能はざるなり。譬へば百圓の金子は其れが唯だ吾人の思に在るも或は實物として存在するも百圓は即ち百圓にして百金といふ概念の内容に少しも異なれる所なし、存在は唯だ其の内容に附加したるの見方なり、即ち存在すと云ふは総合的判定なり、故に其の内容を如何に分析するも其の中より存在といふことを取り出だし得ざるなり。

次に神學者の慣用し來たれる世界論に基ける論證は因果の關係を根據となせり、其の説に曰はく此の世界は其の存在する原因を有せざるべからず、而して其の原因是れ即ち神なりと。されど此の論證は唯だ吾人の經驗の範圍に於いてのみ即ち相待的のみ用ひ得べき概念を絕對的に用ひたる點に於いて誤れり。因果と云ふ概念は一現象と他現象との關係に就きては即ち現象界に於いて含蓄的には正當に用ひらるるも、一切の現象の絕對的原因といふ如きものは吾人の知識の範圍に入り來たらざるものなり、一言に云へば此の論證は原因といふ範疇を正當に用ひらざる範圍に用ひたるものなり。假りに因果の曉は超越的に用ひ得

べきものとするも尙ほ神といふ原因を以て極めて完全なるものと稱すること能はず、何となれば此の世界の完全なりといふことは吾人の證し得ざる所なるを以て其の原因も亦必しも完全なるものとは云ふことを得ざればなり。若し其を完全なるものと云はんには實體的論證に立ち返るより他に途なし、而して實體的論證の立ち得ざることには上に述べたるが如くなり。

第三に言ふべきは從來慣用し來たれる目的觀上の論證にして其の趣意は吾人の製造物に準へて神を宇宙の製造者と見るにあり。其の説に曰はく宇宙は其の方便と目的との相應じたる關係に於いて知慧ある者の存在することを證すと。今假りに此の論證を以て有効なるものとするも其は唯だ世界の事物に其の如き秩序を與へたるものあることを示すのみにて萬物の創造者の存在を證すること能はざること猶一器物に就いて其を製造したる者ありといふも其の器物を成す物質を作れるものと云ふ意味にては志かいふこと能はざるが如し。此の故に縱し人爲の製作物に準へて宇宙を視る論法を正當なりとするも其は唯だ万物に秩序を與へたる者の存在を證するのみにて造物者の存在を證するものに非ず。故に

造物者の存在を證明せんとせば世界論上の論證に立ち返らざるべからず、而して世界論上の論證も實存學上の論證も共に根據を有せずと見れば從來の純理哲學に於ける神の存在の證據論は到底皆無効なるものと云はざるべからず。

〔三七〕 此くの如くにしてカントは現象界を超越せんとする形而上學を打破し去れりと考へたり。斯く超越的に吾人の悟性の概念を用うることに正當ならぬことは以上論じたるが如く純理哲學としての心理學世界論及び神學に於ける立論の誤謬に陥れることを以ても知り得べく特に世界論に於ける理性の矛盾はよく其の如き概念の超越的使用の正當ならざることを示すに足るものなり。

然れども理性の觀念を用うるといふことが(上にも已に云へる如く)全く不自然なることにはあらず、吾人が事物を考ふる上に於いては其の如き觀念を用うることが却て一種の便利を與ふるものなり。例へば吾人が精神的現象を考ふるに當たりて恰も其が一の靈魂てふ實存に基するか、の如くに見れば其の現象に統一を與へて考ふる上に於いて一種の便利あり、又世界をも全き一體を成すものとし而して神といふ絕對的原因が在るか、の如く思はば一切の事物を統一して考ふる上に便利あり。然れども事物の實際が其等の觀念の示すが如くありと云ふにあらざ、唯だ恰も其れらの觀念の示す所の如くに事物を考ふることが其を考ふる上に於いて最も便利なる方法なりといふのみ換言すれば其等の觀念は吾人の知識の理想として思ひ設くるに止まりて吾人の現に知識する現象界が如實にしかありといふ意味にはあらず。其の如き絕對的統一を有する一全體を標準として、恰も其の如きものなるかの如く、吾人の經驗する一切の現象を見る是れ即ち知識が其の理想に向かひて進歩し行くものなり、故に其の如き理想と見て此等の觀念を取り扱ふは決して不都合なることに非ず。尙ほ換言すれば此等理性の觀念は吾人の研究を指導するもの (regulative Principien) としては正當に用ゐらるれども、唯だ其れを其の如く研究の指導若しくは知識の標準として事物を恰もしかあるかの如くにのみ見ず世界は如實にしかありと見て而して之れを以て吾人の知識の對境を形つくるもの (constitutive Principien) とするが故に前に述べたるが如き形而上學上の困難に陥るなり。斯く唯自然界を研究するの心得としては其れに統一を與ふる目的作用即ち意匠ありて其れをして然らしむるかの如く見るは決して不都合

四洋哲學史 第四十六章 イマヌエル・カント

なることに非ず。此の研究の心得を云ふの趣意はカントが『純理性批判』の最後の部分なる研究法論(Methodenlehre)に於いて論述したる所にして、目的観の論は尙ほ後の著述に於いて更に開發したる所の論點なり(Methodenlehreに對し"transcendentale Aesthetik"及び"transcendentale Logik"を合して"Elementarlehre"と名づく、但し"Elementarlehre"は附屬物たるの位地に在り。此の區分及び名稱はプラトニヤ派に慣用したるもの。)

〔二八〕かくの如く神、自由意志及び靈魂の不滅に就きて吾人は純理性の上にて論理的知識としては之れを證明すること能はず。其等の純理哲學的論證がかくして打破せられたると共に其の反對も亦均しく論證せらるゝこと能はず、何となれば其等の存在を證することが超越的なるが如く其等の存在せざることを示すことも亦均しく超越的なればなり。畢竟するに吾人の知識は其の如き超越的境界に達せざるものにして其の存在を證すること能はざると共に其の存在せざることをも證すること能はず、即ち理論上の知識としては唯物論も無神論も共に倒れざるべからず。カントの考ふる所によればかくの如く一切其等の立説を拂ひ去りたることが哲學に於ける彼れか知識論の一大功績なり、純理的知識として

は有神論も立せられず又無神論をも唱ふべからざる代りに吾人は全く新しき路を取りて進むとを得、而して此の新路を進み行くに於いて聊かの障礙も其の途に横はり居るとなし。謂ふ所新しき路とは何ぞや、是れ即ちカントが其の『實行的理性批判』に於いて取らんとしたる所のもの即ち道德論なり。

道德論

〔二九〕カントが其の道德論に於いて探究せんと欲する所は吾人の意志の活動に於いて如何なる総合的判定が先天的に立てらるゝかど云ふとなり。即ち彼れが其の知識論に於いて論じたる所は知的理性が如何なる先天的形式を以て吾人の知識を成り立たしむるの要素となすかどいふこと(詳しくは直観、悟性及び理性が吾人の知識を成す上に如何なる職分を有するかどいふこと)に在りしが、道德論の問題は吾人の意志の活動の形式として如何なる規律を先天的に立し得るかどいふとなり。知識論に於いて吾人の發見したる所は自然界の法則なり、道德論に於いて探究せんとする所は道德法なり、而して如何なる総合的判定が先天的に立てらるゝかどいふことは是れ其の兩者に貫けるカント哲學の大問題なりと謂ふべ

し。
吾人が意志の活動に於ける法則の先天的に発見し得らるゝものは唯其形式に在ること恰も吾人の知識の成立を論ずる所に於いて其の先天的要素として掲げらるゝものが其の形式の外に存せざるが如し。カントに従へば吾人が如何なる事柄を意志するかといふことは其の事柄と吾人の意志との關係は総合的なれども經驗によりて初めて定めらるゝもの唯先天的に定め得るは其の事柄に非ずして凡べて意志の活動に遍通する規律即ち其の形式なり。而して其の規律として如何なる総合的判定の立てらるゝかといふことは是れカントの問題とする所なり。經驗を待ちて初めて知らるべき事柄を基として立てたる規律は遍通のものたることを得ず先天的といふことも遍通的といふこともを相離れざるものと見る是れカントが哲學の全幹を貫通する思想なり。

〔三〇〕カントが倫理説の目的は先天的に意志の法則を立てんとするに在り、而して彼れは意志の法則を立つるものを名づけて行的理性(理性が吾人の行爲即ち意志の範圍に於いて現れたるもの)と云へり。此のゆゑに吾人は種々の後天的な

る事柄に懸かれる吾人の幸福(快樂)を以て倫理の法則の基礎とすること能はず、何となれば如何なるものが吾人の幸福となるかは各人の好悪と共に異なりて之れに關しては何等の遍通的法則をも先天的に立つること能はざればなり。又各人の氣質、欲求、才能等をも其の基礎とすること能はず、此等も亦人によりて異なりて先天的に定め得らるべきものに非ざればなり。嘗に然るのみならず若し吾人の欲求其のものを以て道徳法の基礎とせば特に倫理の法則を要せざるべし、何となれば各人が自然に其の欲する所に従うて行爲すること、是れ取りも直さず其の徳行たるべければなり。則ち行爲が吾人の幸福の上に、才能の上に、及び其の他の事柄の上に及ぼす所の結果を以て倫理の大本とすること能はず、何となれば其等の結果は因果律に従うて必然的に生じ來たるものにして吾人の意志によりて決定すべからざる所なればなり。吾人の行爲の結果は我が思ひ設けざる所に由づることありて我が意志に對して見れば偶然なる事情によりて決定せらるゝこと屢なり、故に其れらの結果に道徳の法則を基かしめ其れによりて吾人の道徳上の價値を定むべしとせば其の價値は我が意志以外の出來事にかゝると云はざるべか